

一六種程度の升型列帖装本に毎半葉一〇〜一一行書  
写したもので新古今集卷一〇(鞍旅900・901)の七行分存。

『新撰古筆名葉集』に「石山切」とするが、古筆本  
家伝来『藻塩草』の「西山切」に従う。現存の切は  
いずれも卷一〇以降で、下冊が分割されたものか。  
まま金泥下絵を施した断簡を見るが、後書きである。  
小品ながらなかなか個性的で力強い筆跡、鎌倉  
中期以前の写と言ふところであろう。伝称筆者藤原  
清範(？—一二二一—?)は『明月記』にもしばしば  
登場する能書で、その女に、河内本源氏物語夢浮橋  
書写を依頼された禅尼がいる。(高田)

(釈文)

さ、のは、みやまもそよにみたる  
なりわれはいもおもふわかれきぬれば

帥の任はて、つくしより  
のぼり侍けるに

大伴旅人

こ、にありてつくしやいつく白雲の  
たなひくやまのにしにあるらし

## 20 新古今和歌集断簡 鎌倉時代中期写

(伝藤原為家筆) 軸装 一幅

藍内曇斐紙。縦二四・〇、横九・六種。列帖装、  
丁のウラ面か。鎌倉時流行の書風でさらりと書き流  
し、朱引・朱点あり。新古今集卷一三1154・1155に相当。  
現在五行分存だが一面七〜八行の本であろう。第二  
首目初句「あふまての」は「あすまての」の誤りか。  
内曇料紙に写された伝為家筆の新古今集切には四  
半のもの一種(古筆学大成一〇)、六半切のもの一種  
(古筆切目安)が知られている。掲出の切は、いず  
れとも合致せず、今後の調査に期待するところ大。

藤原為家(一一九八—一二七五)の筆跡では無論な  
く、同時代かやや下った頃の書写と思われる。

畠山牛庵の極札を付す。(高田)

(釈文)

こひしさにけふそたつぬるおくやまの  
ひかけのつゆにそてはぬれつ、

題不知 西行法師

あふまてのいのちもかなとおもひしは  
くやしかりける我こ、ろかな

## 21 新勅撰和歌集 上 鎌倉時代末期写

(伝後伏見天皇筆) 列帖装 一冊

藤原定家撰。寛喜二年(一二三〇)に選進の企てが  
あり、天災に加え承久の乱や天福二年(一二三四)後  
堀河院への仮奏覧の直後の崩御、定家の草稿焼却な  
どがあり、成立過程はかなり複雑である。文暦二年  
(一二三五)完成。新古今風の妖艶な歌は減少し、か  
わって平淡優美の詠が多い。幕府関係者に配慮して  
かなりの数を入集させ、宇治川集の異名を持つ。

掲出本は全二〇巻を上下に分写する勅撰集の通例  
にしたがった上冊一〇巻分、列帖装。表紙、浅縹地  
に瑞雲を織り出した金欄。銀切箔を密に蒔いた見返  
しと共に後補。縦二三・六、横一五・三種。外題な  
し。内題は「新勅撰和歌集」。本文料紙、斐紙。一面  
九行歌一首二行書、書入なし、墨付一三九丁。卷一  
春上46番歌二行分削去の跡あり、その理由不明。こ  
の集は成立過程を反映して草稿本第一類から精撰本  
第四類に分たれるが、それらのうち第四類に属し、  
特に定家自筆本の模本と相近い。掲出本を収める箱  
の蓋表に「新勅撰<sup>上</sup> 後伏見院御筆」と墨書するが、  
識語・極札・折紙の類なく何によってかく記したか

不明。書風はたしかに鎌倉末期の伏見院流に棹さす  
ものである。(高田)

## 22 新勅撰和歌集 下 鎌倉時代末期写

列帖装 一冊

下冊一〇巻分に相当。表紙、萌葱色地に金泥の霞  
引、草花下絵を描いた斐紙で、楮素紙の見返しと共  
に後補。縦二三・一、横一五・二種。外題なし。内  
題「新勅撰和歌集卷第十一」。本文料紙、斐紙。一面  
九行歌一首一行書を原則とするが、八行もしくは一  
〇行の部分あり。二筆による寄合書で墨付一六〇丁。  
訂正・補入若干、訂正は第二の手の部分に多い。虫  
損のほとんどない美本ながら、全一二括のうち第五  
括の一部八丁分が第八括に誤綴され、卷十四恋四の  
4893—4904すなわち一二首二丁分落丁、卷十六雑一の1078  
を脱す(目うつりか)等、書誌的に欠陥が見られる  
伝本である。精撰本第四類定家自筆本の模本に近似  
し、前掲本と同じく鎌倉末期の写。  
新造の桐箱に「新勅撰和歌集 卷下<sup>藤原定家撰</sup>  
鎌倉末期古写本」と墨書、森銚三の筆である。(高田)

## 23 新勅撰和歌集断簡 鎌倉時代後期写

(伝二条為氏筆) 軸装 一幅

斐紙。縦二三・一、横一三・九種。中心部分に折  
れ目あるも原態は列帖装、丁のウラ面。新勅撰集卷  
一七雑二1175・1176を八行に写す。

『新撰古筆名葉集』為氏の頃に「同(四半)新勅撰  
歌二行書」に相当するものであろう。二条家の祖為  
氏(一二三三—一二八六)と伝称されるが、それより  
は若干下る写しか。藤井隆・田中登『続国文学古筆

切入門』二八に掲出断簡のツレ。

古筆了音(二六七四—二七二五)の極札を付す。その裏に「癸巳九」と見えるのは、正徳三年(一七一三)癸巳九月鑑定の謂。(高田)

(釈文)

遠山幽といへるこゝろを

入道二品親王道助

はつせ山あらしのみちのとをければ  
いたりいたらぬかねのをとかな

暁述懐の心をよみ侍ける

正三位家隆

おもふ事またつきはてぬなかきよの  
ねさめにまくるかかねのをとかな

### 24 風雅和歌集断簡 南北朝時代写

軸装 一幅

楮紙、縦二七・一、横一九・四。元来卷子本に歌一首二行書。卷二春中203、205をゆつたりと写したもので、淡墨界五条を引くところが注目に値する。

すなわち上より第一と第二の界間約二・〇、以下一・六、五・八、一三・一、一〇・一、第一・第五の界にあわせて歌を書き、第四の界から作者名を記す。掲出の切には詞書を欠くが、おそらく第二の界を目安に歌より二字下げとして写したのであろう。歌合料紙の如き特殊な紙を用い卷子本に仕立てたところ、格別の目的をうかがわせるに足る。書風から見て南北朝の末あたりか、宸翰様を汲む大らかな手である。「風雅集」最古伝本の一。

特殊料紙を用いた例として、掲出の切にきわめて近いのが伝頼阿(二二八九—二三七二)筆の二軸(逸翁美術館蔵国文学関係資料解題)である。卷一七雜

下を二卷に分写し、歌一首二行書、五条の界と歌・作者名との対応も同様の形式をとる。ただし書風は、ほぼ同時代と推されるもののまったくの別手。前掲解題では紙幅のせいかな十分な記述がなされていないので断定しにくい。おそらくは「風雅集」を何筆かで寄合書したツレと推される。(高田)

(釈文)

伏見院御歌

はなのうへのくれゆく空にひき、き、て  
声にいろある入あひのかね

徽安門院

そことなきかすみの色にくれなりて  
ちかきこすゑの花もわかれす

進子内親王

やまうすき霞の空はや、くれて  
はなの、きはにほふ月影

### 25 定家八代抄断簡 鎌倉時代中期写

(伝藤原為家筆) 軸装 一幅

斐紙。縦二四・二、横一五・四。おそらく列帖装二冊に分写したものの下冊、丁のウラ面にあたる。卷十一恋一844、847上句を写し、裏面に「在原元方」

等の文字が見える。八代集より約一八〇〇首を抜出、勅撰集に準じて配列した全二〇巻の秀歌撰で、藤原定家の好みや構成方法を考へる上でも重要な集。建保三年(一二二五)正月から同四年正月の間の成立と考へられる。「八代知頭抄」「二四代抄」等の書名で伝わる本も存し、鎌倉期にさかのぼる古筆切も数点ある(古筆学大成一六)が、掲出断簡のツレは見当たらない。料紙・書風とも別手ながらしかし酷似する卷一八の零巻一軸が徳川美術館に収められ、巻末に

明暦元年(一六五五)古筆了佐(一五七二—一六六二)が藤原為家筆と認めた鑑定識語を付す。掲出の切にも、同じく了佐の極札「為家卿(琴山)」が添えられていて興味深い。鎌倉中期の書写と推される現存最古資料の一。(高田)

(釈文)

業平朝臣

古  
みすもあらず見もせぬ人のこひしくは  
あやなくけふやなかめくらさん

返し

よみ人しらす

古  
しるしらぬなにかあやなくわきていはん  
思のみこそしるへなりけれ

女に遣ける

清慎公

拾  
あなこひしはつかに人をみつのあはの  
きえかへるともしらせてしかな

返

中将更衣

なかつらしと思こゝろはみつのあはのよそ

### 26 松花和歌集断簡 南北朝時代写

(伝浄弁筆) 軸装 一幅

斐楮混漉。縦二四・〇、横一三・九。綴穴は見えないが列帖装のウラ面か。浄弁(？)一三四四

—?)の撰と推され、後醍醐天皇二条為世等二条派の歌人達の詠を多く収める「松花和歌集」は、現在卷一・四・五等の内容が知られるのみで完本は伝存せず、古筆切としては『新撰古筆名葉集』浄弁の項に「自撰巻物、歌二行書」と見える卷子本と、伝兼空上人(頼阿門弟、生没年不詳)筆下田屋切の二種が名物切とされ、いずれも南北朝を下るものではない。掲出の切は古筆別家(了仲か)の極札に「浄弁律

師」と記されるが、もと冊子本であることや書風から、下田屋切と判明する。現存一〇葉に満たない稀少性、『松花和歌集』成立時期とさほど隔たらぬ頃の書写であるのに加え、巻三巻頭の内題の明記される点も、高く評価されてよいであろう。なお下田屋切の名は、堺の連歌師下田屋宗柳に由来するか（藤井隆・田中登『国文学古筆入門』）。（高田）

（釈文）

### 松花和歌集巻第三

秋歌

文保百首歌たてまつりける時

前大納言為世卿

けさのまにをとばかりまつふきかへて

また身にしまぬ秋のはつかせ

権中納言為定卿

けさよりは身にしむ風のふきそめて

たかためならず秋はきにけり

## 27 類聚歌合断簡 二条切 平安時代後期写

（伝藤原俊忠筆） 軸装 一幅

楮紙。縦二五・九、一五・六。高さ二二・四、幅二・六。種ほどの淡墨界を施し、紙面中央下部に「財」朱印の痕跡がわずかに残る。

源雅実（一〇五九—一一二七）を中心とし、大治元年（一一二六）頃まで編集が続けられたと推される類聚歌合の原本で、左側六行分は寛平五年（八九二）以前成立寛平御時后宮歌合161・162、右側二行は天元四年（九八一）四月二六日小野宮右衛門督家歌合11の判詞と12の上句。二つの歌合断簡を寄びツギしたものである。萩谷朴『平安朝歌合大成』にいずれも田中家蔵として紹介。

類聚歌合は数筆の寄り合い書き草稿本と思われ、伝藤原忠家（一〇三三—一〇九一）筆柏木切、掲出の切のように俊忠（一〇七三—一一二二）筆と伝称される二条切、その他伊丹切の名もある。忠家・俊忠とも、俊成・定家につながる歌の家の祖として筆者にとりあげられたのであろう。（高田）

（釈文）

五番 左

つれもなき人をこふとてやまひこのこた

ふるまでもなけきつるかな

右 をの、よしき

わかこひはみやまかくれのくさなれや

しけさまされと、ふ人もなし

左なをおやをわすれぬ 右なをちとせまて

おとつれぬ

いまこむといひし許をいのちにて松の

## 28 時代不同歌合 室町時代初期写

列帖装 一冊

表紙、紗綾形地に卷龍の金欄。縦二四・五、横一七・四。外題は金泥下絵題簽に「時代不同歌合」と墨書、内題も同じ。本文料紙、斐楮混漉紙。八代集の歌人一〇〇名を選び、各人三首合計三〇〇首を左右に分つて一五〇番の歌合とする。左方に古い時代の、右方に新しい時代の歌人を配するので「時代不同」の名がある。なお三〇〇首中一〇〇首以上を後鳥羽院自ら撰した『新古今集』より採っている。

時代不同歌合は前後二系統に分かれ、前稿本は文暦二年（一一三四）の、後稿本は嘉禎二年（一一三二）延応元年（一一三九）の成立で、掲出本は前者に属し、岩波文庫『王朝秀歌選』に翻字された書陵部本

に近い。鎌倉期製作にかかる絵巻の類を別とすれば、南北朝期書写の万里小路仲房筆本（静嘉堂文庫蔵）に次ぐ古さの伝本であらう。（高田）

## 29 〔後鳥羽院御自歌合〕 室町時代前期写

卷子 一冊

表紙、松葉色地に二重蔓牡丹唐草金欄、改装。金銀霞引草花模様題簽を押すも文字なし。見返、銀霞引・金銀切箔・銀泥菊花模様の金布目紙。料紙、楮紙。間似合紙にて総裏打を施す。紙高二七・四。全一

二紙。内題「撰歌合」嘉祿二年四月廿一日 家隆卿賜之判進云々

歌一首二行書。畠山牛庵極札「撰歌合」四辻殿庶流季春卿

〔牛庵〕のほか、これと同内容の簡略な鑑定書一紙あり。季春（？）一四八〇出家の筆跡資料と比較して同筆とは断じがたく、掲出本の書写は季春の時代か、むしろ若干古いようである。承久の乱により隠岐へ移された院が、自詠二〇首を四季・雑・恋・法

文の一〇番に配し歌合としたもの。巻頭に「嘉禎二年四月廿一日」とあって成立時を知りうる。この歌合には、院の隠岐配流後も交渉を絶やさなかつた家

隆の丁寧な判詞が付いており、彼の歌合判詞や歌論は少いので貴重とされる。この自歌合は『後鳥羽院御集』末尾にも付載され、掲出本はそれに近似する

本文を持つ。二重箱入、外箱に「平瀬蔵品」（大阪平瀬家か）の印記。（高田）

## 30 猿丸集断簡 平安時代後期写

（伝藤原公任筆） 軸装 一幅

金銀揉み箔散らし薄藍色斐紙、縦二一・二、横一五・六。種。元来一面七〜八行書写の列帖装であらう。

藍紙本万葉集に似た澹染紙を用い、書風も藍紙本及び伝藤原伊経筆尼子切に類する。一一世紀後半の写で猿丸大夫集の伝本としては最古。通常行成の筆と伝称され、久曾神昇『西本願寺本三十六人集集成』に八葉翻字、小松茂美『古筆学大成』一七に同じく八葉凶版掲載するが、両者出入あつて現在のところ一〇葉が知られ、掲出の切は両著及び『書道全集』(一四)に紹介されている。

猿丸大夫集は、前半に万葉集を主体とする古歌、後半に古今集から多くを採る雑纂古歌集を配したもので、個人の集ではない。通説では書陵部甲本、西本願寺本等を含む第一類と、書陵部戊本・歌仙家集本の第二類とに大きく分類され、伝公任筆猿丸大夫集切は第一類西本願寺本に最も近い。詞書中に「侍り」を多用する点もこの系統の特徴である。

掲出の切は一二世紀初頭の西本願寺本三十六人集成立時期に先行するかと思われ、したがって祖型を考ふる上で重要な資料と言えよう。なお現存の切には、そのほとんどに上部の損傷が見られ、かなり早い時期の補修と巧妙な補写がなされている。(高田)

(釈文)

あひしりて〔はへるをん〕

(次册)

まへをまかりわたるとてくさをむす

ひていれはへりとて

いもか、とゆきすきかねてくさむすふ

かせふきとくなあはむひまてに

なたちはへりけるをむなの許に

しなかとりゐるな山ゆすり行みつののみ

よにいりてこひわたるかも

### 31 定頼集断簡 四条殿切 江戸時代初期写

(伝藤原定家筆) 軸装 一幅

茶地に青海波・格子等を刷り出した蠟箋。縦一六・八、横一五・五種。綴穴が料紙右端に残り、丁のオモテ面たること歴然、後述の定家筆本でも第二三丁オモテに相当する。加賀前田家旧蔵、尊経閣から出光美術館に移った定家筆「四条中納言定頼集」の忠実な模本で、これも前田家に伝来したもの。昭和初年に分割されて四条殿切と呼ばれる。

原拠資料の定家筆本は、楮素紙・銀切箔散らし薄様・墨流し料紙等を混用し、ありあわせの料紙を用いてとにかく一本の転写をとげようとしたらしく見え、その奥書に「不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>老病之極熱<sub>一</sub>、一日終<sub>二</sub>書写之功<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>慕<sub>二</sub>故人<sub>一</sub>也」とした定家の思いが伝わってくるような典籍であるが、この四条殿切もまた、透写のきかない料紙に入念の模写を行い、舶載唐紙かと推される珍しい蠟箋を使用して、原拠本への深い傾倒が感じられる。定家筆本の迫力と生彩に勿論及ばず、また本文資料としての重要度も低い、模写や料紙等の点から興味は尽きない。江戸初期の写か。なお陽明文庫蔵「大手鑑」には、古筆切の台紙として種々の加工紙が用いられ、その一つに四条殿切とほぼ同じ色と文様の蠟箋が見られるのは、注意しておいてよいことであろう。(高田)

(釈文)

このころのこのはを見てもなくさめよ  
つねならぬよそつねならぬこと

返し

さためなき世はうき身こそかなしけれ  
つねならぬ世をつねに見るへき

ひめ宮うせ給て又の年大納言  
はつせにまいり給ていつみ河  
のもとにてこそみたけより  
かへり給けるにこ、にてひめ  
宮の

### 32 「伏見院御集」断簡 広沢切

鎌倉時代後期写 (伏見天皇自筆) 軸装 一幅

歌集断簡。縦三一・〇、横九・九種。ただし第一首と二首との間に継ぎ目あつて、二紙を呼び継ぎしたもの。料紙、楮紙。

伏見院(一一二六五—一二二七)詠草自筆原本としてゆるぎない評価を得ている広沢切の、新出の一葉。中世を代表する書の名手が卒意の筆跡に見せる自由な境地は、書道史的にも価値が高い。

極札に筆者を後伏見院とするのは広沢切にまみ見られ、『新撰古筆名葉集』が後伏見院の項に「杉原紙巻物、父王ノ御歌二行書」と記す如く、むしろ伏見天皇筆とはしないのが一般でさえあつた。他に尊円親王(一二九八—一三五六、伏見院第六皇子)と認められた例もある。鑑定印「養心」、神田家所用で幕末、明治の極めと思われる。

従来知られていない詠草であり年次を特定する材料に乏しいが、嘉元二年(一二三〇四)父帝後深草天皇、同三年叔父龜山天皇、徳治二年(一二三〇七)妹君遊義門院始子内親王と近親者が相ついで世を去った頃の歌か。既知の伏見院御集中の詠では、特に嘉元二年除夜の作と掲出資料の二首目との類縁性が感じられる。

二紙の呼び継ぎではあるが、料紙や墨色は同質と認められ、両者遠く年月を隔てたものではあるまい。

あるいは同一巻の首尾から一首づつ切り出して継いだものか。(高田)

(釈文)

春雨

あさみとりしほれし花もあとなくて  
やよひの山の雨そのときき  
人の世のあまたわかれをさきたて、  
けふそことしのとしはくれぬる

33 「未詳歌集」断簡 金剛院切

鎌倉時代後期写(伝亀山天皇筆) 軸装 一幅

楮紙に金銀泥にて草花・土坡・雁・霞等の下絵を施す。縦二六・七、横一三・二。元来卷子本で、鎌倉末期から南北朝にかけての、裝飾料紙を用いた定数歌詠進資料と思われる。

金剛院切は現在のところ九葉の存在が知られ、亀山天皇(一二四九—一三〇五)を伝称筆者とするが、二条家主導の嘉元百首・文保百首・正中百首等に関わるもので、相当高い身分の女性の詠歌ではないだろうかと推されている(別府節子「金剛院切に関する一考察」和歌文学会平成五年二月例会発表)。下絵料紙に散らし書き、題・詠者名なしの女房懷紙作法にしたがって書かれた典雅な古筆であり、散逸定数歌資料としても第一級の価値を持つ。「金剛院切」の名は、亀山天皇陵の浄金剛院によるか。

なお、この時代のものと考えられる裝飾料紙・散らし書きの古筆切は他にも類例あって、伝後宇多天皇筆桜井切をはじめ、亀山天皇・後醍醐天皇など大覚寺統の天皇を伝称筆者とする宸翰様の資料であるところが注目されよう。

古筆了音(一六七四—一七二五)の極札あり、了

音は古筆家歴代中目利の評の高かった人物。(高田)

(釈文)

すまの浦やせきのときしも

ゆるさぬに浪ちはるかに

すめる月かな

くれ竹のふしみのさとの

秋かせに夜さむかさねて

ころもうつ也

34 万葉代匠記序 元禄元年頃写

(契沖自筆) 卷子 一軸

白茶色桐葉織文薄絹表紙。見返し、金銀砂子撒き。外題なく、内題「上水戸源相公萬葉代匠記序」。紙高、二九・九。契沖が万葉代匠記(以下「代匠記」と略称)を完成させるまでの経緯は、通常、①徳川光圀の下河辺長流への万葉注釈書作成依頼、②長流の着手と発病、③長流の推輓により親交ある契沖へ改めて水戸側より依頼、④契沖の起稿、⑤長流死去、⑥代匠記初稿本の成立と献上、⑦光圀の不満と改稿の要請、⑧改稿した精撰本の成立と献上、の順に考えられてきたが、再吟味の結果、④は①をも遡ると考えられる(拙稿「万葉代匠記の起筆年次」『文学』昭和五四年七月)。つまり長流と契沖とはそれぞれに万葉注釈に励んでいて、契沖(一六四〇—一七〇一)は、長流(一六二四—一八八)発病のあと、先の③⑤⑦⑧の順に推移したのであり、この代匠記序は⑥に際しての光圀(一六二八—一七〇〇)への献上書である。献上された序は当然に水戸側に渡った筈であるが、現在、円珠庵に一通とこの一通が、それぞれ自筆本として遺っている。控えとして写し置いたのであろう。水

戸側の学者で契沖に傾倒していた安藤為章(一六五九—一七一六)の『年山紀聞』に「元禄はじめのころの作」とある。序の内容は、同文の円珠庵本が岩波版『契沖全集』第一巻に全文翻印されているが、これは紙高二三・八。契沖本が既に契沖仮名遣で書かれているのに、本書は「すくなきをおきて。↓をきて」「をしむへきこと↓をしむ」「しほたれぬれとも↓しをたれ」などと定家仮名遣に書かれていることである。初稿本代匠記の原本本体は戦災でほとんど焼失したが、朝日版全集によって、仮名遣が移行していく過程を見ることができ、序は円珠庵本と比較して本書の方が前段階を示すものと言うことができる。池田利夫旧蔵の寄贈本。なお、精撰本序は漢文で書かれているが、自筆本序は伝わらない。(池田)

35 万葉集問答 安永七(天明二年)写

(田中道麿問本居宣長答自筆原本) 袋綴 四冊

安永六年(一七七七)二月一日より天明二年(一七八〇)に至る田中道麿と本居宣長との間に交された万葉集に関する問答の自筆稿本のうち四冊で、両者間の問答を整理した『万葉問答抄』を時期的に継ぐもの。一連の稿本二冊は諸家に分蔵され、すべて現存するが、この四冊は関戸守彦氏旧蔵である。楮紙共紙表紙の打付書外題に「万葉集問答 下」(安永七年)、「疑葉拾遺/戊八月下旬」(同)、「諸巻問答/戊十二月下旬」(同)、「疑問/寅五月中旬」(天明二年)とある初二冊が、縦一五・五、横二一・五。第三は横が約三耗、第四では縦横とも各一耗ほど短い。内容は、万葉集諸巻の、主に語句の解釈につい

ての疑問を道磨が書送ったものに、宣長が、予め余白にされているところに考勘を記して返却しており、一部に朱筆がある。両者の真摯な問答を通して、研究が次第に充実の度を加えるのを見ることが出来る。なお、掲出本は筑摩版『本居宣長全集』の第六巻と一四巻に翻印されている。(池田)

36 詠歌大概 天正元年写(紹巴筆)

列帖装 一冊

藤原定家の著、承久の乱(一二三二)以降成立か。『詠歌大概』(歌論)と『秀歌之体大略』(秀歌例一〇三首)より成る。室町、江戸時代に尊重され、伝本・注釈ともに多い。表紙、縹色地に金泥にて雲・秋草などを描いた斐紙。縦一七・二、横一七・七種の升型本。外題、素紙題簽に「詠歌大概 紹巴筆/未来記/雨中吟 二十六 合冊/百人一首水瀬兼成筆」と墨書、『未来記』以下を一括して納めた箱にでも貼ってあったものの転用か。詠歌大概は歌論の部分が漢文体であるか読み下し仮名文であるかによって二系統に分たれる。掲出本は漢文体で、仮名文のものより古い系統、明応本(古典大系底本)とは秀歌例の歌順に小異あり。奥書によれば、天正元年(一五七三)九月九日、山崎井尻孫左衛門乗助に書き与えたもの。「過にし夏のはしめ上京中けふりとなれるまよひに此所にくたり彼家のうしろの山寺に住ける」と見えるのは、紹巴伝記研究の一資料としておもしろい。(高田)

37 「秀歌之体大略注」 室町時代後期写

(伝三条西実隆筆) 袋仮綴 一冊

『秀歌之体大略』の証歌に注を付した歌学書。手控え草稿本らしい趣あり。表紙、本文共紙。縦二一・一、横一六・九種。外題、表紙左肩に本文と別筆にて打ちつけ書「大綱 奥欠卅三件」。内題なし。一面九一・二行書。作者名と証歌の初句を掲げ、二字下げの注を施す。行間及び上下の余白に注を追記、また塗抹訂正あり、いずれも本文同筆と思われる墨書。墨付三一丁、中途に白紙一丁。本文料紙、薄手楮紙。証歌一〇三首全体の注の後、特に70・80番歌については項を改めて再度詳しい注を書く。その他小野篁や資人の考課について『続日本後紀』を抄出付記している。注釈にあたって用いられた『秀歌之体大略』は明応四年本(古典大系底本)と歌序の異なるもので、後者の歌番号で示せば、6、10、7、9の順である。誰の説か出典が何かを明示していないが、注の内容は、堯孝や宗祇の意見と一致するところがあり、細川幽斎(一五三四—一六一〇)の注以前のものとして、また三条西家において作成された草稿として、興味深い。

帙外題に「三条西家本 和歌大綱 三条西実隆自筆草本」とあり、見返に貼付けられた小紙片「西三条」の朱印が存しその伝来については帙外題が正しいけれども、『和歌大綱』の書名は誤り。実隆の筆蹟によく似ていて、彼の周辺か、もしくははその書風を伝えた三条西家における書写であろうことは疑えないにしても、実隆自身の手ではなからう。(高田)

38 初心用意条々 南北朝時代写

(伝二条為重筆) 列帖装 一冊

金銀箔散らし斐紙表紙。縦二二・七、横一六・三種。古雅なものなれど後補であろう。外題なし。見返本文共紙。本文料、斐紙。巻首に遊紙一丁あって次丁ウラより毎半葉八行二二字程度に書写、歌一首二字下げ二行書き、内題「初心用意条々」。

墨付一一丁一括の列帖装、後述のように一丁分脱と思われるが、遊紙の状況から見て小篇のまま単独で伝来したものか。

初心用意条々は二条為世(一二五〇—一三三八)の撰らしく、結題・本歌取の注意点を主として藤原為家の説に拠りつつ記したもので、「和歌用意条々」の題もある。すべて六項目の短い歌学書ゆえ、他と合綴合写されることが多い。たとえば『和歌古語深秘抄』巻一〇末「和歌用意条々」、『和歌雑書』(京都大学)中の「初心用意条々」など。巻末に「和歌秘蜜相承条々 前重相判」と記す。

箱書および古筆了珉の極札に二条為重(為世の孫、一三二五—一三八五)筆とあり、為重と同時代かやや下った頃の写しと思われる。『隆源口伝』等と合写された尊経閣文庫本の奥書に「為重卿自筆以本書写之了」と見えるが、直接関係はなからう。

歌学大系所収本と比較するに、第一項「可詠題事」のうち真観の歌とその前の説明を欠き、その他字句に小異が多い。また第五項の大半がなく、現在の第九丁の次に一丁分の脱落が想定され、元来は墨付一二丁であった。なお極札裏面に「鳥子四半本墨付拾式枚<sup>丙子</sup>了珉」と記し、元禄九年(一六九六)丙子以降の落丁と判明する。この落丁を別とすれば、本文

の異同のすべてを掲出本の側の誤写転訛と断ずることともむつかしく、諸本中屈指の古さを持つものだけに諸伝本との精密な比較が求められるところ。

(高田)

39 井蛙抄 天文一四年写

袋綴 一冊

和歌四天王の一人頓阿(一二八九—一三七二)が貞治三年(一二六四)以前にまとめ上げた歌学書。巻一—五は風体・本歌取・名所などの事項について諸説・例歌を多く引用しており、鎌倉—南北朝期の歌論集成として貴重である。また巻六雑談は、頓阿の師二条為世(一二五〇—一三三八)をはじめとする当代有力歌人からの聞き書で、和歌史研究上信頼度の高い資料。なおこの巻六を中心に独立流布したものが『水蛙眼目』である。

表紙、天藍地紫の内曇斐紙。縦二二・八、横一六・二。外題なく、内題「井蛙抄」。本文料紙、楮紙。墨による訂正、鉛白の塗抹あり。「天文十四<sup>(二五四五)</sup>乙五月写之畢」如本一返校合畢 丹三位」の書写奥書の他、明応甲寅<sup>(三)</sup>暮秋上旬の年紀ある本によって校合の由も見える。延文元年以下の本奥書あり。「丹三位」については未勘。井蛙抄は諸本間の異同が大きく、その基礎的分類も今後の課題だが、巻六の分量によって三八条本から一〇〇条本の四つに大別すれば、掲出本は六二条本系に属す。「遠□神庫」「神主」(使用者未詳)の印記。

(高田)

40 「未来記雨中吟抄」 元亀四年写

(山科言経筆) 袋綴 一冊

定家仮託偽書の注釈。「未来記」は中世に流行した『聖徳太子未来記』を意識し、禁制歌五〇首を集めて後代の戒めとしたもの。巻頭に「柿本貫躬」の署名あるも、勿論柿本人麿・紀貫之・凡河内躬恒の三者を取りあわせて作った偽名である。「雨中吟」もまた雨にかかわる禁制歌一七首を集めたものだが、これには定家真作が含まれており、元来秀歌撰であった可能性も考えられる。ともに他流非難のために二条派の歌人によって作られたか。遅くとも正徹(一三八一—一四五九)の時代には成立。「詠歌大概」「百人一首」とあわせ、「三部抄」の名がある。室町—江戸時代に重んじられ、注釈も多い。掲出本は宗祇の注の系統である。

表紙、「詠三首和歌 賢世」と読める懷紙反故を裏返しにした淡引楮紙。縦二〇・九、横一五・〇。外題、斐紙題簽に「未来記<sup>全</sup>」、内題「未来記<sup>前和歌得業生柿本貫躬</sup>」「雨中吟」。和歌一首二行書きとし平仮名にて注を施す。奥書「以或本写之 件筆者雅康卿也/元亀四 七 十四/八座藤末言経」。書写者山科言経(一五四三—一六一一)は権大納言言経(一五〇七—一五七九)の次男、故実・和歌・謡曲・医学などにも通じた多芸な公家であり、その日記『言経卿記』は文化資料として重要である。元亀四年(一五七三)には参議(八座)従三位であった。(高田)

41 詠歌大概〔聞書〕 永禄七年写

(岡田賢桃筆) 袋綴 一冊

『詠歌大概』の注釈。「聞書」とあるが誰の講釈によったものか不明。表紙、四ツ目菱に鋸歯文を織り出した緞子。縦二〇・四、横一五・八。改装である。外題、朱地鳥の子題簽に「詠歌大概」と墨書、本文と別筆だがかなり古い。「詠歌大概」は漢文体で、「秀歌之体大略」は平仮名で引用、ともに片仮名をもって注を施す。朱点・墨頭注若干。奥書「度々聞書混乱依難見分清書之下書/也 住吉参籠中見之忘炎暑/永禄七年林鐘 十六日<sup>七十一歳</sup> 沙弥賢桃〔花押〕」。畠山牛庵の極札「詠歌大概岡田堅桃〔牛庵〕、及び一古斎の鑑定書」此一冊岡田堅桃真蹟也/一古斎(印)あり。筆者岡田賢桃は武田信玄咄衆(顕伝明名録)、甲斐国在住の花の本の宗匠(歌林一枝)とされ、大永六年(一五二六)に何路百韻を興行している。掲出本奥書により生年が明応三年(一四九四)と判明する。「小汀文庫」(小汀利得)、「英 王堂蔵書」(B・H・チェンバレン)の印記。(高田)

42 老葉 零本 室町時代中期写

(伝荒木田守武筆) 卷子 三軸

連歌句集。宗祇撰。文明一三年頃、初編本成立か。巻第八雑連歌上、第九雑連歌下、第十発句の三巻の零本であるが、第十のはじめに『湯山三吟』が入っている。表紙、第八上、第九下は山鳩色無地裂。第十は藍地素糸鳳凰文緞子。恐らく第十は、『湯山三吟』の表紙を襲ったからであろうか。両者別筆。紙高二一・五。五。一。

老葉第十の奥書に「文明十七年う月 守武写」とあり、この奥書を信ずれば、書写年次の明らかなる現存最古の奥書となろうが、本文と同一筆跡とは断定しがたい。脱落が若干見られる上、錯簡が著しく、それらは元来冊子（袋綴）であったのを、卷子本に改装する際に生じたとおぼしいが、本文は、吉川家本にほぼ等しい初篇本である。守武筆ではないにしても、室町期のそう下らぬ頃の書写本であろう。吉川本の不審箇所を補うばかりでなく、第八上、「しほあひのあはとはるかに日はおちて／とを鳴はた、なみのこゑく」などの独自異文が見られる。また『湯山三吟』も、柿衛文庫本に比較すると、「花さへも」が「さく花も」、「たれしらむ」が「たれわかむ」、「冬かれの」が「霜かれの」とあるなど注目すべき異文を見る。（池田）

#### 43 賦何人連歌 文明一八年写

卷子 一軸

百韻連歌。表紙、黄土色雲形文裂（新補）。連歌懐紙の卷子改装。紙高一八・四釐。端作「文明一八年九月廿三日」、内題「賦何人連歌」。発句「野も山もきり間にせはき朝哉 二宮御方」。同日の『実隆公記』に「廿三日丑晴、今日宮御方連哥<sup>云々</sup>、予非其人數仍不参（下略）」とあり、『お湯殿の上の日記』にも「廿三日、北こうち殿よりまつ一折まいる。二宮御かたの御れんかあり（下略）」と見える。国会図書館蔵『連歌合集』所収本以外の伝本が見当らず、しかもこれは当座の懐紙と思われる。

連衆と各句数は奥に「二宮御方（尊伝法親王か）十六／勝仁（親王、後柏原天皇）十八／源大納言（足利義尚）十、兵部卿（松木宗綱）十一、滋野井前宰

相中将（教国）八、民部卿（源、白川忠宣）、山科宰相（言国）十、以量朝臣（橋、薄）六、賢房八」とあるのにより知られる。「親王」ともせずただ「勝仁」と記すのと、これが後柏原天皇の筆跡に酷似するのによると、主催者である二宮御方に対し、あるいは勝仁親王が執筆をされた当座の懐紙である可能性も考慮して良いであろう。（池田）

#### 44 新撰菟玖波集 室町時代中期写

（伝飛鳥井雅康・大内政弘筆） 列帖装 三冊

准勅撰連歌集。一条冬良・宗祇撰。明応四年（一四九五）奏覧本成立。表紙、浅葱色地金茶唐草文緞子。見返し、布目金紙に上巻は銀泥花紋、中・下巻は雲型。縦一六・六、横一七・四釐。外題・内題なし。本文料紙、斐紙薄様。每半葉一二行書写。古筆の極札に「二樂軒飛鳥井雅康卿 初卷冊／大内多々良政弘 外二卷冊」とある。大内政弘は本集成立の援助者であるが、奏覧本成立の八日前に病歿している。ただし、この伝本は中書本系統なので、危篤の報に猪苗代兼載が山口まで届けており、確かに政弘は見ているはずではあるが、病中の政弘が書写しえたところが疑わしい上に、上巻の筆者と称される雅康ともども、同一筆跡とはいえない。しかしながら、室町中期の書写本であるのは疑いがないので、中書本の伝本としては最古の部類に属するであろう。なお、伝称筆者が珍重されたためか、上巻に一〇丁、中巻に一二丁、下巻に二丁の抜取り欠丁があるほか、中巻に数箇所錯簡がある。（池田）

#### 45 「三島千句」 室町時代中期写

（伝宗祇自筆） 大和綴 一冊

連歌。表紙、雲形文金欄。縦二三・一、横一九・四釐。外題なし。見返し、金布目紙。内題「賦何路連歌<sup>第一</sup> 獨吟千句 宗祇」。発句「なへて世の風をおさめよ神の春」。本文每半葉一〇行書写。以下「何船<sup>第二</sup>・何人<sup>第三</sup>・山何<sup>第四</sup>・何衣<sup>第五</sup>・初何<sup>第六</sup>・何木<sup>第七</sup>・三字中略<sup>第八</sup>・朝何<sup>第九</sup>・御何<sup>第十</sup>」とある。

奥書はまず本文と同筆で「文明五年三月日 於伊豆三嶋千句／明応五年二月廿七日写之」とあり、次丁表に別筆で「右の千句はむかし切におもふへき人／みたり心地にわふらひし時つかまつりし／者也今一見之所悉あらぬさまの事／のみなり後童子にあたへられ候へく候／宗祇（花押）」とある。京大本以外、他の伝本の多くは、このあと「二字反音<sup>追加</sup>」として一折二二句が加えられているが、野坂元定本は掲出本と同系。三島千句は、宗祇が文明三年（一四七一）三月二二日より二三日まで独吟して、伊豆三島神社に法楽したもので右奥書や、他の同月二七日奥書本、同九年四月十日奥書本などにより、東常縁に古今伝授を受けている際、常縁の子息が風邪となった平癒を祈ったものと知られる。明応五年（一四九九）は宗祇七六歳であるが、これは自筆でないまでも、それを下らぬ頃の書写本。（池田）

#### 46 賦何船連歌 明応頃写（伝寿慶筆）

卷子 一軸

百韻連歌。表紙、藍地菊花文緞子。紙高二四・〇釐。外題なし。端作「明応九年七月六日」、内題「賦



何船連歌」。発句「柳ふく風に秋たつ都哉 宗祇」。

「連歌師寿慶都ふく連歌百韻懐紙一巻」(「琴山」)(裏印なし)の極札。寿慶筆とはにわかには判定しがたいが、明応九年をあまり下らぬ頃の能筆写本。さらに一枚ある古筆了仲の極めも「連歌師寿慶」とあるが、発句の初句を「さしわたる」とするので他本極札の混入である。連衆と各句数は、奥に「宗祇十二、政定八、兼載十二、政宣四、玄清十一、承意六、心海八、照仙六、宗碩五、吉成五、国行五、寿慶四、盛安五、阿子、丸一、古柏一」とあるのによって知られる。伝本は他に大阪天満宮本が知られるのみであり、その端作に「明応八年七月六日 於赤沢亭」とあって、開催の場を知ることができるが、天満宮本は誤写がやや目立ち、掲出本により正しうるところが多い。宗祇が越後に下る十日前の張行。(池田)

#### 47 〔宗祇名所百韻〕 室町時代中期写

(伝宗祇自筆) 袋綴 一冊

連歌百韻。師の専順の発句「花の春たてるところや芳野山」に宗祇が九九句を付けて百韻としたもの。大阪天満宮文庫本などによると「寛正五年正月朔日」と端作にあり、同年(一四六四)の成立。表紙、金茶地雲形文綴子。縦一八・一、横一一・二種。外題なし。内題「賦名所連詠」。発句の下に「専順」とあり、脇句「しら雲いつこかこむかつらき 宗祇」、以下、下に「同」列記。国名は句末右下に所々記す。巻末に「専順一／宗祇九十九」「付墨卅四句」と識す通り、三四句に合点を付す。天満宮本では「専順点墨三十七／但し点二十六あり其儘写し侍るものなりおもふに書写の機脱せしものか」とあり、静嘉堂本『連歌集書』所収本もほぼ同文を記すが、巻末に「章

甫」と、幕末の儒、藤野章甫の名を写す。掲出本には古筆了意の「宗祇法師」筆なる極札を添えるが、その真偽はともかく、在世中の時代に属する書写本と思われ、諸本中の最古写本であろう。

本文は天満宮本よりも大東急本、国会本に近いが、独自異文も散見される。「淀野の霧の↓淀路の霧の(他本)」「まつほの沖も↓松帆の浦も」「しけき若草↓しける若草」「過やらて↓過やすし」「雪見の窓の↓雪見の里の」「月やとさはや↓月やとれかし」「月を見て↓月落ちて」などがそれである。(池田)

#### 48 春夢草 永正一二年写(肖柏自筆)

列帖装 一冊

連歌句集。牡丹花肖柏自撰。永正一二年(一五一五)成立か。表紙、茶色地菊花文綴子。縦二四・四、横一七・一種。外題は白地に曾ては金箔撒であったらしい損傷のある題簽に「春夢草」とあるが、初二文字は残画のみ。見返は絹地に花と小松、川岸紅葉小鳥の各彩色画を表裏に配するが、原装かどうかは不審。内題「春夢草」。本文料紙、斐紙薄様。每半葉九行書写。奥書に「永正十二年三月中旬記之／夢庵老人(花押)」とある。

春夢草諸本の中では最も年記の古いもので、肖柏七三歳の自筆草稿本と思われる。右奥書次第に「右牡丹華老人筆某十余年前得之頗愛翫今度授之其許願者子々孫々襲之／洛陽妙蓮寺第四十七別当／嘉永三年庚十一月十五日／生年四十／日耀(花押)」とある。春一三八(二)、夏七二(四)、秋一二三(一)、冬九三(四)句の計四一六句を収めるが、うち括弧内の一句は、行間や上欄に細書補入された句で、同筆、肖柏の編纂過程を示すものであろう。他本と

の句の増減・語句の異同も少なからず、「春夢草発句集」無注本の諸本の中に於いて、最も基礎をなす貴重な原本。付属文書に古筆了珉と神田某の極札各一枚、諸井国吉宛稲束猛鑑定書簡一通。諸井国吉氏旧蔵として夙に知られた本。(池田)

#### 49 〔聖廟法楽千句〕断簡 室町時代後期写

軸装 一幅

連歌。明応三年(一四九四)二月、北野天満宮に手向けられた猪苗代兼載(一四五二—一五一〇)の独吟千句で、「梅が香にそれもあやなし朝霞」の何路連歌以下一〇の百韻より成り、掲出の資料はその第八番目冒頭部分。料紙に巻物皺が見られ、一時期卷子本であったと知られるけれども、原態は懐紙の初折か。

この千句は相当広く流布し、兼載自身が後継者兼純に対して行ったと推される講釈さえも伝存するほどで、古写本に乏しくないが、藍内曇鳥の子料紙と云い手なれた連歌師風の能書ぶりと言ひ、兼載と同時代にまでさかのぼるかと思われるほどの出来映えである。極札・箱書等、伝称筆者や旧蔵者に関する資料なし。

兼純筆と目される『兼載独吟千句註』(天理図書館綿屋文庫)と比較して字句に小異あり。たとえば第二句「藤なみ」を『千句註』は「ふぢがえ」に作るが、異同の評価は資料の発掘と共に今後の問題であろう。なお『連歌資料のコンピュータ処理の研究』は、当該作品を張行年月日未詳の項に収める。

(高田)

列帖装 一冊

薄香色市松地向い龍の丸文緞子裂表紙。題簽を中央に貼り、外題「竹とり物語」。縦一三・四、横一四・五。本文料紙、雲母引き斐紙。

竹取物語は、平安時代成立の伊勢物語・源氏物語など著名な物語の中では、鎌倉時代書写本が一切遺存せず、完本としては天正二〇年（一五九二）書写の武藤本が古い程度で、また伝本数も両者に比較すると十分の一にも満たないであろう。ただわずかに室町時代初期書写の古筆切、伝後光厳天皇筆断簡（次項参照）が七葉存在して、本文研究に一石を投じ、これを基準に古本系、通行本系と大別されているが、かつて一葉のみ知られていた古筆切が近時、次第に出現してきた結果、必ずしも截然と系統が区別できず、再検討が迫られている。

掲出本は、いわゆる通行本の中でも、正保三年（一六四六）刊本に始まる整板本にかなり近い本文を持っている。例えば五人の求婚者が登場するところで「その名一人はいしつくりの御子」以下全員に「一人は」と冠し、武藤本を底本に考えると、「霜月しはすの」が「霜月極月の」と表記されたり、かぐや姫が昇天に際して詠む歌「今はとて」の第四句「君をあはれと」が「君をころもと」（哀の草体を衣と誤読したのに発するか）などを見ると、板本よりの写しと思えそうであるが、そうとも言い切れない。冒頭部で「野山にましりて。ましわりて」「さるきのみやつこ。みやすこ」「子になり給へき人なめり。一人なり」と正保版の。点部に異同が見られるのと、漢字・仮名の宛て方、仮名遣などでは板本と大差のあるこ

と、本文を書きさして、ミセケチに訂正する箇所が比較的多いことなどを考えると、直接板本から写したとするには疑問があり、精査を要するであろう。なお薄様の雲母引き斐紙にふさわしく、細い線の流麗な文字を連ねた筆致に、写し手の美意識が感じられる。

(池田)

## 51 竹取物語断簡 室町時代初期写

(伝後光厳天皇筆) 一葉

斐紙。縦九・七、横九・七。毎半葉九行一七字程度の小型列帖装冊子本を分割したもの。二条為定（一二九〇—一三六〇）の筆と極められることもあるが、通常掲出の切のように後光厳院（一三三八—一三七四）を伝称筆者とする。

「物語のいできはじめのおや」として長い享受の歴史を持ちながらも、竹取物語は古写本に恵まれず、天正二〇年（一五九二）中院通勝識語のある武藤本、無奥書だが永禄・天正頃の写しかとされる吉田本、それにこの伝後光厳院筆小六半切の他には、中世に遡る伝本を見ない。何より竹取物語最古の伝本資料である点、貴重視されるものだが、本文の特異さもまた注目に値する。竹取物語はごく少数の古本系伝本と近世以降圧倒的に多数を占めた通行本系——武藤本・吉田本もこちらの枠内に収まる——とに分けられてきた。古本系は、その名称こそ「古」とされるものの、文化一二年（一八一五）写本が唯一の完本なので、本文的に不安が残る。ところが、毘沙門堂蔵手鑑中に伝後光厳院筆の断簡が発見され——ただし今のところ所在不明——古本系本文とほぼ一致する内容ゆえに、現在の古本系本文は室町初期にまでさかのぼると考えられるようになった。

しかしながら志賀須賀文庫蔵の一葉、藤井隆・田中登『続国文学古筆入門』以下に紹介される二葉など、現在判明する七葉を通覧してみれば、古本系と近い部分を持ちつつも全体としては通行本も含めた現存諸本のすべてと対立する傾向にある。書写年代の古さ、伝本研究上の重要性、存在数の少なさ等いずれの点からも、愛らしいこの小さな切が持つ意味は大きい。

(高田)

(釈文)

女そとまかりて見て申してことの給はすれはふさこうけたまはりてまかれりたけとりのいゑにかしこまりてさうしいれてあえり女にないしの給おほせことにかくやひめいとさよらにをはすなりよく見てまいるへきよしのたまへるになむまいり。つるといゑはさらはかく申侍らんとて入ぬかくやひめのもとにはやこの御つかひにたいめん

## 52 伊勢物語 室町時代中期写

(伝姉小路濟継筆) 列帖装 一冊

金茶地に麴塵色の地に花木と宝の織文緞子裂表紙。左上に題簽「いせものかたり 上下」。縦二二・八、横一七・六。見返し、金銀砂子撒き。本文料紙、楮斐混漉。扉紙左上に古筆見の平塚平兵衛が「姉小路殿濟継伊勢物語全部」と記した極札を貼る。本文毎半葉九行、歌二字下げ二行書き。始め四分の一ほどに朱の声点を施す。

伊勢物語は古典の中で遺存伝本が最も多い作品の一人で、千数百部とも言われるが、そのほとんどが一二五段二〇九首の、いわゆる定家本で、以下述べる

五部のいずれもが同じである。右の済継（参議。一四七〇—一五一八）の筆蹟かどうか、伏見宮家旧蔵『短冊手鑑』に押されている一首と比較したのみでは俄かに決しがたいが、およそ済継の頃の書写と見ているであろう。

定家の奥書が二つ巻末にあり、一つは「抑伊勢物語根源古人説々不同」に始まり「戸部尚書（民部卿定家、一一一八—一二七）在判」とある、いわゆる根源本奥書。続けて、武田本奥書冒頭に見る「合多本所用捨也、可備證本」を省略した「近代以狩使事」に始め、再び「戸部尚書」に終わった奥書を写したあと、「以祖父卿真筆本不違一字書写校合之、可備證本矣 藤為相」とある。すなわち武田本に当る定家真筆本を孫の冷泉為相が写した本を源流としていることを示している。この写し手が、本来の根源本奥書を写したのに加えて、他本の奥書を更に記したのか、あるいは親本が既にそうであったか詳かでないが、以下述べる伊勢物語諸本のうち、伝宗鑑筆本、信尹筆本も二種の定家奥書を写しているので、二種写すことは珍しいことでない。本文は天福本と武田本の標準的な異同四二箇所のうち、天福本と一五、武田本と二四箇所一致し、三箇所はいずれとも異なっている。千葉本・七海本などとの親近性が看取されている。（池田）

### 53 伊勢物語 藤原定家筆臨模本

室町時代後期写（伝小堀遠州筆） 列帖装 一冊

藍色唐草文緞子表紙。縦一七・五、横一七・九糎。見返し、金砂子撒き、金泥桜小紋散らし。外題、内題、奥書、巻末勅物なし。但し、本文行間勅物、集付はあり。本文料紙、斐紙。每半葉八行、一二行書

写。往々余り書きあり。和歌は改行約一字下げ二行書き。付属文書、折紙一枚。「伊勢物語六半本全一冊、右、小堀遠州政一筆 證札別有之。代金子五両。神田道伴（印） 癸丑臘月上旬」とあり、別に、道伴の極札（證札）がある。享保一八年（一七三三）十二月の鑑定であろう。

小堀遠州は秀吉・家康はじめ、三代將軍家光にまで、作事奉行（造庭）や茶道師範として仕えたが、定家様の文字を能くしたことでも知られ、伝小堀遠州筆の古典作品は今に数多く伝えられている。伊勢物語も例外ではないが、内閣文庫には「政一」の自署と、「甫」一字（政一は「宗甫」と号した）の小判形印鑑を捺した真筆の伊勢物語が所蔵されている。天福本奥書や勅物を備えているが、天福本原本を臨模したという三条西実隆筆本や冷泉為和筆本に共通する字詰とは全く異なり、毎半葉一〇行に見事な定家様で端正に写されている。それに対し、掲出の伝遠州筆本は、道伴の鑑定にも拘わらず、右の内閣文庫蔵本と全く異質な筆蹟であり、簡略に述べるなら、次の理由で、定家筆原本を精確に臨模した本であり、天福本とは別種の、しかも定家独特の筆致があるが、ままたに伝える本と推定できる。

一つには筆風が端正でなく奔放であり、これは半葉あたりの行数のゆれや余り書きの多さにも見とれる。二つには、定家仮名遣いが守られているばかりでなく、定家はある年代（五、六〇代か）では撥音表記における「む」と「ん」との峻別を行っていたことが判明し、この本はその峻別（「む・らむ・なむ」など付属語の撥音表記は「む」。撥音便はマ行音に基づく場合は「む」、他は「ん」。字音語のm音尾は「む」、n音尾は「ん」など例外がない）に従っていることである。三つ目は既に指摘されているよう

に、定家はある時期「聞こえ」の「え」をや行の「江」の草体に書くことがあり、この本も、たまたま御物本更級日記と同じく、五例中四例が該当する。四つ目は行間勅物のうち、ただ一箇所誤字があり、ひと文字が文字としての「い」をなしていないのは、原本が細字で、その通りに写したからであろう。五つ目は一一一段三首の歌のうち、あとの二首のみ、別筆の女手に臨模されていて、その一首のひと文字を定家が重ね書きに訂正してある状態で臨写されていることである。この二首は後撰集では歌の順序が逆なので、定家は疑問を持って当初は空けて写しておいたのではないか、というのが私の推論である。その他、改めて詳しく紹介したいが、千数百部現存する伊勢物語のほとんどが定家本であるのに、定家真筆は古筆切としても一枚も遺存していない状況で、この本の出現は、伊勢物語本文研究に大きな一石を投ずるものである。本文は天福本との対立異文五八箇所、武田本とは六六箇所あり、三者の対立箇所における掲出と諸伝本間との個別同一本文数を求める調査法では、根源本の中で最も純度が高いと言われ九州大学蔵伝為家筆本と最も親近性のある数値が示される。しかしながら、掲出と九大本とを直接比較すると、また五四箇所の異同があり、しかも九大本一一一段にある「まかりいつるを見て殿上にさふらひけるおりにて」の傍点部を鶴見本が欠くなど両者は全くの別系統である。系統論を含めて、伊勢物語の本文研究については、なお検討すべきことが多し。原本に奥書があったのに写さなかったとするのは、臨模本なので考えがたく、無奥書本ながら、行間勅物が、他伝本の定家勅物とされる傍注の中で、かなり原初的であるのも注目すべき点の一つであろう。（池田）

(伝山崎宗鑑筆) 列帖装 一冊

浅梔子色地に苗色の菱万字に唐草・牡丹・万字等織文緞子表紙。外題、内題なし。縦二四・二、横一七・五。見返し、茶色地に金の切箔・砂子撒き、霞引き。本文料紙、斐楮混漉。尾丁表に「此一冊者山崎住宗鑑法師筆蹟也。或人依懇望、為後證記之而己」<sup>(二六八)</sup>延寶九曆林鐘念日<sup>(六月二十日)</sup>古筆了祐(「琴山」印)真空(花押)とある。了祐(一六四五〜一八四)は古筆家三代目、右にあるように即性庵真空と号し、俳人、茶人としても知られた。またこの前丁裏に薄紅色の小紙片が貼られ、そこに「正筆一、山崎宗鑑伊勢物語全部、了祐様御極有御加筆等願上候」と書いてある者は、了祐の極にある依頼主であろうか。本文每半葉一〇行、和歌は二字下げ二行書き。

山崎宗鑑(一五四〇年頃、八〇歳前後で没か)は、一休の流れを汲む連歌師で、特に『犬筑波集』の撰者として名高く、後世の談林俳諧や芭蕉に至るまで影響を与えた。宗祇や肖柏とも交わり、古典書写にも熱心であったらしく、その俳風のごとき飄逸のうちには逞しさのうかがえる筆蹟は珍重され、世に宗鑑流と称される模倣者を出すに至ったが、本書は、自筆本『犬筑波集』(天理図書館蔵)と比較して同一の筆蹟であり、了祐の鑑定通り、宗鑑筆と断定して誤りあるまい。本文中朱墨の書入れが多く見られるが、往々見られる墨の集付と、傍記勅物のごく一部は宗鑑筆と思われるものの、多くの墨書の注記と、朱のすべては後人の別筆である。宗鑑注の内容は集付に加えて、当該所収歌一首を記すこと、定家勅物の一部を写すこと、振漢字による注を施すことであるが、

別筆(墨色濃く線が細く堅い)も同類の内容の場合があり、細書なので区別のつきがたい箇所もある。

別筆の墨は、例えば第一段の「をんなはらから」に「兄弟也 紀有常女二人也」といった人物を指定する傾向があり、朱書では更に顯著に、男の歌ならほとんど「業」と記すときであるが、なに人の仕業か詳かでない。奥書は、まず根源奥書を途中の「古事只仰而可信」で区切り、改訂して「又或説」より始めて「戸部尚書在判」で結ぶ奥書が一つ。次に「近代以狩使事」に始まり、再び「戸部尚書在判」で終える武田本奥書。更に次丁には天福本奥書にある勅物の万葉歌、六帖歌、宋玉神女賦以下の歌詞が写されている。本文は天福本・武田本間の標準的な異同箇所の中では六箇所のみ天福本と一致するの、武田本とは三四箇所が一致、どちらでもないのが二箇所であるから、武田本に近い流布本と言えよう。なお池田亀鑑旧蔵(天理図書館蔵)本に古筆了佐が寛永一〇年に宗鑑筆と鑑定した伊勢物語一冊があり、根源本・武田本の両奥書が列記されている点は本書と同一であるが、天理本は天福本勅物の代わりに、さきの伝姉小路濟継筆本と全く同文の為相奥書を記す。本文も本書とはやや異なり、例えば十段では「心うつくしうて↓本書ナシ」「かくいひやり。ければ↓やりたり」などの異同がある。(池田)

## 55 伊勢物語 慶長初年頃写(近衛信尹筆)

列帖装 一冊

表紙、菱渦繫ぎ地に牡丹散らし漉文藍紙。中央に白緑色地に金泥と墨で草花と松を描いた題簽に「伊勢物語」。縦二〇・三、横二〇・三。大ぶりの本。本文料紙、厚手斐紙。

折紙や極札の類はないが、その筆蹟、後述の書写態度、堂々の装訂などより見て、二藐院近衛信尹(一五六五〜一六一四)の真筆と見て誤りないこと、念のため陽明文庫の名和修氏にもかつて観て頂いた。

信尹は近衛家の嫡男として早くに左大臣になったが、奇行が多く、豊臣秀吉に関白を奪われた上に勅勘をも蒙って、遂に三年間、薩摩の坊津に配流された。才気喚発な気質は書風にもあらわれ、帰京後は関白に返り咲いて、書への声望も高く、近衛流の祖ともなった。光悦、松花堂昭乗とともに寛永の三筆とたたえられるが、寛永元年は信尹没後一〇年に当る。本文は每半葉一〇行書写、歌は二字下げ二行書きであるが、最後の辞世の歌は散らし書き風に写す。勅物は一切写していないが、根源奥書と武田本奥書とを雄渾な文字で写し、末に「右両本奥追書加之畢」と記す。いわゆる根源本と武田本とが併存している認識があつたので、あるいは親本は無奥書本であつた可能性もあろう。本文は、前項の方法で天福本とは九、武田本とは三一、どちらでもない二箇所と武田本に近いが、根源本の中では千葉本、七海本などと親近性を持っている。

伊勢物語は、言うまでもなく各段が「むかし男ありけり」で始まるのを原則とするが、繰り返される「むかしおとこ」の単調さを避けるため、最初は「むかし男」と写すが、次第に「無加之男」「無閑止於止古」「武迦之雄登孤」「舞我視オトコ」「六香子於東虚」「夢可志おとこ」「謀香師」「武嘉之」「武駕盡」「舞嘉慈」「畝閑新」などなど、戯れ書きの真仮名で闊達に写して、しかも威風堂々の形になっているのが、信尹の気性を反映していると言えよう。(池田)

(野々口立圃筆) 列帖装 一冊

山鳩色瓢箪・唐草文金欄表紙。外題、内題なし。縦一五・八、横一八・二。見返し、金銀の切箔と、銀砂子撒き霞引き。本文料紙、斐紙。墨付尾丁裏に「九條殿通房公御自筆之本令書写者也／立圃(花押)」とあるので、野々口立圃(一五九五—一六六九)が、九条道房の写した本より写したことになる。

立圃は本名親重、祖父の代まで武士であった京の雛人形師で、雛屋、紅屋とも称したというが、若くして連歌や和歌を学び、その関係で公卿たちとも親交があった。その後、松永貞徳について俳諧に精進し、俳諧発句帳などいくつもの俳諧書を上梓しているが、源氏物語にも精通しており、得意な大和絵の筆を縦横に振るって、梗概書である「おさな源氏」について『十帖源氏』も刊行した。九条家は近衛と並ぶ摂関家で、通房(一六〇九—四七)は関白幸家の嫡男であり、左大臣、摂政に至ったが三九歳で薨じている。立圃が一四歳年少の通房と直接の交りがあったか詳かではないが、この伊勢物語を書写したのは、入道して立圃と号した寛永一四年(一六三七)以降であり、恐らく通房の死後となると、更に一〇年遅れることになるであろう。ともかく名にし負う九条家伝来の伊勢物語を伝える本であるとは言えよう。本文は毎半葉九行書写、歌は一字下げ二行書き。動物は本文最後の丁余白に、「業平朝臣」として、割注に略伝を記すのが唯一であり、行間動物は一切ない。奥書は「戸部尚書判」で終る根源奥書であるが、ここでこれまで述べてきた五つの伝本のうち、定家筆臨模本を除く四本に共通するこの奥書を、52伝姉

小路済継筆本を底本に対校しておこう。略号は54宗、55近、56立である。(私に句読点のみ加える)

抑伊勢物語根源、古人説、不同。或云、在原中将自記云、因茲有其謙退比興之詞等。又云、伊勢筆作也。或云生年十幼書之。似彼家集文牋。是故号伊勢物語。以此兩説案之、更難決之。心中秘蜜(秘密—宗・立)、身上(身上—立)興言、他人推而難注之。以之可謂其自書歟。但疑万葉古風(古風—立)中、多載撰集之哥。仁和聖日之間、粗記臨幸之儀、此等(此等—近・立)事又不審。伊勢家集其端文牋偏以同之。是又見先達舊記。庶幾其舛歟。兩不知之。加之此物語名字、非彼筆者何稱伊勢乎。或説云、為狩使下向伊勢、仍有此名。其説又難信。始則載南京春日之詞、次(次又—立)注西對夜月之思。富士山之雪、武藏野之煙、凡非伊勢國事。多以為此物語之(ナシ—近)肝心。仍兩説共有不審。古事只(唯一—近)仰而可信。又或説云(ナシ—宗・立)、後人以狩使事、改(雖—近)為此草子之端、為叶伊勢物語之道理也。件本狼籍奇恠也。伊行所為也。不用之。先年所書之本、為人被借失。仍為備證本重而(ナシ—宗・近・立)所校合也。戸部尚書在判(判—立)

四者ともが共通する字句であっても、世に多くあるこの奥書と異なる本文が二、三ある。例えば割注の「生年十三幼書」の傍点部は「而」とある本が多く、「以之可謂其自書」は「以之思之」とあり、「何稱伊勢乎」は「哉」の文字であるのが通常であろう。では立圃本の物語本文とはいえば、断然天福本に近く、例の四二箇所中三〇箇所が一致し、武田本と一致するのは一二箇所にとどまる。他の三本が武田本に傾いているのに比較すると、立圃本のみが武田本

奥書を併記していないこととの関連があるかも知れない。なお、定家筆臨模本を含めて五部の伊勢物語本文は、いわゆる古本系の特異本文として指摘されている十一箇所とはほとんど合致せず、それぞれ小異である一二段の「火をつけむとす」、一三段の「ひとりゆくらん」とあるのが近、二四段の「むかしおとこ女」とあるのが宗、一〇七段の「うたはえよまさりければ」とあるのが52姉と53定とであることをつけ加えておく。(池田)

## 57 伊勢物語断簡 鎌倉時代前期写

(伝慈円筆) 軸装 一幅

斐紙。縦二三・〇。横一九・二。右端に綴穴跡あり、列帖装オモテ面に七行二一字程度で九六段前半を写す。定家本系諸本とほとんど差のない本文だが、同時期らしい朱校合(傍点・片仮名)は注目値する。たとえば、「身ニ(いて)キタリケレハ」、「(かさ)イトオホク(いて)ニ(けり)」が特異な本文を伝えているのである。すなわち前者は広本系阿汲国文庫本・大島本等の特徴を示し、後者は独自異文か。ツレは管見に及ばず。

「色道大鏡」の撰者としても知られる笠原祥雨(藤本箕山、一六二六—一七〇四)の極札を付す。鎌倉前期と思われる手なれた筆跡の切。(高田)

(釈文)

のちはかりなりければ女身にかさひとつふた  
ついできにけり女いひをこせたるいまはなにの心もな  
し身にかさ一二いてきたりときもいとあつし  
すこしあきかせふきたちなんときかならすあはん  
といへりけりあきまつころをひにこ、かしこより  
その人のもとへいなんすなりとてくせちいてき

にけりさりければこの女のせうとはかにかむかへに

58 伊勢物語断簡 越前切 南北朝時代写

(伝吉田兼好筆) 軸装 一幅

斐紙。縦二五・〇、横一六・〇。每半葉九行一六字程度。和歌改行二字下げ二行書きの列帖装ウラ面に、二〇段後半と二一段初めを写した。名葉集印行として最も早くまた切の特称を掲載することもない文化版『古筆名葉集』が既に「越前切 雲紙 四半伊勢物語」と記すところで、古くから賞玩され、ことに物語の類にはめずらしい特称を持つ名物切である。「雲紙」の表記通りの断簡も当然伝存するが、装飾のない斐紙を用いた例も多く、掲出の断簡はその一。短い連綿のやや偏平な筆跡は定家流を汲むものであろうか。

吉田兼好(？―一三五二―?)と伝称されるが別筆、ただし筆力のある堂々とした書きぶりで南北朝も早い頃の写しであろう。定家本の武田本系本文と考えられる。(高田)

(釈文)

かくこそ秋のもみちしにけれ

とてやりたりければ返事は京にきつ

きてなんもてきたりける

いつのまにうつろふいろのつきぬらん

君かさとは春なかるらし

むかしおとこ女いとかしこくおもひかはし

てことこ、ろなかりけりさるをいかなるこ

とかありけむいさ、かなる事につけて

世中をうしとおもひていて、いなんと

59 伊勢物語系図 江戸時代前期写

袋綴 一冊

藍色地に雷文・雨竜(?)を空押しした紙表紙。縦二一・六、横一五・五。ただし損傷甚しく、紺色無地の料紙をもって補修。外題、表紙左肩に銀泥下絵金砂子蒔きの斐紙題簽を押し、「伊勢物語系図」と墨書、本文と同筆であろう。内題なし。斐楮混漉料紙を用いた袋綴本。墨付七丁、每半葉行数不定(四八行)、朱の系図線を引く。本文同筆と覚しき朱書入あり。漢字には多く振り仮名を付す。

「桓武天皇御子」及び藤原冬嗣の系図、その次に経行・敏行・紀有常・伊勢の略伝を載せ、業平のやや詳しい伝を記す。阿保親王の子に仲平・行平・守平・大江音人・業平・初草と掲げ、敏行の説明に「一さいきやうを一筆にてかきたる人也」とあるのがおもしろい。後者について言えば、敏行が能書として聞えた人物であることは勿論ながら、一筆一切経については依拠するところを知らない。あるいは、所謂流布本奥書の「件本狼籍奇怪者也、伊行所為也」とかかわって『伊勢物語闕疑抄』末尾に掲げられた世尊寺系図の「定信」の傍注「一切経書写之人」が混入したものか。

伊勢物語系図の伝本は意外に少なく、三条西流のものが翻印されているが、掲出本はこれと系統を異にする。「紅梅文庫」(前田善子)・「勝富」(末勘)の蔵書印あり。(高田)

60 大和物語 上 江戸時代前期写

列帖装 一冊

二重蔓牡丹唐草を織り出した金欄表紙。縦二四・二、横一八・〇。紅斐紙に金銀箔散らしの見返しと共に近年の改装。内・外題なし。間似合紙を用いた列帖装、每半葉一〇行一五字程度、歌一首二字下げ二行書でその前後を改行する形式。

第一丁ウラより書き始め、墨付七二丁、後に遊紙三丁、大和物語を二帖に写す場合一三三段までを上冊とするのが通常で、掲出本もそのようになってい。章段ごとに改行することはむしろ少なく、区切れ目をおかず次段に続く例が目立つ。書入れなし。拾穂抄本系統の本文を有するが、ままた「いとうちはへてみとりなる」(第三段、諸本「のとかなる」)の如き独自異文を持ち、版本の転写とは思われない。珍籍の収集をもって知られた「斑山文庫」(高野辰之)の蔵書印あり。(高田)

61 大和物語 上 古活字版 元和中刊

袋綴 一冊

薄香色楮紙表紙。縦二七・八、横一九・二。楮素紙見返しと共に後補。外題なし。尾題「大和物語上終」。やや厚手楮紙を用い、第一丁ウラより每半葉一二行二〇字程度を縦二一・一、横一六・〇に印刷する。全五二丁。漢字平仮名交り、平仮名は連続活字を使用。墨による濁点、傍書若干、巻後半には朱合点も見られる。川瀬一馬『増補古活字版之研究』にしたがえば、元和(二六一五―二四)中刊一二行本のハに相当。

古活字版で散文と和歌とが交った文献を出版する場合いくつかの型があり、まず第一に、改行して二、三字下げ和歌二行、ただしその末尾は改行せず地の文に直接続く形式。これは古写本の一般様式でもあり、慶長中刊の『竹取物語』、伝嵯峨本『源氏物語』、元和九年心也版『狭衣物語』等に見られる。次に改行して和歌二行、さらに改行して地の文とする形式。これには二種あって、和歌二行の行頭を揃えるものと二行目を一字分下げるものが存在する。前者は嵯峨本『伊勢物語』や慶長中刊『大和物語』一行本の例で歌物語写本にならったものか。後者は掲出本・寛永中刊『枕草子』一三行本等の例、出版者の癖もしくは時代の風であろう。

上巻一三三段までを存し、本文は二条家本系の所謂流布本。なお丁のオモテを余白とし、そのウラ面より刷る形式は比較的めずらしい。(高田)

## 62 宇津保物語残簡 俊蔭卷 奈良絵本

江戸時代前期写 卷子 一軸

千歳茶地丸紋金欄表紙。見返し、金紙。本文料紙、斐紙。本来、横長の冊子本を台紙に貼って卷子本に改装。台紙の紙高、二〇・九、本文紙高一五・一糎。宇津保物語は二〇巻より成っているが、次の63にも述べてあるように善本、古鈔本に恵まれず、ただいつの頃からか第一巻の俊蔭の巻のみを単独に写し、読む習慣ができたらしい。物語全体としては発端に過ぎないのに、主人公が波斯国に漂着し、西方へ赴いて数奇な経験のうちに霊琴を得て帰国したり、遺児である娘が兼雅と結ばれて仲忠を生んだものの、大木のうつばに住むような困窮を味わった末、十余年後、琴の霊験で兼雅と再会して幸福になる運びが

変化もあり、完結感がするからであろう。俊蔭のみの古活字版二冊の刊行を見たのもそうであるし、本学蔵の文化一一年(一八一四)書写の俊蔭一冊本でも、外題に「うつほ物かたり 完」と書かれている。絵巻や奈良絵の題材としても恰好なので、三巻本、五冊本、あるいは一〇冊本などが知られている。本書は冒頭から始まりはするが、俊蔭が天雅御子から授けられた霊琴を弾くと、七人の天女が舞い降りて遊び、「なんぢはなんぞの人ぞとひ給ふときに、七人の人みならいはいして申さく」で終わっているので、俊蔭五冊本巻一のみが残欠本があり、その上、終りもやや欠いた本を卷子仕立てにしたのであろう。絵三枚、途中にも絵を欠いたと思われる箇所がある。七人いる筈の天女が、画面が小さいので三人にとどまっているのはご愛嬌である。本文系統は論ずるほどのことはない。(池田)

## 63 宇津保物語 俊蔭卷 古活字版

寛永中刊 袋綴 二冊

雷文地に遭華唐草を空刷りした縹色表紙。縦二七・〇、横一七・七糎。古表紙ではあるが原装ではなからう。左肩に打ちつけ書きの外題「うつほ物語上(下)」、内題「うつほものかたり 上(下)」。第一丁オモテより每半葉一行一九字程度を二〇・八、横一五・三糎に印刷。漢字平仮名交り、平仮名は連続活字使用。上四六丁、下三八丁。川瀬一馬増補古活字版之研究』の元和寛永中刊一行本第一種口に相当し、竹取物語第三種本と同種の活字を用いる。活字に小々磨滅が見られ、また頻出する「琴」字は新彫かと思われる。

うつほ物語は源氏物語に先行する二〇巻の長篇な

から、古写本に恵まれず、また掲出本のように俊蔭の巻のみ書写・印行されることが多かった。印刷されたものの内では、この第一種が最も古く、万治二年(一六五九)林和泉掾刊絵入本三巻へと続き、全巻の上梓は延宝五年(一六七七)まで下る。いずれも数の少ない典籍である。(高田)

## 64 源氏物語 須磨卷 附帚木卷残簡

鎌倉時代後期写(伝冷泉為相筆) 列帖装 一冊

表紙は墨流し地に金銀泥の霞引、切箔、野毛を撒いて外題はなく、見返しは銀の密な切箔。別紙の扉紙に「二は、き、き」とあるのは後補であろう。縦一七・五、横一七・一糎。本文料紙、斐紙。

源氏物語のような浩瀚な作品では、古鈔本ほど揃い本は乏しく、揃いでも一部が取合わせであったり、補写の巻々を含む場合が多い。そこで揃い本でも一帖ごとに検証する必要がある、これを逆の視点より考えるなら、古鈔本は一帖でも、一括でも、更には一葉の断簡でも本文資料としては貴重となる。この一帖は本館所蔵の『源氏物語』写本では最古の鎌倉後期書写本で、伝来の間に四括より成る須磨の巻の第一括が欠け、それをほぼ同時代書写別筆の帚木第一括八丁で補い一冊となした。帚木の前付白紙一丁裏に「冷泉殿ひかる源氏」とする古筆了佐の極札を貼る。帚木本文は冒頭より「いとかはらかなりいゑの」(『大成』三九頁⑩)、須磨は「わかればかうのみや」(同四〇〇頁⑨)より末尾まで。いずれも青表紙本ながら、それぞれに注意すべき独特な異文がある。須磨にのみ朱の合点が見られる。(池田)

65 源氏物語 須磨卷 南北朝時代写

(伝二条為定筆) 列帖装 一冊

薄萌葱色地に草花文を織り出した緞子表紙。縦一五・九、横一五・一。本文料紙、斐楮混漉。左肩に金泥の菊水・霞引文題簽を貼り、「須磨為定筆」と冷泉流の墨書。本文とは別筆であり、縹色地に金銀の切箔を撒いた見返しとともに、表紙は後代の制作にかかるとであろう。箱書にも「二条為定筆」とあるが、為定(一一九三—一二三六)か筆の当否はともかく、ほぼ同時代の南北朝期書写本であろう。

本文は青表紙本系統の中では、池田本・肖柏本・三条西家本などと屢々共通し、数手の書き入れがあり、藤壺の人物呼称を「薄雲」とするなどの古態を示す。また前半では朱の合点、後半では墨の上を朱でなぞった合点を見るが、概ね三条西家本(現、日大本)にある、奥入注釈箇所を示すと推定される位置とそれが一致している。なお後付遊紙六丁のうち三丁を利用し、室町初期とおぼしき別筆で「新式抄抜書」と題する文を写すが、その筆跡は、源氏本文に加えられた書入の一手と同一と見られる。二条良基撰の「連歌新式」(応安新式)抄出加注本の最古写本の一として、源氏物語とは別に注目に値する。(池田)

66 源氏物語 賢木卷 室町時代初期写

列帖装 一冊

本文料紙、斐楮混漉。縦二七・一、横二一・〇。本文共紙の表紙。中央に打ちつけ書きに「さか木」と外題を記す、やや大型の本。ただし外題は本文と

別筆であろう。全体に虫損の跡をかなりとどめているが、若干修補がなされており、それによって文字の読めない箇所は殆どない。本文料紙、斐楮混漉。每半葉一〇行、一行一八字ほどの大ぶりな文字で写し、正徹(一二三三—一二四九)の筆跡を思わせる。

和歌は概ね約二字下げ二行分かち書きとするが、そのまま本文に続けている。朱墨の書入れが多く、墨では引歌九首をそれぞれ行間に傍記し、朱筆は「秋好中宮」「葵」「六条御息所」のような人物呼称や、「伊勢群行事」「紫式部我身上云々」などの注記に及ぶほか、朱合点、同濁点が施されている。

本文は青表紙本系統の中でも相互に親近性の強い池田本・肖柏本・三条西家本と一致することが多い。虫損があるとは言え、そのおおらかな筆致とともに、原装をとどめて、典雅である。書肆が加えた新しい桐箱の箱書に南北朝末と書写年代を記してあるのも肯んじたいほどの風韻を伝えている。(池田)

67 源氏物語 越国文庫旧蔵本

室町時代後期写 列帖装 四九冊

藍色紙表紙。縦一七・〇、横一七・五。升形列帖装で、表紙中央白紙題簽に「きりつほ」(「夢浮橋」と外題を記す。五帖を欠くが、帚木後半は夕霧末に、夕霧後半は柏木末に、柏木後半が若菜下の一部、夢浮橋後半が手習後半に当たるなど、補修に際してか、若干の混乱が見られる。本文料紙、斐紙。桐壺末に「天正十一年正月十八日一校了/再校了」、手習末に「天正十二年六月十四日一校了/再校了」など四六帖に同類の奥書を見るので、天正十一年(一五八三)をやや遡る頃の寄合書であろう。各巻首に「越国文庫」方形朱印、「図書寮」長方形朱印を捺すので越前

松平家福井藩の旧蔵書とわかるが、「出餐」の長方形朱印も捺すのは廃棄印か。

三条西家流の書風が多く、花宴など、書き入れ注記を含めて、ほぼ青表紙本系統の三条西公条書写本(山岸徳平氏旧蔵)に近い本文を有するが、ごく一部の巻に河内本かと思われる本文を見るので、なお精査を要するであろう。每半葉一〇行書写で、朱の読点や合点を施す巻が多く、揃い本に近い本館所蔵の源氏物語の中では、最も書写年代が古い原装本として貴重すべき本。(池田)

68 源氏物語 滲標卷 別本

室町時代後期写 折紙列帖装 一冊

利休鼠色地唐草織文表紙。縦一九・二、横一三・三。藍色墨流しの題簽を中央に貼り「みをつくし」とあるが、これは江戸時代後補の表紙で、布表紙を剝離すると、原表紙は本文と共紙で、外題は中央打付書に「十一みほつくし」とある。滲標は一四番目の巻なので「十一」は巻序でなく、伊行釈以来見られる並びの巻を設定して、源氏物語を三七に区分した時の序数であり、比較的古鈔本に見かけることが多い。また、この序数が書かれているのは、現在は一帖のみの零本ながら、本来は揃い本であることを想定させる。また装訂が次の69花散里とともに折紙列帖装であるのが珍しい。薄葉の斐紙を横長に折紙としたのを列帖装としたので、連歌師にかかわる書写かとも思われる。扉紙裏左下に「森脇書」と墨書があり、本文巻頭右上に「森脇氏」の朱方形印を捺すのは近頃の旧蔵者名であろう。本文每半葉一〇行書き、和歌は約一字半下げ二行書き。各丁表折目近い中央に「一四十六」と丁数が稚拙な文字で打つ



であるのは、恐らく森脇某のなせるわざらしいが、その「三十五」とある真上に「十一ノ巻奥」と記されているのは本文と同筆。ここは列帖装三括りの第三括初に当るからであるが、これも本来は揃い本であつた痕跡であろう。

最も注目されるのは、本文が別本であり、青表紙本、河内本両系統本文と著しく異なっていることである。冒頭部から「さやかに見給ひし夢の後よりは院の御門の御事を御心にかけてきこえさせ給て」とあるが、大島本（青）は「さやかにみえ給し夢の後。は院のみかと御事をこゝろにかけきこえ給ひて」であり、尾州家本（河）は「さやかに見給し夢の、ち院の御かとの御事を心にかけてきこえ給て」とあつて、三者の異同が著しいが、更に甚だしい箇所を多く見る。池田亀鑑編著『源氏物語大成校異篇』には、別本のない巻が若紫・明石・滲標・絵合・松風・藤袴の五巻あり、そのうち、かつて若紫は中山家旧蔵本（現、文化庁蔵）、松風は蓮左文庫蔵の古鈔本をそれぞれ紹介したが、この滲標は写しは室町末ながら、古鈔本の面影を伝えていて、本文研究上、貴重な一冊と言ふべきである。近々、紫式部学会編古代文学論業第十三輯『源氏物語と源氏以前 研究と資料』に詳細な論考と全文の翻印が掲載される。（池田）

## 69 源氏物語 花散里巻 別本

室町時代後期写 折紙列帖装 一冊

縦二一・五、横一三・八種。本文料紙、楮紙。花散里一帖のみながら、四半本藍表紙中央に金泥地紋のある朱題簽に「花ちる里」と外題を記すのは青表紙原本風である。しかし前項68にも述べたように、折紙列帖装という、連歌書ならともかく、源氏物語

には珍しい装訂の上に、本文を毎半葉七行に、室町時代後期の連歌師らしい書風に写す。朱の句読点、濁点、合点のほか、引歌や「故院」「源氏」「女御」「花チル」など人物呼称や略注を行間に傍記するが、これは後代の加筆であろう。

本文は「よの中なへていとほしたなく思めぐらし給に」（青表紙本「おほしなる、に」）など河内本と一致する箇所も多いが、河内本系諸本共通の本文に反して「院かくれさせ給てのちいよくあはれなる御ありさまを」（河「院かくれたまてのちいと、ものあはれなるありさまを」と青表紙本と一致する場合も多い上、「ほと、きすかたらふ。ふこゑは」一首の圈点部のような独自異文（『大成』によると諸系統本すべて「こと、ふ」とあるが、ただし青表紙本系の版本「首書源氏」にのみ「かたらふ」とあり）が見えるので、注目すべき別本。（池田）

## 70 源氏物語 松風巻 慶長一九年写

（里村玄仲筆） 列帖装 一冊

白地に網目を洲浜様に藍で刷り出した表紙中央の、金銀泥で薄を描いた中に銀箔の満月を押しした題簽に「まつかせ」と外題を記す風姿は瀟洒であるが、改装であろうか。縦二四・二、横一七・四種。本文料紙、斐紙。松風のみではあるが、奥書に見られるように他の所望によって最初から一帖を選んで書写したのであろう。本文尾丁左下に「一校了」と細書され、次の一丁表に奥書がある。

宗彌老依所望不省惡筆令書写早

慶長十九年初秋中旬／法橋玄仲

玄仲は里村紹巴の次男で焦庵・直衆庵・臨江齋などと号して文禄より慶長・元和年間、昌叱の子昌琢

らとともに多くの連歌に一座し、徳川幕府連歌師として知られたほか、『伊勢物語聞書』などの注釈書も著しており、慶長一九年（一六一四）は三七歳。宗彌の伝は知られないが、『国書総目録』によると寛永八年成立の『賀州行記』なる書が著録されている。本文は青表紙本系の肖柏本に最も近く、朱の句点・合点若干と、三条西家本に近い本文との校異傍書が少々見られる。（池田）

## 71 源氏物語 淀潘稲葉家旧蔵本 慶長頃写

包背装 三三冊

深い藍染に蓮華唐草を漉き出した料紙を表紙に用い、袋綴にして、しかも包背装（くるみ表紙）という珍しい装訂をした大ぶりな本。縦二五・五、横一八・九種。本文料紙、楮紙。表紙中央に、布目紙に金銀泥で細密な海賦模様を描いた題簽を貼り、「きりつほ」「は、き木」「うつせみ／夕かほ」以下「てならひ／夢のうきはし」までの外題を五四卷三三冊に記す。薄手楮紙の料紙に本文毎半葉九行に大粒の文字に写し、和歌は改行二字下げ二行目を本文に続ける端正な書写で、桐壺を除くと雄渾な一筆書。

本文系統は青表紙本で肖柏本・三条西家本に近いが、慶長元和頃の比較的古い時代の、堂上公家の風格ある書写本なので、各巻の本文についてはなお精査を要する。朱の読点・合点が見られ、不審紙を押す巻もある。古い塗箱の蓋表に「折敷に三文字」の紋が二つ高蒔絵にしてあり、購入先の書肆弘文莊目録によると淀潘稲葉家旧蔵とあるが、淀潘蔵書印である。「淀府内帑圖書之章」印も捺されておらず、稲葉家は他に白杵、館山にもあるので、にわかには淀潘とは確定できない。（池田）

(伝徳大寺公維筆) 袋綴 五二冊

御幸・夢浮橋の巻欠。渋引無地表紙。縦二二・四、横一七・六糎。左上に白楮紙の小さめな題簽を貼り、「夕かほ」〜「てならひ」と巻名を記すのが原則であるが、題簽が摩滅した場合は、その上に重ねて貼って記すもの、中央に打付書「は、き、」などとする巻がある。桐壺の見返しに小紙片が挟入されており、「全部五十四冊／徳大寺公維卿筆／箱入」と墨書されている。現在の箱は旧蔵者が近年別に求めた三段抽出の桐箱なので、本来の箱が失われたとともに、二帖も佚したのであろうか。この小紙片は、古筆家の極札などと異なり、署名もなく誰の筆かわからないが、江戸時代には遡るであろう。本文料紙、楮紙薄様。每半葉一〇行書写、歌は二字下げ、二行目地の文へ続け書き。全巻一筆書きである。

写し手とされる公維の実父は久我通言、母は卜部兼光女で、天文六年(一五三七)に出生したが、徳大寺実通(実現とも)の養子となり、従一位内大臣に至って、天正一六年(一五八八)五二歳で薨じている。高松宮蔵『短冊手鑑』の所影を見ると、筆跡が似通ってはいるが、簡素な装訂、書風などから見て、寛永までは下るまいが、果して天正の書写に遡りうるか疑問が残る。江戸のごく初期と言うべきであろうか。本書にとって特筆すべきは、一七帖にわたって奥入が付載されている点である。末摘花・葵・初音・篝火・野分・若菜上・若菜下・柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法・竹河・橋姫・椎本・総角・早蕨の諸帖であり、篝火・野分の二帖、若菜上〜御法の七帖、竹河〜早蕨の五帖がそれぞれ連続した巻々であるの

も注意される。つまり接していないのは初めの三帖のみである。問題は奥入の内容が巻によって、自筆本奥入(いわゆる第二次)に近い場合と、大島本付載奥入(第一次)に近い場合と、いずれとも決しがない場合とがあることであろう。そして結論のみを言えば、このうち、柏木が、青表紙本ながら、往々異文が別本と一致する特異な本文を持ち、しかもこの本文と奥入とが、中山輔親氏旧蔵本(現文化庁蔵重文)の柏木と、全くと言っていいほど一致する事実である。問題点は幾つか残っているが、かつて「中山本柏木と日本古典文学会本付載奥入」(拙著『源氏物語の文献学的研究序説』所収)で提起したように、本書の巻々の、特に奥入付載の巻は、かつて揃い本であった中山本源氏物語を祖本としていることを想定させ、それは、ひいては藤原定家における三つ目の奥入を付載した源氏物語の存在へと連なるであろう。まだ果していないが、奥入を付載していない巻を含めた全部の精査が必要であり、素朴な、何の変哲もない装訂であることが、却ってこの問題に対する関心をそそるとも言えよう。なお本学には、奥入を付載する源氏物語揃い本を他に二部所蔵し、一部は上述の拙著にも触れたが、もう一部はいずれ論及する折があろう。(池田)

## 73 源氏物語 龍文刷外題升形本

江戸時代前期写 列帖装 五四冊

薄藍にて鱗形・市松・七宝つなぎ等を刷り出し金銀泥の下絵を施した古雅な表紙。縦一五・四、横一五・五糎。中央の金泥雲龍文刷り題簽に定家流の筆で巻名を記すが、桐壺・花散里・薄雲などは表面剥離。概して表紙より題簽の方が損傷甚しく、表紙を

改めたかもしくは古い題簽を襲用したものである。元来紫であったと覚しき綴糸も、紺・海老茶に替えられたものが多い。銀切箔を密に蒔いた瀟洒な見返しに、ままたま金銀泥霞引。本文料紙、斐紙。

数人の寄合書の如くで奥書識語はないが、若菜下の巻末に貼られた檀紙片の墨書によれば、藤裏葉・若菜上・同下は一条院尊覚の筆と云うことになる。尊覚(一六〇八―一六一六)は後陽成天皇第一〇皇子、興福寺一条院門跡となった人物。他の資料と比較して掲出本藤裏葉以三帖は尊覚の筆とは別であろう。ただしほぼ同時代の書写。なおこの檀紙のメモは古筆家の手になるものと思われる。本文と同筆の墨校合若干。本文系統は青表紙本系で、桐壺・若紫は三条西家本にごく近く、他も肖柏本・三条西家本に似る。(高田)

## 74 源氏物語 須磨巻抜書 江戸時代前期写

(伝梶井宮筆) 卷子 一軸

落刺の多い紺無地紙表紙。紙高三二・七糎。外題の位置に「梶井宮様御筆」と墨書、その下方に朱印二顆(印文不能読)を押す。端裏書「梶井宮様御筆布田氏」。見返しは金泥にて菊・桐を刷り全揉箔を蒔いた間似合紙。本文料紙、間似合紙、一紙約五〇糎のもの五紙を継ぎ、唐木軸に付く。ただし第一、五紙はやや短く四五糎程度。料紙には秋草の葉・茎を金泥で描き、銀泥の花をあしらった下絵あり。

須磨巻より光源氏が仲秋の明月を眺める部分を抜書、流麗な筆跡で散らし書きとする。『源氏物語大成』四二四頁八行目以下に相当。このような装飾料紙に源氏物語の名場面を抄出、散らし書きする例は、鎌倉時代より例がある。

なお外題および端裏に見える「梶井宮」(三千院門跡)は、時代から考えて慈胤法親王(後陽成皇子、一六一七—一六九九)か。慈胤法親王は『本朝古今名公古筆諸流』中に尊純流・通村流の能書として記されるが、掲出本の真の筆者であるか否かはなお不詳。(高田)

75 源氏物語 中山篤親等寄合書

正徳二年以前写 列帖装 五四冊

鶯色地に金茶・白茶にて宝尽しを織り出した表紙縦二五・一、横一八・四種。金切箔散らしの見返しと共にごく近時の改装だが、絹地金泥下絵の凝った題簽は付属の筆者目録の通り徳大寺公全の筆であろう。扉に「きりつほ二おり」の如く墨書するのは製本の心覚えで、元来は表紙に貼付けられて見えないはずのもの。巻ごとに奥書あって中山篤親等二七名の寄合書、ただしここに年紀はない。藍紫内曇斐紙の堂々たる筆者目録が添えられ、正徳二年(一七一三)古筆了音の極がある。了音(一六七四—一七二五)は古筆家歴代中目利の評が高かった人。そこに「外題并筥蓋引出之銘書」と見え、もとは巻名を蒔絵にした豪華な箱入本であつたらしいが、現在新調の桐箱入。本文料紙、斐紙。

筆者のうち外山光和(前名、勝守)の改名時期から推定して、宝永二年(一七〇五)以降筆者目録の正徳二年までの書写で、本文を書き終えて後、数丁の遊紙を持つ巻が多い。本文はおよそ青表紙本系、ただし明石の巻にままた独自異文が見られる。夢浮橋には錯簡あり。(高田)

76 源氏物語 蒔絵箱入装飾本

江戸時代中期写 列帖装 五四冊

几帳面取りの漆塗けんどん箱に二列三段の引出しを組み込み、五四帖を収む。金具は金箔押し梅・唐草。蓋表および箱側面三方に金銀蒔絵の菊・薄・撫子が描かれ、源氏物語と各巻名を金・銀・青貝で記す。引出し部分にも金字の巻名が見られるけれども、花宴の次に「やとり木」とあり、早蕨の次の宿木を欠く。

典籍の方は縹色地に金泥・金箔にて当該巻の内容にちなむ下絵を施した表紙。縦二三・七、横一六・七種。金泥下絵絹題簽に本文とは別手にて巻名を墨書した外題、万字つなぎ刷り出しの厚手金紙見返し、いずれも原態。ただし紺の元糸の切れた帖は紫絹糸でとしなおす。空蟬・夕顔・若紫・関屋・絵合・胡蝶にやや複雑な錯簡があるのはその時の不手際か。本文は二人の寄合書、精良な斐紙に毎半葉一〇行書きを原則とするが、花散里・関屋・篝火が八行なのは、分量が少ない巻の丁数を増すための配慮であろう。ままた朱の合点・句読あり。

77 源氏物語 賢木、明石、絵合巻 奈良絵本

江戸時代前期写 列帖装 三冊

金泥にて霞引・土坡・秋草等を描き、金切箔・野毛を蒔いた紺表紙。縦二四・〇、横一七・七種。一帖ごとに図柄を変え、巻の内容と対応させた豪華な

もので押発装あり。外題、朱地に金泥下絵鳥の子題簽を押し「さかき十(あかし・ゑあはせ)」と墨書、本文と同筆。見返し金布目紙、内題なし。本文料紙斐紙。

毎半葉一〇行一七字程度。墨付各々六四、五四、二五丁、和歌改行三字下げ二行書き、二行目はさらに一字下げる。絵の前の部分でままた散らし書きとし、余白の生ずるのを避けている。

絵各帖八、六、二面、天地に縹色霞引きを施した所謂奈良絵だが、その構図はすべて慶安三年(一六五〇)山本春正跋の整版本に一致し、本文またこれと同じ。したがって慶安の絵入本を藍本とする奈良絵本と考えられる。このような絵入版本から奈良絵本への流れは、たとえば浅井了意の作かと推定される「やうきひ物語」を基にした「長恨歌絵巻」など、他にも例がある。(高田)

78 源氏物語 伝嵯峨本古活字版 慶長中刊

袋綴 一五冊

表紙・題簽の美麗さや光悦流の活字使用ゆえに嵯峨本と通称される慶長中刊の古活字版で、寛永に至るまで四度開版を見た源氏物語のうち、慶長初年刊とされる一〇行本に続く二番目のもの。外題は雲母刷り唐草模様で一貫するが、表紙は縹・刈安等の色替りや雲母刷り・空押し等装飾の変化例も報告され、装訂に諸本間の差が大きい。掲出本も胡蝶のみ刈安無地、他の一四冊は赤香色無地。縦二八・六、横二一・二種。ただし伝存の状況から見て近時のとりあわせ本ではなく、相当長期にわたって一具であったと考えられる。あるいは出版当初からの色替表紙か。通常先行の本文を継承する古活字版だが、元和九年

版と寛永版に系譜的なつながりがある外は、すべて直接的関係を持たない。掲出本の範囲で言えば、青表紙本系の大島本にほぼ同じ巻(関屋)、三条西家本に近づく巻(紅梅・特に後半)のほか、河内本の特徴が部分的に強くあらわれる巻(花散里)もあり、伝嵯峨本の底本となった本文の素性についてはなお問題が多く残る。(高田)

### 79 源氏物語 古活字版 寛永中刊

袋綴 五四冊

ほとんどの冊は麻葉文様を艶刷りした藍色古表紙。縦二七・四、横一九・三。中央の題簽落剝跡へ「きりつほ 一」の如く墨書した薄縹色楮紙外題を押す。原表紙か否か断じがたいが、後にふれる旧久原文庫本と同様のもの。

先行する元和九年(一六三三)富士哥鑑印行の古活字版に基づく寛永の出版で、第二種所謂異植字版に相当。ノドの部分に「きりつ 一」の如く巻名と丁付を付印する。伝本稀れ、現存一〇部程度ではなからうか。本文は元和古活字に同じく青表紙本系の三条西家本に近い。朱墨書き入れは特に最初の数冊に多く、湖月抄に依拠した注の転載がほとんど。後になると句読合点の類のみ。

川瀬一馬『古写物語文学書解説』によれば、大東急記念文庫蔵旧久原文庫本の本、麻葉文様表紙裏反故に寛永一年(一六三三)の年紀を持つ墨書があり、この古活字版が寛永後半の出版であると判明。(高田)

### 80 源氏物語断簡 賢木卷 河内本

鎌倉時代中期写(伝藤原為家筆) 軸装 一幅

斐紙。縦三〇・三。三葉ほどの大型列帖装断簡二葉を呼びツギしたもの。右側五行幅一〇・〇。〇葉は賢木卷後半桐壺院の周忌法要に続くところ、左側八行幅一六・六。六葉は同卷前半光源氏の野の宮訪問であって、話の進行とは逆の貼り方となっている。極札を持たないが、ツレには藤原為家(一一九八—一二七五)の伝称筆者名が与えられているので、それに従った。

書風から判断して鎌倉時代中期の写し。同時代に例の少ない堂々たる大四半本であり、『古筆学大成』二三にはツレ四葉——七葉を一項目にまとめて掲出するも、三葉は別筆と見るべきであろう。——、山岸徳平『尾州家河内本源氏物語』口絵にも賢木卷と竹河卷を継いだものが載せられる。竹河は別筆なので結局五十四帖中少なくとも賢木・薄雲・真木柱の三帖分を一人で写していることが現在のところ判明する。一面分そっくり残す例がないので推定はむづかしいながら、每半葉一行二一字程度に写した幅二四。四ほどの典籍ではなかったか。朱の句読点を持つが、諸本と一致せず不可解な位置に存するものが多い。おそらくは向きあっていた面の朱のウツリであろう。書写年代の古さ、類稀な大冊に加えて、河内本系本文を伝えるところが注目される。河内本諸本中最古正嘉二年(一一八五)の尾州家本に雁行するか、むしろそれに先行して河内本成立時点——鳳米寺本奥書によれば建長七年(一一五五)に校訂終了——に近づくかと思われる切。左から五行目「いと」ここにききはひいとあまた」の最初の「いと」を補入とし、次の「いと」が尾州家本では見せケチとなつて

いるほか、異同はない。

(釈文)

(高田)

なからふるほとはうけれとゆきかへるけふはそのよにあふこ、ちしてことにつくろひたまはぬ御かきさまなれとあてにけたかうおもひなしことなりすちかはりいまめかしうなどはあらねとひとにはことにそかき給へるけふはこの御事をしたまふらんほとおほしやるにいみしくあはれにこ、ろくるしきたのたいのさるへきところにたちかくれて御せうそきこえたまふにあそひはやめていとこ、ろにくきはひいとあまたきこゆなにかとひとつの御せうそこはかりにてみつからはたいめむし給へきさまにもあらねはいともものしとおほしてかやうのありきもいまはつきなきほとになりて侍をおもほししらは

### 81 源氏物語断簡 夕顔卷 伊予切

応永八年写(今川了俊筆) 一葉

楮紙、縦二七・三、横二一・九。『新撰古筆名葉集』の「巻物切、源氏杉原紙、中字朱点アリ、老筆」に相当、ただし左端に綴じ穴が見え、大型袋綴本であつて卷子本ではない。蜂須賀家旧蔵のツレ空蟬が卷子に改装されて伝存(専修大学)し、こちらによつても袋綴の原形がわかる。切名称は筆者了俊が伊予守であつたことによる。現存の切はすべて夕顔の巻の断簡。掲出の部分は、夕顔没後光源氏と右近とが、故人の思い出を語るところである。蜂須賀家旧蔵本の箱書によれば、帚木の分も存在したらしいが現在その行方は不明。

伝称通り今川了俊(一二三六—一四一四?)の筆跡

であり、手鑑『藻塩草』所収の切の「筆者点者了俊、今年八十五歳也、手跡ばかりはをさなく侍哉」によれば、応永一七年(一四一〇)の書写で、本文の処々に見られる朱の傍注・句読点・濁点(…)も了俊自ら施したものであると判明する。なお同様の形式で朱点を施した『詠歌一体』(徳川美術館)は応永九年(一四〇二)の写。

了俊は冷泉為秀の門下で、当時主流の二条派に批判的な立場をとり、弟子正徹がこれを継承する。『了俊懷紙式』以下歌学書の他、連歌論書、記行、源氏物語の注釈を多く含む『師説自見集』など数多くの著作を残す。また吉田兼好との交渉もあつたらしい。戦国大名今川氏の礎となつた範囲の子で、武人としても抜群の功績があつた。

筆者及び書写年時の確かめられる資料として貴重なのは勿論、最晩年の了俊が見せる力強さと枯れた味わいの筆跡も、十分に魅力的である。青表紙本ではあるが、若干河内本寄りのところも存する。

古筆了音の宝永二年(一七〇五)極札あり、了音は前記『詠歌一体』にも鑑定を行なう。なお『藻塩草』所収の切とまったく同じ文言が帯木巻末にも見られ、いずれか一方が模写である可能性は否定しえない。

(高田)

さはかりにこそはときこえ給なからなを

さりにおほせはこそまきはし給はめとなん

うき事におほしたりしときこゆればあい

なかりける心くらへともかな我はしかへたつる心も

なかりき只かやうに人にゆるされぬふるまひ

を南またならはぬ事なる内にいさめ

の給はするを初。つ、む事おほかる身に

てはかなく人にたはふれことをいふも

ところせうとりなしうるさき身の有  
さまに南あるをはかなかりし夕より

## 82 源氏物語断簡

多様な古筆切をごく粗く概観するならば、手鑑の構成からも切の伝存数からも、歌切と経切が二本の柱となる。名物切とこれに準ずるものの種別統計によれば、和歌の切が全体の約六七%で首位、次いで仏典が約一五%と続き、平安時代以降それぞれ魅力的な花を咲かせた物語の類は、古注釈や日記・説話等の散文を含めてもわずかに六%程度とされる(藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』)。内容上また書写上の変化も季節感の明確さも歌切には及ばず、したがって茶席に登場する縁に乏しい。時に国文学者の注意を引くことはあつても、古筆切全体からすれば傍流の存在なのである。

これを、何々切の特称を有し格別に珍重されたかと思われる名物切に就いてみても、たとえば古今集であれば伝記貫之筆高野切・伝小野道風筆本阿弥切など、平安鎌倉書写のものを数えるだけで五〇点くらいにはなってしまうが、源氏物語の場合伝恒明親王筆伏見切と今川了俊筆伊予切(81)くらいであつて、伝亀山天皇筆石野切・伝後円融天皇筆竹屋切などの本文抄出、伝四辻善成筆細川切(河海抄)以下の注釈を含めても、十指を屈するには至らないであろう。

しかしながら、かくの如く古筆の世界の片隅の存在ではあつても、国文学の研究資料として多面的な活用が可能な領域と言え、たとえば以下に掲げる一〇種一二葉の断簡にあつては河内本三種別本二種が含まれ、資料群の半数を青表紙本以外の本文が占め

ている。現存の諸本中青表紙本がおそらく八割以上となるのに比して、これらは、特に青表紙本以外の本文を持つ切をねらつて集めたものではなく、一葉一葉自然に集積された結果であるから、わずかな量ではあるが、鎌倉時代の伝本状況を考える上に示唆するところ大ではなからうか。(高田)

## 82-イ 空蟬巻 鎌倉時代末期写

一葉

斐紙。縦一五・五、横一五・三。薄い朱点あり。每半葉一〇行一七字程度の列帖装升型本を分割したもの。極札なし。書風から判断して鎌倉末期写であろう。

源氏物語古写本中朱の句読を施すものには河内本が多い。しかし掲出の断簡は青表紙本系。空蟬と軒端萩の碁をかいま見た光源氏が戸口に出て来る場面。『源氏物語大成』八八頁一行目以下に相当(以下大成の頁数・行数を各項末に記す)。

(釈文)

なに心もなくさやかなるはいとをしな  
からひさしくみ給へまほしきにこきみ  
いてくる心ちすれはやをらいて給ぬわた  
との、とくちによりる給へりいとかた  
しけなしと思てれいならぬ人侍て  
えちかうもより侍らすきてこよひも  
やかへしてんとするいとあさましくから  
くこそあるへけれとの給へはなとてか  
あなたにかへり侍なはたはかり侍なん  
ときこゆきもなひかしつへきけしきに

## 若紫卷 河内本 鎌倉時代中期写

(伝寂蓮筆) 二葉

斐紙。縦一六・五、横一五・二。 (ロー1)の切には極札がないけれども、わずか半丁ほどをへだてたツレ(ロー2)に飯島春敬墨書メモ「寂蓮法師筆／源氏物語若紫／文化二二年初夏仲旬 古筆了意極春敬〔印〕」と見えるのにながって伝称筆者名を付した。なお下段の切四行目に本文とは別筆で「俊成卿」と記すのは、その鋭角的な書風を藤原俊成に擬せんとしたもののか。おそらく伝寂蓮筆の極札なり折紙なりを持った一帖が、ごく近時分割されたのであろう。毎半葉一行一六字程度の升型本列帖装、二葉とも丁のオモテ小異あるも全体としては河内本。なおロー2切は本学講師川越敏子(号敬楓)氏より寄贈された。

寂蓮(?—一二〇二)よりは下った、鎌倉中〜後期かと思われる力強い書風で、河内本の特徴のよくあらわれた部分を抄してみる。

・わかき人／＼はみにしみてめてたしとおもひきこえたりひめ君うへを(掲出断簡)  
 ・身にしみてわかき人／＼おもへり君はうへを(大成底本)  
 一八一頁二行目以下と同一一行目以下に相当。

(釈文) 1

とにてさすかにはか／＼しく人の御けしきありさまもおほし、るへくもあらずなかそらなる御ほとにてあまたものしたまふなるなかのあなつらはしきにてやましらはせたまはむとすきたまひぬるもよと、もにお

ほしなけきつるを心くるしきことお

ほくはへるにかくかたしけなきなけ

の御ことのはをのちのこともとたる

ましくた、いとうれしきことに思給

へられぬへきをりにへりなから

2

あしわかのうらにみるめはかたくと

もこはたちなからかへるなみかは

めさましからむとのたまへはけにこ

そかしこけれどて

よるなみのこ、ろもしらてわか

浦にたまなひかむほとそうきたる

わりなきこと、きこゆるさまのなれ

たるそすこしつみゆるされたるな

そこひさらむとうちすしたまへる

をわかき人／＼はみにしみてめてたし

とおもひきこえたりひめ君うへを

82-ハ

## 葵卷 鎌倉時代後期写 (伝冷泉為相筆)

一葉

斐紙。縦一六・五、横一五・二。 毎半葉一〇行一九字程度の列帖装升形本の丁ウラ面であろう。別本の如き部分もあるが、青表紙本中の一異本と考へたい。

朝倉茂入の極札「冷泉殿為相卿わつらひたまへは〔印〕」を添える。為相(一二六三—一二三二)筆と伝える源

氏物語切は比較的数量多く残っており、掲出の切と関係なからうが『新撰古筆名葉集』にも「同(六半) 源氏朱星アリ」と見える。

別本と接触したらしい部分を示しておく。

・いと／＼いみしき御いのりのかすをつくして(掲

出断簡)

いと、しき御いのりかすをつくして(大成底本)

いと、いみしき御いのりかすをつくして(別本の御物本)

二九七頁一〇行以下に相当。

(釈文)

わつらひたまへは御こ、ろのいとまなけなり

またさるへきほにもあらずとみな人もた

ゆみ給へるにはかに御けしきありてなや

みたまへはいと／＼いみしき御いのりかすを

つくしてせさせ給へれとれいのしうねき御

もの、け一さらにうこかすやむ事なきけんし

やともめつらかなりともてなやむさすかいみ

しうてうせられて心くるしけになきわひ

てすこしゆるへ給へや大将にきこゆへき

事ありとのたまふされはよあるやうあらんと

82-ニ

## 須磨卷 河内本 鎌倉時代後期写

一葉

斐紙。縦一五・六、横一五・一。 毎半葉一〇行一六字程度の列帖装冊子本を分割したもの。極札なく伝称筆者不明、鎌倉後期の写であろう。全体としては、河内本系本文をもつが、この系統によく見られる朱点はない。独自異文もあって、河内本系統の一異本。特徴的な部分を示しておく。

・心おかれはへらん事いとくちをしくてなん(掲出断簡)

・心をかれはてんといとおしうてなむ(大成底本)

(——は河内本青表紙本間の異同、||は独自異文。)

四〇二頁五行目以下光源氏が紫上と別れを惜しむ

場面に相当。

(釈文)

をかくよをはなる、きはにしも  
心くるしき事のみおのつからおほかり  
けるをひたやこもりにてやはつね  
ならぬよに人〇もなきけなき物と  
心おかれはへらん事いとくちをしく  
てなんなときこえ給へはか、る世を  
みはへるよりほかのおもはずなる事  
はなに事か思給へられんとはかりのた  
まひておほしいりたるさま人より  
ことなりことほりそかしち、みこは

82-ホ 若菜卷 上 鎌倉時代後期写

一葉

斐楮混漉。縦一四・五、横一四・五。每半葉一  
行一五字程度の列帖装オモテ面。極札なく伝称筆  
者不明。鎌倉中々後期の細身の個性的な書風で、同  
類のものは西行と極められることがある。青表紙本  
系本文。

一〇四七頁一三行目以下、女三宮の処遇をめぐつ  
て光源氏と朱雀院とが言葉をかわすところである。

(釈文)

ぬことにはく、みきこゆる御まもり  
め侍なんうしろやすかるへきことに  
はへるをなをしのみてのちのよの  
御うたかひのこるへくはよろしき  
におほしゑらひてさるへき御あつ  
かりをさためをかせ給へきになん  
侍とそうし給さやうに思ひよること  
侍れとそれかたきことになんあり

けるいにしへの人のためしをき、侍に  
もよをたもつきかりのみこにたに  
人をえらひてさるさまのことを

82-ヘ 柏木卷 鎌倉時代末期写

二葉

斐紙。縦一六・三、横一六・六。每半葉一  
二〇字程度の列帖装冊子本より連続する一紙を抜き、  
一丁と一行分残して切断したもの。表裏あわせ二四  
行分存。装訂の特徴から言つて折り目の左右は掲出  
の切のように内容的に連続しないのが通例である。  
極札なく伝称筆者不明。鎌倉後々末期の写か。  
若干の独自異文を持つが、青表紙本系本文の枠内  
の一異本であろう。独自異文の例を示す。

- ・おたしきけはひ (掲出断簡)
- ・を、しきけはひ (大成底本)
- ・をかしきけはひ (別本の国冬本・阿里莫本)
- 一一五三頁一行目以下内容の不連続あつて一一五  
九頁九行目に至る。

(釈文)

かたみかれにしやとのさくらもわさとならず  
すしなしてたち給にいと、く  
この春はやなきのめにそたまはぬく  
さきちる花のゆくゑしらねはときこえ給  
いとふかきよしにはあらねといまめかしうかと  
ありとはいはれたましかういなりけり  
けにめやすきほとのようなめりとみ給  
ちしの大殿にやかてまいり給へればきん  
たちあまたものし給けり猶こなたへ  
いらせ給へとあれはおと、の御いてゐのか  
たにいり給へりためらひてたいめんし給へり

(綴穴)  
給へはかほ打あかめておはす

(綴穴)

かきりにてなくく申給とき、しをは  
ほとのかみなりしかとなをいとわか  
やかになまめきあいたれてそのし  
たましこれはいとすくよかにおもくし  
くおたしきけはひしてかほのさういとわか  
うきよらなること人にすくれ給へるわか  
き人くは物かなしきもすこしまさりて  
みいたしたてまつる御前ちかきさくらの  
いとおもしろきをことしはかりはとうちおほ  
ゆるもいまくしきすちなりければあひ  
みんことはとくちすさみて  
時しあれはかはらぬ色に、ほひけり

82-ト 総角卷 別本 鎌倉時代後期写

(伝世尊寺行能筆) 一葉

斐楮混漉。縦一六・六、横一六・五。每半葉一  
〇行一五字程度にゆつたりと写した列帖装ウラ面。  
『新撰古筆名葉集』に「六半 源氏」、『古筆切目安』  
に「六半切 新極ナレドモ出来上」と見えるもので  
ある。世尊寺行能(一一七九—一二五二?)は能書  
として聞え、世尊寺の家名もこの人以降称せられる。  
行能の筆跡ではなく、同時代かやや下った頃の写し  
であろう。

平安の仮名の気分を残した優美な書風のゆえか広  
く愛玩されたらしく、総角・手習二巻にわたるツレ  
が一〇葉ほど残る。本文はこの部分だけでは必ずし  
も明らかでないが、ツレを総合してみれば別本。

古筆了珉の極札「世尊寺行能卿していき、かもの〔琴山〕を添う。その裏に「丙子」とあるところから、元禄九年(一六九六)の鑑定と知られる。

一六四九頁一二行目以下に相当。

(釈文)

していき、かもの思へきさ  
まもしたまはすこ宮のゆ  
めにみえたまひつるいと物  
おほしたるけしきにて  
このわたりにこそほのめい  
たまひつれとかたりたま  
へはいと、しうかなしき  
そひてうせたまひにしのみち  
いかてゆめにたに見たて  
まつらむと思をさらにこそ

82-チ 宿木巻 別本 鎌倉時代後期写

(伝藤原為家筆) 一葉

斐楮混漉。縦一五・九、横一五・三。左端に綴じ穴跡が残り、列帖装丁のウラ面とわかる。諸本と異同の多い本文を一〇行一六字程度に写し、書風より見て鎌倉時代後期の筆跡か。

「いはんかたなくかなしくて」(諸本わりなく)、「おほしたるに」(諸本を)の如く独自異文を有する一方、「御心さはきにけり」(青表紙本にナシ、河内本・別本の陽明文庫本以下と一致)、「御そなとも」(別本の陽明文庫本・保阪本以外ひとへの御そなとも)、「思のほかにそ」(別本の陽明文庫本と一致、諸本心よりほかにそ)と、別本の枠内に収まるであろうことを示唆する異同が見られる。極札を欠くが紙背に墨書「為家」あり。

一七四四頁三行目以下、匂宮が中君と薫との仲を疑う場面。

(釈文)

給ていかなりしことそとけしきとり  
たまふに事のほかにもてはなれぬ事  
にしあればいはんかたなくかなしくて  
いとくるしとおほしたるにされ  
はよかならずさる事はありなん  
よまた、にはおもはしとおもひわたる  
ことそかして御心さはきにけりさる  
は御そなともぬきかへ給てけれとあやし  
く思のほかにそ身にしみにけるかは  
かりにてはのこりありてしもあらしと

82-リ 東屋巻 河内本 鎌倉時代中期写

(伝阿仏尼筆) 一葉

斐紙。縦二三・六、横九・五。料紙右端を裁ち落とす。元来は毎半葉九行二二字程度の列帖装か。六半升型本の多い中世源氏物語写本のうちでは比較的珍しい四半本の切である。別本の本文を持つところも興味深い。

極札なく裏書に「阿仏尼」とあるが、ツレとして伝坊門局(俊成女。定家の姉。一一二〇)または伝民部卿局(定家女。一一九五?)筆の断簡が五葉報告され(古筆学大成二二三)、いずれも東屋巻である。流麗さと力強さを備えた鎌倉時代中期の筆跡。大成一八四〇頁一〇行目以下に相当する。

(釈文)

ければうちのみたうつくりはてつとき  
かてらおはしたりひさしくみたまはさりつるにやま  
のみみちもめつらしうおほゆこほちしんてんこた

みはいとはれくしくつくりなしたりむかしいとこと  
そきてひしりたちたまへりしすまをおもひ

82-ヌ 夢浮橋巻 鎌倉時代末期写

(伝世尊寺行能筆) 一葉

斐紙。縦一六・五、横一六・八。右端に綴穴跡が残り、列帖装オモテ面と知れる。古筆家の手になるものではないが、「いとか、ることはけに」世尊寺行能卿〔花押〕と記した小紙片を付す。鎌倉時代の主流であった後京極風の筆跡とは異なり、やわらか味のある手。行能よりは下った鎌倉後々末期の写しである。青表紙本系本文を一行一八字程度に書写、この丁のウラで源氏物語が終わっていたはず。大成二〇七〇頁一行目以下に相当する。

(釈文)

いとか、ること、もにおほしみたる、にや  
つねよりも物おほえさせ給はぬさまにて  
なるときこゆところにつけてをかしき  
あるしなとしたれとおさなき心地は  
そこはかとなくあはてたる心ちして  
わさとたてまつらせ給へるしるしに  
なにことをかはきこえさせんとすらん  
た、ひとことをのたまはせよかしなと  
いへはけになといひてかくなんとうつし  
かたれとも物ものたまはねはかひなくて  
た、かくおほつかなき御有さまをきこゑ

83 源氏物語系図 巢守三位本

室町時代末期写 折本 一帖

市松模様を織り出した金銀欄表紙、四周に傷みあ



つて補修を加う。縦三一・八、横一四・七種の大型折本。見返し、布目斐紙に金箔散らし、後補か。本文料紙、斐紙。外題内題ともになし。

横に四条の白界を押し、これを基準として墨の系図線を引く。一部には縦の白界も見える。冒頭は「先帝」より始まり、「太上天皇」以下「前和泉守」まで二三系一九八名を掲げ、「そのすぢともしらぬ人々」「無名」と続く。系図の後に「きぬの色を人さまによりてさだめたる事」「人々のかたちを花によそへたる事」「居所事」を付し、所謂「源氏物語のおこり」で終わる形式で、この構成は伝為氏本に近く、古系図の特徴がよく出ている。奥書識語等を欠くが、室町末期の写であろう。

源氏物語の研究は、おそらく登場人物の系譜化と卷々の内容の時間的整理とから出発したであろうと考えられ、残念ながら平安時代にまでさかのぼる直接資料こそないが、それぞれ中世に源氏物語系図・年立として結実する。系図は三条西実隆(一四五五〜一五三七)の整定した一群の伝本と、それ以前に成立した古系図と大別するのが通例であり、掲出本は、螢兵部卿宮の家系に「源三位・東守三位・典侍」と記すところが注目される。これらは現存の源氏物語中に見えず、古系図や「風葉和歌集」などによってわずかにその一部を知りうる散佚「すもり物語」の登場人物なのである。「すもり物語」関連の記事を載せる古系図として、正嘉本・伝清水谷実業筆本等四本(常盤井和子『源氏物語古系図の研究』)が報告され、更に伝藤原家隆筆本(専修大学)も知られるようになった。掲出本は全体の構成・各人物の説明などにおいて既出のいずれの古系図とも一致しないように、特異な伝本と目される。

(高田)

#### 84 光源氏物語系図 江戸時代初期写

折本 一帖

白茶地に鳳凰・瑞雲を織り出した金欄表紙。縦一〇・一、横一二・五種。金銀泥にて幾何文様を塗り分ける見返しと共に後補か。外題、表紙中央に金紙題簽を押し「光源氏系図」と墨書、本文とは別筆である。内題「光源氏物語系図」。

一紙約二五種幅の斐紙を継ぎ折本に仕立てる。全三九折両面書写、ただし裏面は一四折まで書く。後半葉一〇行、登場人物名を掲げ、一字下げにして一行一二字程度の説明を付す。系図線なし。裏面にのみ朱合点・細字書入れあり。

表面は太上天皇より始まり兵部大輔―大輔命婦で終わり、裏面は「系図之外人」として巻の順に系譜化しえない人物を挙げる。奥書はないが、本文の特徴から見て三条西実隆整定永正九年(一五二二)本系統と思われる。

(高田)

#### 85 源氏物語系図断簡 古系図切

鎌倉時代後期写 (伝冷泉為相筆) 一葉

藍内曇斐紙。縦二七・一、横一四・二種。天より各々三・一、四・五種のところに淡墨界を施し、系図を写す。江戸期出版の古筆名葉集類には記載を欠くが、田中塊堂『昭和古筆名葉集』に「同(四半)源氏系図雲紙高九寸三分」とあるものに相当し、「四半」でなく元来卷子本であったことが巻物雛より判明する。

美麗な料紙を用い後京極流の手なれた筆跡、鎌倉後期を下らない断簡。したがって当然三条西実隆以

前の古系図中の一本と分類されよう。ツレは『古筆学大成』二四に二葉、出光美術館蔵手鑑『墨宝』中の一葉確認しえた。古系図中、伝為氏筆本と大筋では一致するが、細部に異同が見られる。なお『古筆学大成』紹介の分、いずれも伝称筆者を為家(一一九八―一二七五)とし、出光美術館及び掲出の切は為相(一二二六―一三二八)とする。両者ともこの断簡の筆者とは見なしがたいが、時代的には為相の方が妥当か。

古筆了珉の極札あり、その裏に「雲紙切」<sup>己</sup>六」と記す。「己」は元禄二年(一六八九)である。

(高田)

(釈文)

弘徽殿女御 母権大納言におなし

みをつくしに十二にて内へまいり給

三条上 母按察大納言今上

おさなくよりむはの三条の宮にやしなは

れて夕霧大臣と共にをひいて給きそれ

より御こ、ろかよひけるにや雲井のかりも

わかことやとくちすさみ給し人もふちの

うらははにお、と宰相中将ときこえし時父

大臣ゆるしきこえ給

#### 86 紫明抄残卷 鎌倉時代末期写

列帖装 一綴

表紙を欠いだ列帖装一括分の残欠本。縦二五・五、横一七・四種。料紙、斐格混漉。内題「紫明抄卷第二」<sup>白若紫卷</sup>花散里 紫雲寺隱侶素寂撰。一面一〇行二二字程度、本文を抄出、合点を施し、注は二字下げとする。三六項目八丁分存、朱筆補入一ヶ所あり。おそらくは全一〇巻を五冊に分写したうちの、第一冊後

半が残ったもの。

河内本源氏物語校訂者源親行(？—一二七七一?)の弟某法名素寂の撰、將軍久明親王に献上したことが諸本の奥書より判明する。永仁二年(一二九四)以前の成立。当然ながら河内本を引用、仮名に漢字をあて問答形式の注を多く載せ、親行と素寂のやりとりも見える。河内方注釈として重きをなすのは勿論、中世源氏学の代表的な述作でもある。

『紫明抄』の鎌倉時代書写伝本には、京都大学国文研究室本(一〇冊完)。慶応義塾大学斯道文庫本(一冊、不全)のほか、古筆切中に伝藤原伊行筆卷子本切、伝冷泉為相筆六半切等四種ほどが知られており、いずれも成立期に近い重要資料である。(高田)

### 87 河海抄・花鳥余情〔抄出〕

室町時代後期写 袋綴 三冊

栗皮色無地紙表紙。縦二三・五、横一七・二種。全体に裏打補修を施し、天地左右若干が切截される。相当の古表紙ながら原装なるや否や不明。表紙中央に「河海抄」共二冊、「花鳥余情」共二冊とあるが、現在河海抄抄出の上冊を欠き、玉鬘以下存。花鳥余情抄出は完本。本文料紙、楮紙。紙質書風より見て室町後期写であろう。一面一二行字数不定。

源氏物語研究史上屈指の名著、四辻善成(一二三三六一—一四〇二)の『河海抄』二〇巻と一条兼良(一四〇二—一四八一)の『花鳥余情』三〇巻を抄出、閲読の便をはかったもので、『河海抄』からは和歌・歌謡関係の項目を、『花鳥余情』からは有職故実を軸とする条を選択する体系的な抄出方法である。『河海抄』の場合、中書本系統に依拠したことが証明できる。文明三年(一四七〇)以降同一一年までに宗祇(一

四二—一五〇二)の手でなされたもので、明応九年(一五〇〇)越後下向を目前にして愛弟子月村齋宗碩(一四七四—一五三三)に贈られた。「此四帖者、余五十有余之比、河河花鳥之中令抄出者也、今八旬之末、門弟有宗碩云、道之志依異他、両部抄出所讓置也、明応九年六月九日 宗祇在判」と奥書にその間の事情が語られる。なお「在判」の部分を削去しようとした跡が残り、これは書写奥書と見せるための偽妄。

伝本少なく島原松平文庫本・吉永文庫本があり、特に後者は掲出本と酷似する。掲出本は野村八良『国文学研究史』に初めて紹介されたもので、巻首に「延寿王院」の朱印あり、筑紫安楽寺留守職大島居氏の旧蔵と判明する。安楽寺は連歌師と縁の深い古刹であつて、宗碩も永正一四年(一五一七)秋、ここを訪れており、掲出本の祖本がこの時九州へもたらされた可能性も否定しえない。(高田)

### 88 三源一覽 零本 室町時代後期写

袋綴 一冊

朽葉色無地紙表紙。縦二七・四、横二二・一種。前表紙のみ元来のもの。表紙左肩に「三源一覽」と墨書、内題「三 若紫」。本文料紙、楮紙。一面一六行写で被注項目を掲げ、三字分空白を置いて注を書く。本文同筆と思われる片仮名傍訓・返点・合点等の朱書入あり。

源氏物語の代表的な注釈書『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』より、『花鳥余情』を軸に抄出、一〇巻にまとめたもので、『紫明抄』からの引用には朱点(・)、『河海抄』より抄出した場合には朱合点(〵)、『花鳥余情』は同じく朱合点(〵)で相互に

区別する。ままた「愚存」として編者自身の見解を示すこともある。全一〇巻中第二巻に相当、若紫より葵の半ばまでを存し以下数丁分の欠脱。

『三源一覽』は富小路俊通(？—一五一三)がその師三条西実隆の校閲を仰いで明応五年(一四九六)にまとめた。書名・序文も実隆の与えたもの、この間のことは『実隆公記』明応五年一月二六日条に詳しい。

注釈史上重要な三著を一覧するのに至便な書物だがさほど流布しなかつたらしく、数本の伝存を聞くのみ。掲出本は伝山科言国筆本(書陵部)などと並ぶ古い写し、零本であるところがいかにも惜しまれる。別名『三賢一覽』とも。(高田)

### 89 〔弄花抄〕 零本 室町時代後期写

袋綴 一冊

牡丹花肖柏より資料を借覧し、その影響下に編まれた注釈書。書名は肖柏の号「弄花軒」による。永正元年(一五〇四)頃第一次本が成立したと見られ、後の『細流抄』に代表される三条西家源氏学の基礎をなす。

雷文つなぎ空押し裏表紙は後補だが、浅葱地左肩に「<sup>弄</sup>自桐壺至葵」と墨書するは原表紙か。虫損あるも総裏打を施す。縦二七・七、横二〇・七種。本文料紙、楮紙。

残存部分を諸本と比較するに、第三類(増補系統)の書陵部蔵七冊本にごく近い。ただし葵巻の「大内山を思ひやりきこえながら」と「いつも時雨は」の順序(諸本はこの逆に並ぶ)や、冒頭「光源氏年次」以下に通常記される講釈日数を持たない等、注目すべき相違点がある。『弄花抄』の成立事情は相当複雑

で、掲出本を増補後出とは必ずしも断言出来ない点もあり、室町期に遡りうる写本だけになお諸伝本相互の見なおしと位置づけが必要となろう。(高田)

### 90 源氏物語抄 (紹巴抄) 古活字版

寛永中刊 袋綴 二〇冊

三条西公条の源氏物語講釈を聞書し、『弄花抄』などをも参観して永禄八年(一五六五)頃成立、以後何度かの改訂がなされたもので、安土桃山時代の文化全般に大きなかわりを持った連歌師紹巴の撰。源氏物語注釈書のうち最も早く印行され、川瀬一馬『増補古活字版之研究』によれば『六百番歌合』と同種の活字を用いた寛永後期の出版。縦二四・八、横一八・六。やや詳しく見れば、大小種類の活字を混用し、小字には新彫と覚しきものもある。漢字交りの平仮名古活字だが、ごく稀に片仮名も使用。最終冊末に引用の元奥書によれば、天正八年(一五八〇)五月に武蔵国忍城主成田氏長に授けられた。

掲出本は栗皮色原表紙に当該冊所収巻名と「源氏物語抄一(一二十)」の外題とが闊達な筆で記された題簽二枚を押す。第一冊目次裏に、文政三(一八二〇)、四年の頃入手、既存の書き入れに加え『湖月抄』による補正を行った旨の旧蔵者墨書識語。朱墨書き入れは第一・二冊および二〇冊に多い。数部しか伝存しない古活字版『紹巴抄』の、古雅な原装本である。(高田)

### 91 岷江入楚 帚木卷 慶長頃写

袋綴 一冊

薄朽葉色紙表紙・素紙外題いずれも後補。外題に

「源氏和秘抄」とあるが、同名の一条兼良の著とは関係なく、『岷江入楚』の異本。縦二六・六 横一八・二。本文料紙、楮紙。「かうあなち」の「かう」まで書いて以下余白、二一〇項で書きさしたことになる。蜂須賀家旧蔵本と比較するに当該巻の注九一二項のうち二九七項までに相当。注項目が少ないのみならず注文自体にも異同がある。特に『岷江入楚』素材源の一つ三条西実枝の『山下水』を通常「箋」として引用するのに対し、掲出本では「三光院云」「三光」「三二」と記すのが目につく。なお『山下水』当該巻の注三二五項のうち、一二五項に相当する部分を含む。

このような形態が岷江入楚成立の初期段階を示すのか、あるいは大部な注ゆえの抄出の試みか、おそらく後者であろうが、注文の不一致より見て単純な抜書とも考えられず、時代も古いだけに注意すべき伝本と言えよう。なお自筆稿本と伝称される京都大学付属図書館蔵中院文庫本は、通勝自筆と見なしがたく、書写年代も通勝よりやや下がるのではなからうか。(高田)

### 92 紫塵愚抄 零本 室町時代末期写

袋綴 一冊

雲母引布目紙表紙は後補。改装に際してノドおよび地の部分若干を切りつめる。内外題共になし。縦二三・五、横一九・八。本文料紙、楮紙。九曜文庫(中野幸一)旧蔵。二人の寄合書の如く見えるが一筆であろう。一ツ書の形式で本文を抜き出したもの、ごく稀に簡単な注解を付す。伝岩山道堅筆本奥書によれば、長亨二年(一四八八)以前宗祇の手になる抄出。

掲出本は四冊仕立の第一冊に担当、首尾を脱落させて伝来し、現在帚木途中から明石五丁分まで存。朱書入少々、そのうち注目すべきは須磨「一世中」とわつらはしく……猶ひとひふつかををのつからへたるおりくたに」の傍線部に施された校合で、別本の特徴を持つ引用文を見セケチ訂正、青表紙本・河内本共通の「のほとよそく」にあかしくらす」と改めている点であろう。もし引用本文が原態を伝えているならば、宗祇所持本は純粋な青表紙本でなかったことになる。零本ながら比較的伝本に乏しい紫塵愚抄の室町末期にまで遡りうる貴重資料。(高田)

### 93 源氏物語抜書抄 (源氏大鏡)

江戸時代初期写 列帖装 四冊

金茶地牡丹唐草綴子表紙中央に金泥下絵題簽「源氏物語抜書抄春(冬)」、共に古いものだが改装後補。各冊首もしくは尾に見られる切截跡や巻途中での不自然な分冊状態などから上下二冊本を四冊の改めたものと判断される。縦一七・三、横二三・五。本文料紙、斐紙。目録は元来の上下各冊初めにあたる第一・三冊冒頭に存する。現在第一冊桐壺く賢木前半、第二冊賢木後半く乙女、第三冊玉鬘く柏木冒頭部分、第四冊柏木の大半く夢浮橋の構成。

「物語のおこり」を巻頭に置き、以下巻の順に和歌のすべてを抄出、ままた難語や人物の系譜関係を注しながら筋をたどる梗概書で『源氏大鏡』と呼ばれるもの、原型は南北朝の成立か。掲出本は通常一く三類に分かれる『源氏大鏡』のうち第二類を代表する善本で、古典文庫四〇四に翻字と解説とが収められる。ただしその解説では四分冊の形態を元来のもの

と見ており、これは当然誤り。濁点、本文と同筆の振仮名等を持つ近世初期の写しで、古典文庫主(吉田幸一)旧蔵。(高田)

94 源概集 (源氏小鏡) 室町時代末期写

(伝中院通勝筆) 列帖装 一冊

梗概書「源氏小鏡」に系図を付したものの残欠。

掲出本は一一〇首本に属するもなお浮舟巻に異本特有歌を持ち、地の文もまた諸本と異なる特殊な一本。後補の渋引紙表紙に「源概集 石山寺秘蔵本」と墨書の題簽を押すが、上下二冊仕立の下冊の二ククリ分を存し、さらにその中間一ククリ分の脱落が考えられる。縦二五・三、横一八・二。本文料紙、斐紙。内題「上巻」は勿論「あげまき」と読むべきもので、源氏物語注釈書に時折見かける表記。銀箔散し料紙を用い、「源氏小鏡」は一七丁、「此源概集は光源氏六十帖の中当世いるへき秘しを書拔早」(振仮名は略す、以下同)の奥書、次いで源氏系図(冒頭欠)・系図不入人々と続き、「右此一巻者彼物語同時紫式部注之訖為石山之秘書至末世渡凡人之手而已也足軒 素然」の奥書。ただし「也足軒」以下別筆妄補、付属の極札も贋作、書籍自体は中院通勝(号也足軒、一五五六―一六一〇)より古いと見られるだけに憎むべき偽妄である。(高田)

95 源氏双六 江戸時代後期刊

袋綴 二八冊 付「源氏双六うちやうの事」一枚

遊戯具。古典を遊びのうちに取り入れたものには、歌留多・源氏香・具合など種々あり、これは盤上遊戯の双六の形式で源氏物語豆本を駒のかわりに用い

た珍しい例。説明書一枚を失って豆本のみ市場に出ることもないではないが、元箱に入り遊び方もよくわかる完揃の美品は極稀。

表紙、縹色布目紙。縦七・〇、横四・九。外題、表紙中央に蘇芳色題簽を押し「源氏物語<sup>大意</sup>目録」、以下

「桐つほ は、木々 一」の如く刷る。各冊に二巻分の梗概と代表歌を収め、すべて五丁に仕立てる。巻頭に口絵一面。四周単辺。匡郭内縦五・五、横三・九。毎半葉五、六行一〇字前後。全体として『湖月抄』の外見に做ったか。付属資料に「源氏双六うちやうの事」一枚。縦二六・一、横四二・六。楮紙に、双六盤の図とともに具体的な遊び方を刷る。緑青と朱にて若松を描いた桐けんどん箱、蓋に「源氏物語 全廿八巻」の原題簽。(高田)

96 源氏五十四帖絵巻 天保二年写

(伝狩野探幽原図幽遠齋模写) 卷子 三軸

上巻巻頭に「源氏五十四帖 探幽」「五十四帖 引哥 山路露 系図 爪印上 同中 同下 以上六十帖 探幽法印筆(以下略)」と墨書した二紙を継ぐ。紙高二八・六。楮紙。狩野探幽(一六〇二―一六七四)の原本を天保二年(一八三二)に模写したとするが、源氏物語一帖一図方式の掲出本と一致する探幽の源氏絵は見当らない。夕顔・野分を除く五二帖分はすべて慶安(一六五〇)山本春正刊源氏物語の挿絵中に収まる。同時代の出版物を狩野派の名手がわざわざとり上げるのも不審であり、親本筆者を探幽とするのは無理であろう。幽遠齋の伝記もよくわからず、都立中央図書館加賀文庫の「椿図」の作者でもあることを知りえたのみ。

上巻一三図、中巻二〇図、下巻二二図で、中巻に

絵の順序の乱れあり、また下巻では橋姫に二図あって椎本の分を欠く。慶安版本登場人物の増減、構図の左右反転など、随所に工夫が見られ、特に原拠本の縦長画面を横長に組みかえ、狩野派得意の風景画を展開してゆくあたりは見事である。(高田)

97 狭衣物語 古活字版 元和九年刊

袋綴 八冊

六条齋院宣旨(源頼国女)作か。十一世紀後半の成立。「源氏・狭衣」と並称、修辭の妙と構成の美とに秀でて広く愛読された。後世の文学への影響は大きく、「小夜衣」「石清水物語」などの擬古物語をはじめ、和歌・謡曲から近世の草子類に及ぶ。成立後間もなく改作されたらしく、おびただしい種類の異本が存在し、その系統分類も決定的なものがない。掲出本は四巻を上下に分け八冊として印行され、「狭衣物語」の最初の出版、かつ近世の流布本たる承応三年(一六五四)刊本の祖となったもので、享受史上、伝本研究上の重要な資料である。

表紙、紺色紙表紙。元題簽を失ってはいるものの、若干の補修を除いて原装のまま。縦二八・一、横二〇・〇。楮。無辺無界。字面の高さ二二・四。毎半葉一二行、二一字詰。平仮名交り、連続活字使用。漢字は二手以上を混用する。外題、第五冊まで表紙左肩に雲母引楮紙題簽を押し「さころももの語」の如く墨書、その下方に「一上(一四下)」と朱書。内題「狭衣卷第一之上(一四之下)」。最終冊末に刊記「元和九年五月中旬 心也開板」。心也については他片仮名による訂正などの朱書入あり。巻頭に「九箇成不備」の印記。(高田)

(伝阿仏尼筆) 軸装 一幅

金銀砂子蒔きの斐紙。縦一五・三、横一五・〇。右端に綴穴跡が残り、列帖装の丁オモテと知れる。「狭衣物語」巻四狭衣が宰相中将妹に語りかける場面。一〇行一五字程度、諸本と字句の異同多し。

『新撰古筆名葉集』阿仏尼の「六半 砂子紙源氏コノ外類切多シ四寸九分」に相当し、ツレは「翰墨城」(MOA美術館)所収伝阿仏尼筆断簡以下七葉ほどが報告され、すべて伝稱筆者は二条為明(一二九五—一三六四)であると説かれることもある(古筆学大成二四)。しかし『新撰古筆名葉集』との対応から言っても、特に「翰墨城」の例は極めの紙片が付される以上伝阿仏尼筆とするほかあるまい。それはそれとして、この切いずれも巻四、每半葉一一行書写を原則としたようであるが、一〇行書きも見られる。なお金銀砂子の類似料紙に掲出の断簡よりも力強い筆跡を走らせる伝為明筆の切が『葉叢』(徳川美術館)、『世々の友』(岡山県美術館)等にあつてこれは別種。

(釈文)

うくうになとおほしたちてんを

はかはかりきこえさせんたにいと

あるましき事なりさはありと

もそのおほしたつらん宮この

ほかのかたさまなとのましらひは

ありかたくこそ侍らめかくまこ、

ろなるうしろみみまうけ給ては  
そのかたまきれなきさまにはも  
のし給なんとこそは侍れかの御た  
めめやすしとこそおほさすとも

## 99 浜松中納言物語 卷二 江戸時代初期写

袋綴 一冊

藍無地紙表紙。縦二四・九、横一八・二。左上に楮紙の題簽を貼つて下部が少し残っているが、現状に修補した後貼つたもので、何も書かれていなかった模様である。表紙、本文とも虫損甚だしかったのを、全面裏付が施されているが、ただ原表であるのは、虫損の跡が本文と一致しているので判明する。料紙、斐紙。外題、内題なし。背表紙見返し左上に「二」と墨書するのは後人の所為。每半葉一一行書写、歌は改行約一・五字下げ、二行目が地の文に続く。補修の結果、いささか端麗になっているので、つやつやと新しくも見えるが、書写年代は江戸初期、正保・慶安ごろに遡るであろう。

卷二のみの零本であるが、数十の伝本が報告されている中で、他に例を見ない形の内容を持つ本文であるのに驚く。私はかつて諸伝本を甲類と乙類とに二分し、まず両者間に書写関係がないことを証し、乙類は、まず第一種本があつて、そこから第二・四種本が派生したこと(拙著『更級日記 浜松中納言物語攷』)を述べた。

本文自体としては、例えば巻二冒頭部の、中納言が帰国する条で、「またかへりみるへきやうもなしかしと思に、<sup>なこの草</sup>きもわかる、あはれの」や、「つくしにおはしつくへきほとちかくなりぬ」の左傍線部を見るなら、竹柏園文庫旧蔵本(現、天理図書館蔵)

と一致する甲類本の一つと判定できるが、甲類本であるなら、本書13丁オ⑦の「せちにと、めきこえさすれは。わりなうてやすらひ給にあけかたちかふなれは。うちへいりて給て」の左傍線部は、傍点部「れは」の目移りによる脱行が、どの本にも例外なく見られなければならない。また乙類本であるなら、何種本であろうが、7丁オ⑦の「大貳をはしめくにくのつかさとも。こそりてまちよろこひきこえさせたるさまとも。かきりなし」とある左傍線部が「とも」の目移りによる脱行を受け継いでいなければならない。それがいずれも欠けていないのである。そればかりではない。右を含めて巻二に限るなら、甲類本では四箇所、乙類第一、二種本では右に掲げた一箇所、第三種本では第一種本に加えて四箇所、第四種本では同じく加えて三箇所の脱行部分がある筈なのである。それが一つもないのである。巻二において、これら脱行が一つもない伝本がないわけではないが、それは嘉永元年(一八四八)、新宮城主水野忠央が刊行した丹鶴叢書本である。数種の本を校合した末、相互の脱行分を充当したからであり、それでも巻一に、甲類本によってのみ充められる脱行を一箇所残した。勿論、本学蔵のこの写本は書写年代より見て丹鶴叢書本とは余りにも隔っている上、細部の本文が全く異なる。丹鶴本を、最初の例である左傍線部で見ると、「かなしきも」<sup>なこの草</sup>「おもむくへき」とあり、傍記の異文を採用して写していく筈もなく、傍記のない他の多くの箇所で本文が全く異なる。要するに本書は、甲類本の本文を持ち、かつ甲乙両類の脱行を一つも持たない本であるから、両類共通の祖本の形である本文を有していることになる。しかしながら、共通脱行を有していないので、ただの甲類には属せしめえず、超甲類とでもいう称号を贈りたいは

どである。卷二のみの零本であるのがいかにも惜しまれるが、ほとんど江戸後期の写本のみが伝えられている中で、かかる祖本的性格を持つ伝本の出現は、まことに珍重すべきで、本文研究上、一部に再構築を迫られることになるであろう。

この物語は江戸初期を遡る写本が一つもなく、殆んどが四巻本で、巻五を有するのは昭和になって発見された尾上本・浅野本のみである。本文も、巻一にある連続して何箇所もある脱字が、いずれの本でも充められない悪状況にある。現在、最善本たる国会図書館本で「何の草きも」とあるのが本来の本文であると考へ、拙著でもそう述べたが、本書を見ると、これが、欠損して読めなくなった箇所への考働傍記であり、本行に書かれているのが、考働が本文に繰り入れられた竄入ではないかと、疑わしくなるからである。いずれ詳細な報告をしたい。なお、浜松中納言物語は藤原定家筆『更級日記』勸物によると、作者は同じく菅原孝標女であるといひ、原題は「御津の浜松」と呼ばれた。源氏物語の影響を強く受けながら、主人公中納言が唐土に渡り、唐土の后と子までなして帰国するなど奇抜な筋立てと、夢と転生とが繰り返される独特な世界を描き、若き定家の作品『松浦宮物語』や、近くは三島由紀夫最後の大作『豊饒の海』に少なからぬ影響を与えた。

(池田)

100 浜松中納言物語 安田躬弦書入本

江戸時代後期写 袋綴 四冊

薄黄土色無地表紙。縦二五・八、横一八・三厘。

左上に白題簽を貼り、「濱松中納言物語 壹」同「貳」  
「三卷」「四卷」、内題「濱松中納言物語一」

「四」。但、虫損のため全部裏打ち修補の際、天地と背を少々切断。本文毎半葉一〇行書写、歌は改行約一字半下げ、二行目は地の文に続く。全巻に朱の頭注・傍注、句読点、濁点を加え、僅かながら墨の頭注も見れるが、朱に二種あるが如し。各巻背見返しすべてに「佐竹義祇公之姫君 惠明院殿之從弟(異綴ノ妹) 抹消家寿姫之筆 嘉永年間の人」と一杯に墨書されている。義祇(一七六一—九二二)は秋田新田藩(秋田藩の支藩)第四代藩主。惠明院殿とは第六代藩主の義純で、「從弟」を抹消して「異腹の妹」と訂正してあるが、從弟(從妹カ)が正しい。義祇ノ男義知(第五代藩主)に嫡男なく、義祇の弟義泰の男義純を養子としたので、義祇女とはいふことになるからである。ところが各冊末尾一杯に同文をしつこく書き連ねた意図は何か、また果して事実なのかどうか計りかねるが、恐らく、事実ではあるまい。本文を書き誤つた場合に、白や灰色の顔料で塗り消して書き直すことが多く、それは江戸後期の国学者たちが屢々用いた方法である。その上、本文料紙も単なる楮紙、加えて麗筆とはいひ兼ねる。修補されてはいるけれども、本文表紙は原装であり、いくら二万石大名の姫君(年代不詳だが)とはいへ、あまりに質素過ぎるよう思えるからである。

もう一つ、朱注の一つが、嘉永元年より三一年前に歿した安田躬弦(二七五二—一八一六)の筆ではないかと思われるからである。躬弦は福井藩の藩医である一方、賀茂季鷹の門弟として歌学を修め、江戸に住して棗本と号した。躬弦の書入とするのは巻四の「ひ、きのいし」(甲類本「ひらきのゐし」)の朱頭注に一箇所のみ「躬弦按ちひきのいしの誤にや」とあるからである。この鶴見本の本文は乙類第四種本(E類)であり、共通脱行が三七箇所以上もある

末流本である。にもかかわらず更に言うなら、掲出本は、いわゆる清水浜臣書入本を踏襲する同系諸本の中で、書入が、その源流の形をしているように思えるからである。浜臣(二七七六—一八二四)は躬弦の二四歳年少、ともに江戸に住した医家、古典学者として親交があったのは、浜臣の文に「棗本称辞」(「泊泊文藻」所収)という躬弦への讃辞があることや、泊泊集雑下に悼歌が詠まれていることでも知られる。年令差を考えると、浜臣にとっては師の村田春海に近く、春海に疎まれていたらしい浜臣にとって心許せる先達であつたらう。そして乙類第四種本の殆んどが、浜臣本以下、さきの箇所を「ちひきのいし」(千引の石)として、躬弦の考働通りの本文になっているのが象徴的である。まず鶴見本巻一扉紙裏(本文巻頭の右面)に朱同筆で「この物語のうち、ひのもののみつのはま、つこよひこそ我をこふらしいめに見えつれ この哥をもて物語の名とせり。これはもと万葉集の歌もてよめる也。続後撰集十二恋 寄松恋 左衛門督通成 よそにのみみつの濱松としをへてつれなき色にかゝるなみ哉」とあるが、この一文は浜臣本をはじめ、村上忠順手沢本に至るまで、巻頭に多くの注が書き入れられている中の最初に、そのまま置かれている。

躬弦の筆蹟について調査するのを怠っているので、あるいは写しの可能性なしとしないが、その朱注は、引歌はじめ、たびたび本文の考働に及んでおり、写しであつたとしても、安田躬弦に発することは間違いない。もう一筆の朱が稚拙(内容は必ずしも幼稚でない)であるのに対し、これはかなりの達筆である。注の内容が、浜臣本とどう係わるのかなど、なお精査して報告したいが、今は見通しの一端を述べるとどめる。

(池田)

101 栄花物語断簡 卷二四(わかばえ)

鎌倉時代後期写 (伝藤原家隆筆) 一葉

斐紙。縦一六・五、横一四・五。列帖装冊子本のオモテ面であろう。枇杷殿妍子の大饗の記事で、現存諸本のいずれとも一致しない本文を一〇行一六字程度に写す。

栄花物語の古筆切は現在一五葉ほどが知られ卷二五・二七に九葉が集中する。卷二四の断簡として、また藤原家隆(一一五八—一二三七)を伝称筆者とする唯一のもの。本文の特異さも注目されよう。今その一例を引く。

・なとそのたまはせければ……かうおほしめすさるへきことそかし (掲出断簡)

・なとおほしの給ひければ……かうおほしめすさまなりかし (梅沢本)

・とおほしの給ひければ……かくおほしめすへきよなり (異本系の代表本文 富岡本)

筆跡から見て家隆よりは一時代下る鎌倉後期写か。朝倉茂入の極札「従二位藤原家隆卿 我あるをり」(印)を添う。 (高田)

(釈文)

我あるをりとく見むなとそのたまはせ

ければこれはまほしていやしからぬ人

なれはかうおほしめすさるへきこと

そかしかうてひは殿の宮には廿二日

のよさり三日のあか月などにそさとの

人くまいるこむ廿二日にしん殿のひ

むかしのたいなと御さうそくす関白

殿の大饗にことにかはるへきことにあ

らす御ひきいてもの、ほとかはり又かた

ちめのはしめひんかしのたいにつかせた

102 栄花物語断簡 卷一二(玉の村菊)

鎌倉時代末期写

卷二七(衣の珠) (伝冷泉為相筆) 軸装 二幅

イ卷一二、玉の村菊

斐紙。縦一七・〇、横一五・三。列帖装冊子本のウラ面に相当。栄花物語の古筆切で卷二〇以前のものはごく少なく、掲出の切のほか二葉ほどが報告される。梅沢本勘物に「宇治殿御愛物母子共夭亡事」とする部分で、左大将頼通の妾永頼四女が所生の男子と前後して死去する記事を、一〇行一六字程度に写す。西本願寺系本文に梅沢本系本文の混入した異本と評価され(松村博司『栄花物語の研究 補説篇』)、鎌倉末期の写しであろう。伝称筆者を同じくするものの、次の断簡とは別手。

口卷二七 衣の珠

斐紙。縦一六・六、横一五・三。列帖装冊子本のオモテ面であろう。卷二七冒頭、小一条院妃寛子や尚侍嬉子の逝去後を語る。卷二七の切は掲出の断簡の他に伝二条為明筆の切が二葉知られる。梅沢本と一致するところも多いが富岡系本文に近づく部分も持つ一種の混合本か(松村前掲書)。なお最終行末尾の紙面の荒れは、おそらく「かへし」の三字を削去したもの。 (高田)

(釈文)

さたにあらはとおほされけるにいまは

そのほとになりていてゐていみしう

いのりなとし殿ものなとつかはしてき

よきことおほしおきてさせ給にそ

のきしきありてよろつにさわきける

ほとにちこはむまれたまては、わうせ

ぬとの、しるあはれなることかなとおほ

しのたまはせけるほとにきみはおとこ

におはしければうれしうもなと

きこしめすほとに二三日はかりありて

(卷二二 玉の村菊)

院の女御かむの殿などの御ことの

あさましうあはれなれはことしの

秋はさかの、はなもくちをしき

にほひなりれいはいゑくせむさい

ほりはなみる人おほかれはこそを

のつからをかしきこともあれあは

れにてすきもていけはよみ人

しらす

ひとしれす心をのみそのへにやる

はなみる人もなき秋なれは

(卷二七 衣の珠)

103 駒競行幸絵詞 文政一一年写

(狩野養信模写) 卷子 一軸

紅鬱金色緞子表紙。紙高三七・七。金欄包みの本軸。題簽に「駒競行幸絵詞 狩野晴川院模写」とあり。見返し、薄黄土色に金採箔撒き。料紙、楮紙に更に厚手楮紙にて裏打ち。駒競とは、『栄花物語』第二八番目の巻名である。万寿元年(一〇二四)秋、後一条天皇が関白頼通の邸宅高陽院で催された駒競に行幸した折りの模様を描いたのがこの絵巻で、鎌倉期作成の原本残簡が静嘉堂文庫(絵のみ。重文)と、久保惣美術館(絵と詞。重文)とに分蔵されており、図録(小松茂美編『日本の絵巻』)であるなら容易に見ることができる。また一方、近年紹介されている同絵巻断簡が数葉あり、これらは南北朝期ま

で遡る模本ではないか（上野憲示説）ともいう。時代は下って江戸後期、その原本を求め奔走した絵師たちがいた。結局原本の閲覧は不能であったが、古図模本を博搜し、絵柄を分折して、栄花物語本文は勿論、『小右記』などの記録を駆使して、それぞれの場面を特定した上、絵師たちが分蔵していた古図模本を再び模写したのである。考証は原本の作者や詞書筆者にも及び、精緻を極めるが、絵の模写と併せて上下二巻、その筆者は晴川院狩野養信おきののぶ（一七九六一八四六）である。夙に東京国立博物館に所蔵され、絵を除く本文は、明治四〇年刊の和田英松・佐藤球著『栄華物語詳解 首の上』「諸家考説」に翻印されており、絵も松村博司著『栄花物語の研究続篇』の口絵に掲載（但、モノクロ）されている。養信は木挽町狩野家出自の伊川院栄信の嫡男、会心斎、玉川とも号し、江戸城障壁画を夥しく描いた狩野派最後の大家であると伝えられる。東博本下巻末によると、「文政十一年首夏 法眼養信識」とあり、文政十一年（一八一八）は養信が家督を継いだ年に当るが、この模写を含めた卷子は、二部作成されたらしい。本学蔵本はその上巻に当り、絵が五図、文は東博本と殆んど一致するが、一箇所継ぎ誤りが認められる。考証文（養信は同絵巻の復原を目指したので「補訂駒競行幸絵詞」と呼ばれる）の内容は上記諸著書に譲るが、興味をそそられるのは絵である。

原本たる静嘉堂蔵残簡は、養信によると享保一四年（一七二九）善悦なる者によって模写され、養信はそれを再模写しているが、原本残簡はその後火災に遭い、前半部を失ったばかりでなく、残存部にも損傷が及び、補筆されたのである。東博本と並んで掲出本は、その焼失部を補い、かつ、原本焼け残りへの補筆が実に杜撰であったかを露呈させている。例

えば焦げ跡について原本は高陽院の門前に松明たきまきをかざした男が駆けつける姿で始まっているが、焼失前はその前に檳榔毛二輛を中心に馬や牛、大勢の人たちが群れていた図が一メートルもあつたことがわかる。そして松明の男の真上、門の脇に立っている男が原本では綱の切れ端を手に左を向いているが、実は馬の手綱を持って馬の方角、右を向いていたのを、補筆によって構図を変えてしまったのである。往時のままに華美な姿をとどめるといふ久保惣本についても、不審がある。高陽院東門で東宮が降りた車から牛を放したありさまを描く絵柄で、原本は極彩色にすべての人物、衣裳に欠損なく美々しく描かれている。ところが、東博本下巻所収の同図も原本とほぼ同様ながら、掲出本と東博本上巻に模写されている同じ箇所の絵は、淡彩は模写様式の一つとしても、右上にいる女性は髪、中央の僧侶の右にいる小児は足（東博本が頭であるのがまた不審）だけが見え、車の左に三人いる女性は衣裳の一部らしきものが残っているに過ぎない。これは善悦の見た原本がそうになっていたことを示すもので、古図と呼ばれるその親本は、久保惣本の南北朝期の模本でもあつたのであろうか。要するに門外漢にはよくわからないが美術史家による一層の解明（梅津次郎の論考がある）が待たれる。ただそうした欠損部を丹念に描きながら、古雅、端麗な絵であるのは、養信の腕前が優れているからでもあるが、原図の持つ風韻を伝えるものであると言えようか。（池田）

#### 104 水鏡 江戸時代前期写

列帖装 三冊

紺地に松・秋草・土坡等を描いた金泥下絵の紙表

紙。縦二三・四、横一六・七種。押発装あり。表紙外題、中央に金泥霞引斐紙題簽を押し「水鏡 上（中・下）」と墨書、本文とは別筆。見返し、霞文様の金紙。

各冊巻首に目録を置き、每半葉一〇行一九字程度、漢字平仮名交りで漢字には多く振仮名を施す。墨付各々五一、四九、四七丁。本文料紙、厚手の斐紙。

水鏡の諸本は大きく専修寺本・蓬左文庫本の系統と前田家本の系統とに二分、前者の末流には古活字版さらに慶安頃刊かと推される整版本が属する。掲出本は専修寺本系であるが、益田宗「水鏡—古活字本と整版本と—」（『国語と国文学』三五—七）で指摘された古活字版・整版に特徴的な本文のくずれを持たず、書写年代こそ若干下るものの、兩者より早い段階の本文を伝えている。「青谿書屋」（大島雅太郎）の蔵書印あり。（高田）

#### 105 平家物語 零本 室町時代末期写

袋綴 二冊

藍色無地紙表紙、縦二二・四、横二一・六種。痛み多く補修を加えるも原表紙か。中央に蠟箋外題を押し「平家物語 卷一（二）」と墨書、卷一本文と同筆のようである。内題同じ。每半葉八行一七字程度漢字平仮名交り、卷一と二とは別手で、卷一の方が老筆らしい。目録なく章段ごとに改行しないで書き通す形式。内容は通常の分巻と同じく、卷一内裏炎上、卷二蘇武までを写す。

全巻にわたる朱の書入れあり。これは少くとも二段階に及び、早い時期に章段の始まりを示す合点と章段名、遅れて片仮名傍訓・合符等を記す。章段の区切れは必ずしも諸本と一致しない。



横幅を大きくとった堂々たる写本で、覚一本系本文を持つ。室町時代の伝本として貴重だが、卷三以下を欠くのが惜しまれる。(高田)

106 平家物語抄出 大原御幸 慶長一七年写

卷子 一軸

藍内曇斐紙に朱・銀泥にて草花を描き、金金泥霞引を施した表紙。紙高三五・〇糎。見返し金紙。外題なし。内題「小原御幸」。

本文料紙、具引きの斐紙、長さ九〇糎以上の特漉料紙四枚継ぎ——第一紙九二・八、第四紙は少々短く八〇糎——題・奥書を含め一一四行に写す。各行一七字程度漢字平仮名交り、灌頂卷大(小)原御幸の段の流麗な抄出本である。末尾に「慶長拾七年九月十一日」の書写奥書、その下に縦四・一、横三・三糎ほどの楕円形朱陽刻印を押すも印文不能読。最終第四紙は約一六糎の余白あって唐木軸に付く。本文を検するに「草顔淵巷に流」は「滋」の誤、「鳥飼中納言維実か女大納言佐局」は「女」と「大納言」の間に「五条の大納言国綱の養子先帝の御乳母」を脱したものであろう。また「汝は阿波の内侍にてあるか」(諸本にこそあるこさんなれ、にこそあんなれ)が変った表現であるほかは、慶長中刊漢字片仮名交り古活字版所謂覚一本系流布本とほぼ同じ系統の本文となっている。なお「聖衆来迎落日」の「日」の末画と「前」の部分に剝離が見られ、これを補筆する。紙背には剝離したと思われる料紙を糊付。類例の少ない大型卷子本で、あるいは絵巻詞書として抄出したかとも考えられるが未勘。書写年時の判明するところ、貴重である。(高田)

107 異本平家物語断簡 長門切

鎌倉時代末期写(伝世尊寺行俊筆) 一〇葉

斐紙。紙高三〇糎をこえる卷子本の断簡で、一々の切の寸法については後掲翻字部分に示す通りである。現在のところ最長の断簡は二二行四六・七糎(「たかまつ帖」)だが、二紙を継いだものなので元来の紙幅の推定にはあまり役立たない。天地に界高二七糎余の淡墨界を施し一行一八、九字書写。大ぶりの紙面に世尊寺流の能筆が映える。いずれの断簡も一貫した調子でゆるみなく書写し、ままた朱合点あり。

「新撰古筆名葉集」行俊の項に「平家切 巻物 上下横界アリ」と見え、「長門切」の称は「見ぬ世の友」の付箋による。長門本平家物語とは関係ない。すべての切が世尊寺行俊(？)一四〇七を伝称筆者とし、古筆切にしばしばおこる伝筆筆者のゆれのないのは、相当量の卷子本が組織的に分割されたことを意味するのかもしれない。書写年代については研究者によって認定に差があるけれども、行俊よりは古く、その祖父行尹(二二八六—二三五〇)あたりが時代的にはふさわしい。行俊に擬せられた理由不明、卷子本の段階で行俊の奥書識語の類でもあったものか。おびただしい平家物語の異本中増補(読み本)系諸本特に『源平盛衰記』との親縁性がよく指摘され、その祖本的な要素が強いとも言われる(藤井隆「平家物語異本平家切管見」松村博司先生喜寿記念国語国文学論集)。諸本のいずれとも重ならない独自の異文を持つことや、現存最古の本文資料であること等その意義は大きい。現在四〇葉ほどが知られ、掲出の断簡一〇葉五六行(うちハは中京の実業家稲木栄三氏の蔵として報告されたもので、昨年市場に出、

当館の獲るところとなった)は、最大のまとまりである。後掲翻字は一応「源平盛衰記」の巻の順にしたがい、なお未勘の切一葉の分を最後に置いた。各切の極札につき略記する。

イ 墨流し小紙片に伝称筆者名を記すのみ。古筆家のものではない。

ロ 古筆了栄(一六〇七—一六七八)極。裏書の「卯正」は寛文三年(一六六三)か延宝三年(一六七五)の正月。

ハ 古筆了栄の極。

ニ 畠山牛庵極。初代(一五八九—一六五六)か二代(一六二五—一六九三)か未考。

ホ 浅井不旧・古筆了泉(一七四〇—一七八五)極。

了泉の裏書に「甲午 十」とあり、安永三年(一七四一)〇月と判明する。

ヘ 朝倉茂入(初代)・神田道伴(一六七八—一七四九)極。道伴の裏書に「庚子 八」とあり享保五年(一七二〇)八月の鑑定。

ト 古筆了仲・古筆了珉(一六四五—一七〇一)極。了珉の裏書に「戊寅 極」とあり、元禄十一年(一六九八)と知れる。

チ 朝倉茂入(初代)極。

リ 古筆了音(一六七四—一七二五)極。裏書に「己亥 極」とあり、享保四年(一七一九)を示す。

又 古筆了珉の極、裏書に「切 乙亥 七」とあり、元禄八年(一六九五)七月である。(高田)

(釈文)

イ 卷一七 始皇帝燕舟<sup>并</sup>咸陽宮事

逃籠たりけるかいかにして始皇帝を亡さむと思ふ心は切なりけれども可随き兵なかりければ只思を積り明かしくらしける程に

始皇帝も宿意ふかき敵なりければ四海に

宣旨を下して樊於期か首を取てまいらせ

縦二九・七、横一一・一 糶

口 卷一八 文覚清水状天神金事

つかはさむといふこれら悦て賢く申出て  
ける紙は候とて下品の紙二三枚取出したり

文学取寄てみるまゝ、にきたなき奴原の  
紙からかな人のしなをば消息をもて見

る事也よき紙を尋てまいらせよかし  
只今に物まうけてとらせむするそとてな

縦三〇・二、横一二・九 糶

ハ 卷二六 祇園女御事

魂を消す無疑き鬼形にこそ手に持てる物は聞ゆ  
る打出の小鎚になむめりあなおそろしく

とて各々逃あへり忠盛北面にて折節御共に供  
奉

縦三〇・三、横七・〇 糶

ニ 卷二七 信濃横田川原軍事

先立たるを五六段はかりにて馴並て引組て  
馬よりとうと落たり重光も大力のかうの者

なりければさいの七郎を取て押へて頸をかく  
に水もさわらすきられにけり重光主の首

敵の馬のと付に付たるを伐落して敵の首に

縦三〇・〇、横一一・二 糶

ホ 卷二八 源氏追討使事

れは木曾は関の山をかためさせて暫く越中の  
国府にやすらひけり

越前国住人平泉寺長吏齋明威儀師當国住

人稻津新介越中国には野尻河上石黒殿加賀

国には拝師富樫か一党等寄合々評定しけり

木曾殿平家追討の為に越中国府御坐なり

縦二九・八、横一二・五 糶

へ 卷三五 粟津合戦争

名乗て懸出たり千野太郎か申けるは何の十

郎にてもあれ敵をは嫌ふましとてまちかき

程に責寄て太刀を抜て戦ひければ千野太郎

か手に懸て原十郎被誅にけり同国上宮の千野  
七郎光重も兄弟鼻を並て戦ひけるか敵四

人切殺して我身も打死してそ失にける小  
縦二九・三、横一二・六 糶

ト 卷四二 屋島合戦 付 玉虫立扇与一射扇事  
けり又舞前とも云者也桃李の粧うつ

くしく芙蓉の顔こまやかなりければ

西国にても被召具たりけるを被出て此  
扇をも立たりけり平家方に又被儀ける

は九郎は傾城にめつる者にてあんなれば  
ちかつく事もあらむす便宜よくは射て

とれとて弓の上手を一人のせられけり其射

縦三〇・六、横一四・八 糶

チ 卷四二 同

ゑ仕候ましいかにと申候に源平御合戦か、  
る晴の軍庭にして此程の仰を蒙候

事は弓矢取身の望も願ふ所の面目とは存  
候へともあの扇を若射損候ぬる物ならば

君の御為助宗か為世関へもいか、候へきさ  
れは御計もや候へかるらむと申ければ

道理なりとと皆人舌をそならしける判官  
殿もしはしは無音にておはしけるか只射給

縦三〇・二、横一六・九 糶

リ 卷四二 同

ありけれとも此女房美翠の簪青黛の  
眉墨そうはの眼丹果の唇桃李の眉ひ

楊柳の姿絵に書とも筆も及かたく

そ覚へけるたもとは風に翻て蘭麝の  
匂をよそにおくり簪顔に乱るれば紅顔

縦三〇・六、横一〇・三 糶

又 未勘

たるは時に取ての面目とそ覚へける其次

に美作国住人豆田六郎と云者此もよき射手  
にてありけるか思様こそありつらめ鎧を

は着さりけり小具足はかりにて黒つかの矢  
負て御供候とて船にゆらりと乗うつる射

縦三〇・五、横一〇・二 糶

108 さごろも 奈良絵本 江戸時代前期写

袋綴 三冊

濃藍地に金泥草花文または海浜模様表紙。縦一

六・三、横二三・五 糶。金泥朱題簽に「さごろも  
上」下。見返し、本文と共紙に金切箔・砂子

撒き、金泥草花文。平安後期成立の『狭衣物語』  
より、傍系の話である飛鳥井姫と狭衣大将（ここ

では中将）との恋を潤色し、お伽草子に仕立て直  
した作品。諸本によって異同が甚だしく異なつて

おり、冒頭部からして「北野天神の御とき」（慶応  
義塾図書館蔵）「さごろもの大将」、「むかしくわん

むてんわう（桓武天皇）の御とき」（同蔵慶長写  
本）、「むかしきんめい（欽明）天わうの御時に」

（赤木文庫蔵丹緑本）のほか、「中ごろ」あるいは  
単に「むかし」で始まる本があり、おのずから五

系統に分けることができる。本書冒頭は「むかし  
きんめい天わうの御時に」とあり、前掲丹緑本と

ほとんど同じ本文であり、さまざまな結末の伝本  
があるうちで、これも姫との間に生まれた「わか

きみの代にはさはかしきことなく、天下あんおん  
にめでたくおはしけり。かゝる事ともすゑのよの

物かたりにつたへんとしるさる、なり」と終つて

いる。丹祿本はこれより更に「これを聞見ん人々は」云々という三行ほどの唱導的な文が加わっているものの、やはり同文である。絵は上巻五図、中巻三図、下巻五図であるが、中巻は二図が切り取られている。冒頭部の、狭衣が笛を吹くと「天人あまくたりたまひて」の絵など、比較的丁寧に描かれている。(池田)

109 てんじん 下巻 奈良絵本

室町時代末期写 袋綴 一冊

表紙、共紙。本文料紙、斐紙。縦一七・八、横二五・四。題簽は殆んど擦り切れ、その跡の上右脇に打付の小字で「てんじん」と墨書。本文、每半葉一五行、但、第三図、第四図の前は散らし書きにする。上巻はないが、本文は『室町時代物語集第一』所収、長谷川巳之吉藏(笹野堅旧蔵)本と下巻が一致するので、恐らくは上巻も同じであつたろう。北野天神縁起に発する菅原道真が時平と対立し、内裏に放火したという濡れ衣を着せられて、遠流の末に配所の太宰府で薨じるや、怨霊が都に上つたという所より下巻が始まる。挿絵の配置も長谷川本と全く同じ五図で、第四図の、叡山の法性房が参内し、不動の法を祈ると、さしもの菅丞相も「くものうへにぞあがりたまふ」とある絵が見開き二面になっているのも同一である。濁点が打つてあるのは後人の所為であるが、奈良絵本としては、本文の筆蹟より見てやや古い書写にかかり、室町末期には廻りうるであろう。絵も、適宜漢字を宛てて示すと「菅丞相が」祭文を書いて立て、御幣を挿みて山に登り、巖の高き所に立ち直り、梵天帝釈に随喜の涙を流し」のあたりを

描いた第一図や、比叡山法性房に現われ、「わが思ひの色を見給へとて、御前に柘榴あり、御口に入れ嚙みつぶし、そばなる障子に吹きかけ給へば、火焰となりて燃えあがるを」の第二図はじめ、それぞれに稚拙ではあるが、古雅であると言ふべきであろう。(池田)

110 扇の草子断簡 室町時代後期写

(伝後花園院句当内侍筆) 一葉

斐紙。縦三〇・六、横二二・〇。綴穴跡および紙面の汚れ方から見て、列帖装冊子本の丁のオモチ面に相当。扇絵毎に和歌一首を配した所謂『扇の草子』の奈良絵本断簡である。和歌はいずれも新古今集卷三夏に見える著名なもの。

扇の草子は室町後期以降一〇点ほどの作例が残っており、三〇首程度の小規模な絵巻から一〇〇首以上に及ぶ大作まで伝本の数の割にその種類が多い。また和歌も勅撰集を主体とするもの、謡曲・狂言に引かれた出所未詳歌と一致するもの等様々で、扇絵も濃彩の手のこんだ作風が見られるかと思えば、軽く略画風に流した例もあつて、冊子一面につき二扇から四扇と描かれる扇の数も異なる。掲出の切は室町後期にさかのぼりうる大型奈良絵本の貴重な作例。和歌のあり方や料紙寸法から言えば、高津古文化会館蔵の屏風に貼られたもの(もと縦三二・四、横二三・〇。纏の冊子)や浄照坊蔵奈良絵本切(縦三一・八、横二二・六。纏)等と近い。

朝倉茂入の極札に「後花園院句当内侍」と見え、勿論筆者を特定しうるものでないが、絵巻詞書の極めに時折見られる名ではある。(高田)

(釈文)

ほと、きすこすへまつほとはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし  
わすれめやあふひを草にひきむすひ  
かりねの野への露のあけほの

うかひふねあはれとそみるもの、ふの  
やそうちかはのゆふやみの空

111 枕草子 古活字版 寛永中刊

袋綴 四冊

雷文地に唐草を艶刷りした紙表紙。縦二七・九、横一八・九。相当の古表紙ではあるが改装後補。藍内墨題簽に能筆の外題「清少納言枕草子卷二(四)」、第三・五冊の分は落剝。内題「清少納言卷二(一五)終」(尾)。每半葉一三行二二字程度、章段名三字下げとする。各巻の内容と丁数は左の通りである。

第二冊 集はくかきまさりする物 五三丁  
第三冊 あはれなるもの寺は 五三丁  
第四冊 陀羅尼はくわろきものは 三七丁  
第五冊 下かさねはく見くるしきもの(含跋文) 二四丁

川瀬一馬『増補古活字版之研究』の第三種、寛永中印行の一三行古活字版で、異植字版が多い。各冊見返しに当該冊の内容を標目し、句読点(。・)・濁点(・)・傍注・頭書を施す。すべて同筆と覚しき墨書。また第五冊「時奏するいみじうをかし」と「きらくしきもの」の間に「いとしろきみちのくにかみ」以下二九行分の長い頭書があ

るのは、古活字版の本文たる能因本にはない本文を他系統より補ったものであろう。(高田)

112 徒然草 卷上 古活字版 慶長中刊

袋綴 一冊

黒色無地紙表紙。縦二六・二、横一九・四。題簽落剥の跡あり。古表紙だが改装か。

内題なく毎半葉一行一九字程度、漢字平仮名交り連続活字を使用して印刷、章段ごとに改行を原則とするが、序と第一段とは切れ目なく続ける。墨付七七丁、徒然草を上下二冊に書写もしくは印刷した場合、普通の分巻である第一三六段「くすしあつしけ」まで存。「増補古活字版之研究」の元和寛永中刊一行本に相当する。

朱句読・濁点・傍注等を付す。これは前半三八丁あたりまでに多く、後半は墨による書入れが主となる。

徒然草は中世にさかのぼる写本に乏しいが、江戸時代になると大流行を見せ、古活字版だけでも一九種を数える。いずれも烏丸本系本文を持つよううで、掲出本も例外ではない。「残花書屋」「賓南」(戸川浜雄)、「春和堂」(京都の古書肆、若林正治)、「月明荘」(反町弘文荘)の印を押す。(高田)

113 土佐日記 藤原定家筆臨模本

江戸時代初期写(伝冷泉為広筆) 列帖装 一冊

薄茶色地花柄緞子表紙であるが、甚だ擦り切れている。外題、内題なし。縦一五・六、横一六・六。見返しに縦一六・二、横七・二の楮紙を

貼り、「冷泉為廣筆/冷泉二代 紀貫之土佐日記」と墨書され、下部に「丹羽藏弁」(丹羽圭介)の角

朱印を捺す。果して圭介が書いたものか定かでないが、為広(一四五〇—一五二六)は下冷泉家が分れてから数えて上冷泉家三代目、為相からでは第六代に当る。正二位権大納言に至ったが、定家筆天福本伊勢物語を臨模した(書陵部蔵本)為和の父、定家筆源氏物語柏木(尊経閣蔵本。国宝)などを臨模した(桃園文庫蔵本)明融の祖父という視点より考えると、確かに冷泉家に所蔵されていた土佐日記を為広が模写したのは一応首肯される。紀貫之自筆の土佐日記が鎌倉時代に京の蓮華王院に存在し、これを定家・為家父子がそれぞれ臨模して、為家は貫之の筆蹟さながら精確に臨模(大阪青山短期大学蔵本)したのに、文暦二年(一二三五)の定家模写本は、末尾の一部を模写したり、本文の字形に貫之筆蹟の影を強く落としながらも、冒頭部の「をとこもすなる日記」を「をとこもすといふ日記」と改訂したことなど、国文学界ではあまりにも有名なので贅言を要しない。が、本学蔵本が為広の手になる模本かという点、残念ながら、そうではなさそうである。本文料紙、斐紙。

定家原本が九、一〇行書写、一行一四、五字であるのに対し、これは字母も概ね同じに模写してはいるが、一〇行一六、七字と字詰が異なっている。その結果、第一丁表から原本の「はつかあまりひとひの日のいぬの時に」の傍点部を「ひとひの」と写すなど誤脱若干はみとめられるが、それが為広書写説を必ずしも否定するものではない。表紙も古色蒼然として、為広より古い時代かと思われるほどであるが、料紙が、到底その頃のもの

と思われない。まずは室町末期、あるいは江戸初期に漉かれたとおぼしき赤めの斐紙で、原本に依

るなら当然写すべき貫之自筆模写部分や定家の識語、更に、文暦二年の定家奥書や、紀氏に関する動物がないのである。恐らくは一部があったのであろうが、本文墨付尾丁に次ぐ二丁が、巧妙に切り取られているのが作爲的である。推測するに、そこには定家識語等の写しのほか、本書を模写した年次や人物をも証しうる奥書などがあったのであろう。表紙は、別の古いものを利用したに違いない。それは旧蔵者以前のことかと思うが、古鈔本と思わせるための悪質な改竄がなされたのである。定家筆原本が冷泉家の秘庫にある間は、家の者以外閲覧は許されなかったであろう。尊経閣叢刊複製解説によると、定家原本が前田家に入ったのは同家三代利常(一五九二—一六五八)の代で、前の所蔵者は連歌師玄陳とも玄的ともいう。玄的は里村紹巴(一五二五—一六〇二)の孫で、高野辰之旧蔵模写本には玄的の兄「玄陳所持」と注記があった由、前田家の有に帰してからは貴重第一の書籍として再び秘蔵されたのである。模本なので筆蹟による鑑定ができず、料紙のみで時代判定を下すには甚だ困難を感じるが、以上述べたことを総合すると、為広ならずとも、冷泉家の者がこれを模写したとする根拠が本体に全く見えない以上、俄かには信じがたい。模本の存在は他にも二三知られることから、本書は原本が冷泉家を出て連歌師の所にあつた期間にでも模写されたものの一つであろうか。とはいえ、ともかくも定家筆蹟模本であるに違いなく、原本は現に存在するが、その風韻を味わうよすがとはなるであろう。

(池田)

114 土佐日記 契沖自筆付箋縫付本

寛永二〇年刊 袋綴 一冊

紀貫之著。承平五年(九三五)成立。白茶無地の表紙の「土佐日記 全」とある刷題簽に、水戸彰考館の印文未詳雲形角印を捺し、さらに第一丁表右下に「彰考館」の瓢形朱印を捺す。縦二七・〇、横一七・六糎。刊記「寛永二十歳孟春吉辰／二條通觀音町風月宗智刊行」。末尾に新たに一丁を加え、川瀬一馬氏が、入手した事情などを識した上に署名・押印。この第二丁表と第一五丁裏に各一枚、第二七丁裏に二枚(元米一枚)の契沖筆考勘の紙片を、それぞれ糸で縫付けてある。

契沖は依嘱された『万葉代匠記』のほかにも、自著を徳川光圀に進上したが、それらの補訂を含め、古典全般に関する新見を、刻々と水戸に書送った。これらの多くは彰考館において纏めて冊子や卷子に貼られて保存(『契沖雑考』、ただし戦災で焼失)されたが、一部は彰考館所蔵の当該書に、このように縫付けられた。内容は、相応寺に関する考勘などで、三手文庫蔵契沖自筆書入同版本とほぼ内容が一致する。なお、岩波版『契沖全集』第一六卷(昭和五一年五月刊)に掲出書の付箋が翻印されている。(池田)

115 明月記断簡 鎌倉時代前期写

(藤原定家自筆) 軸装 三幅

『明月記』は説明するまでもなく、鎌倉時代の歌人にして古典学者であった公卿、藤原定家(一一六二—一二四一)の日記である。この自筆日記は定

家から嫡男為家を経、為家の後の妻阿仏尼へと伝わり、子の冷泉為相が継承して今日冷泉家に五十卷所蔵されるほか、他に三、四卷と、残簡・断簡が諸所に遺存している。その特有な屈曲した文字は、定家の歌人としての評価の高まりとともに珍重され、冷泉家の子孫ばかりでなく模倣者さえ輩出したが、自筆本が近時、影印本として刊行され始めたのは、資料的には勿論、定家の人間性を伝える意味でも、研究史上画期的なことと言える。この自筆断簡イは正治元年(一一九九)七月二〇日の条、ロは建保元年(一一二二)五月二四日の条と内容より判明するが、ハは嘉禄年間(一一二五—二七)と推定され、僅か二行とは言え、従来、内容が知られなかった佚文である。すなわちイは定家三八歳、ロは五二歳、ハは六〇歳半ばと、それぞれ十余年づつ隔てた筆蹟の変化を見てとることができ、イの「神宮文書」のあたりなど、全体に既に定家特有の筆致がうかがわれる中で、若々しさの残る伸びやかさを感じる。内容はすべて翻印したが、イロは辻彦三郎著『藤原定家明月記の研究』所載「明月記断簡目録」一七二葉の中に含まれており、自筆本でなく、写本を基にした国書刊行会本本文を一部訂正できる点も貴重である。ハは、

弘暁、帰宅して髪を洗い、精進を始めたところに「覚法眼」が来訪したが、今月は忌月(肉親の命日がある月)なので逢わなかつたというのである。覚法眼とは、仁和寺の光台院御室道助法親王に仕えていた僧侶覚寛で、主に法親王の用向きで屢々定家を訪問していることが『明月記』に見える。

この覚寛が「覚法眼」として登場するのが嘉禄元年からで、同三年十一月からは昇任して「覚法印」となるので、ハは、その間の記事であろうとの推

定である。但し、嘉禄元年の前数年の『明月記』が欠落していたり、覚法眼が、単に「法眼」として登場することもあるので、完全には断定できない。しかし筆蹟を見ると、イロより遙かに老熟しており、嘉禄年間とすると、同元年七月九月か同三年五、六月の二十三日になる。他はすべて二十三日の記事が写本で伝えられていて、たまたま覚寛が登場したりする日もあるが、ハの文が見られないからである。定家六四歳の秋か、六六歳の夏に当る。但し、『明月記』建久一〇年(一一九九)二月二十二日の条に「抑今月忌月也」とあって、これは建久四年二月十三日に入滅した母親に対するものと思われ、忌月が概ね両親に限られるとすると、二月か、元久元年(一一〇四)十一月三〇日に薨じた父俊成の十一月となって、いずれにも該当しない。そうすると嘉禄元年の前年か前々年の、明月記が現存しない記事の二月か十一月にあつたとするか、同母の兄としてはただひとりの成家が、承久二年(一一三〇)六月四日に没しているの、これに当るなら、嘉禄三年六月二十三日となる。が、成家とは生前とかく疎遠であつたので、結局、確かなことはわからない。なお口には多くの人名が見えるが、中に「大納言通光」の名がある。通光は久我通親の嫡男で、一方、日本曹洞宗の開祖道元は通親男との伝えがある。そうであれば、7の対大己法断簡筆者と通光は異母兄弟となるであろう。各寸法はイ縦三一・四、横六・八糎、ロ縦二七・七、横一四・五糎、ハ縦二八・四、横四・一糎。(池田)

(釈文)

イ

廿二日

天晴



縁何更竟吳山曲 更是吾君座下花  
経為題目仏為眼 知汝花中植善根  
はちす葉のにこりにしまぬこゝろもて  
なにかはつゆをたまとあさむく  
醍醐御製  
山千葉蓮  
石山寺池蓮  
源為慮  
良僧正

118 和漢朗詠集断簡 色紙朗詠切

鎌倉時代後期写(伝世尊寺行能筆) 軸装 一幅

茶地と朱地の斐紙継ぎ、縦二四・七、横各々五・五、三・七糎。朱地の方には銀切箔の跡が見える。おそらく紙背装飾の映ったものである。巻物雛からもと卷子本と知られる。

漢詩の下に作者名「管三品」を書かない調度的写本と思われ、色紙を継いだ華麗な典籍であったことをうかがわせる。巻下古京528・529をおだやかな書風で写し、作品の内容が連続するので世上に時折見かける呼び継ぎの例ではない。ツレは管見に及ばず。

伝称筆者世尊寺行能(一一七九—一二五五)は当時随一の手書きとして聞え、歌人でもあった。掲出の断簡は行能真跡とされる承久三年(一一二二)猪熊撰政初度上表(陽明文庫)より温雅な書きぶりを見せ、行能より一時代下った鎌倉中後期のものである。伝行能筆の色紙朗詠には『大手鑑』所収の切があるが、寸法に差あってツレではない。なお一行目「紅葉定昔」、諸本「紅花」とする。花(平声麻韻)が正しく葉(入声葉韻)では平仄が合わない。

古筆了意(一七五—一八三四)の極札「世尊寺殿行能卿緑草如今  
いそのかみ」を添う。

(釈文)  
古京

緑草如今麋鹿苑 紅葉定昔管絃家  
いそのかみふるきみやこにきてみれば  
むかしかさし、はなさきにけり

119 城西聯句 古活字版 元和四年刊

袋綴 一冊

墨色無地紙表紙は後補。縦一三・三、横一九・三糎の横本。外題、鳥の子題簽を押し「城西聯句」と墨書、内題「城西聯句序」。

首尾に扉一丁、相当の古紙だが、原態を伝えるものではあるまい。匡郭なく、縦一一・〇、横一六・〇糎ほどの面に毎半葉一三行一字印刷。版心は花口魚尾あって「九千句 上(下)」とし、下方に丁付。上九三丁、下九六丁、ただし現在一冊に合綴する。破損あるも補修済み。

巻首に嘉靖己亥(一八八〇)の豊南禺(存叔)序、尾に弘治二年(一五五二)當時利根第一の評の高かった惟高妙安(一四八〇—一五六七)の跋、刊記「元和四歲霜月日／＼兵衛開板」。古活字版中序・跋・刊記と揃った珍しい例、この聯句は寛永年間にも二度印行される。

細川家家老井上宗信の子として生れ、三条西公条・里村紹巴とも交渉のあった五山僧策彦周良(一五〇一—一五七九)の聯句集で、天文八年の天明時豊南禺に序を乞う。九千句の雄篇だが周良一人の手になるものではなく、聯句の下に「江」の作者付けが見え、江心承董との合作である。江心は天龍寺三秀院の住僧、永禄年間(一五五八—一五七〇)に寂した。

なお周良には梅谷との聯句三千を収めた『三千句』があり、これも元和七年に「二兵衛」の手に

よって同体裁の本として出版。城西聯句の称は、洛西天龍寺塔頭妙智院に周良が住したことによる。(高田)

120 風俗通残簡 元版 大徳九年刊

粘葉装 一冊

仮表紙包背装、縦三二・七、横二三・三糎。仮表紙の題簽に「風俗通七卷 へ五枚 宋版 精印／＼無破損並蔵書印」とあるが、宋版ではなく元版。

風俗通義は後漢の應劭が、事物の名称を明らかにし、一般人士の誤った考えを正そうと著わした書で、略して風俗通と呼ぶ。元来は三〇巻とも三二巻あったとも言われるが、宋代で既に一〇巻が残るに過ぎなかった。この残簡は巻七の第一裏、三、四、五、六と八の表までの五枚、宋末元初の整本通り、版心を中央に糊としにした粘葉装の原装のまま保存されているのは珍重すべきである。大抵の伝本は、糊を好む虫の害を恐れ、後世これを版心のところで逆の二つ折りにして、糸とじに袋綴として改装されているからである。

本体料紙の寸法は縦三二・一、横四一・八糎。四周双边、匡郭内寸法、縦二二・三、横一四・九糎。有野、毎半葉九行一七字。版心は線黒口、双魚尾、題「風俗通七 一」―「八」。版木に裂け目の認められることがあるものの、摺は良好で、仮表紙題簽の注が指摘するように「精印 無破損」の、ゆったりとした風韻ある残簡である。従って

宋版のように見えるが、「殷」「桓」といった宋代天子の諱を欠画(天子への礼で、その漢字の一面を省くこと)にしていけないので、宋版とは認めがたい。『北京図書館古籍善本書目』子部に、「風俗

通義十卷へ元大徳九年無錫州学刻明修本 黄廷鑑跋 一冊 九行一七字 細黒口 四周雙辺とある書誌(細黒口は線黒口と同じで、版心の上部に縦に黒線のあること)がほぼ一致するので、この版の明代再刻本と考えて誤りあるまい。大徳九年(一二〇五)は南宋滅亡後の元では二代皇帝成宗の世、北京図書館編の『中国版刻図録』に書影が載せられていないので最終的な判断は下しがたいが、比較して確定する機会もあろう。寡聞にして本邦にも他に同一伝本があるのを知らない。(池田)

### 121 烏台正譌凌雲詩経(詩集伝)

明万曆一四四年刊 袋綴 八冊

薄茶色無地紙表紙。縦二四・三、横一四・六。左肩に素紙題簽を押し「凌雲詩経 一(一八)共八」と墨書。装訂・外題そして後述の箱とも122詩経墨巻と同体裁、したがって伝来を同じくするものである。

見返しに元の封面を切りとったものが糊付けされ、四周雙辺、匡郭内縦一七・〇、横一〇・〇。間に「烏台正譌/凌雲詩経」と大字で印刷、その行間に細字刻「圈点明悉一字無差」、上層横一行「三槐堂王乾字繡刊」。内題「詩経集伝序」「詩経巻一(一八) 朱喜集伝」。

南宋淳熙四年(一一七七)の朱熹原序あって本文四周雙辺、匡郭内縦一九・一、横一二・三。有界、每半葉九行一七字。上方に幅一厘ほどの棚、三行ごとに縦線を刻し、主として集伝にはない音注を付す。版心、白口魚尾、「国風一卷(一八)」、下方に丁付。●の句読を付刻、書入なし。各巻丁数二二(含序)、四四・六五・二〇・八三・四〇・

二九・三五丁。

最終丁オモテに「福建監察御史敷(二字分空白)因覲坊刻詩経集注」で始まる刊語六行を刻し、同丁ウラに蓮牌木記「萬曆丙戌年季夏月/書林三槐堂乾字梓」。萬曆一四年(一五八六)の刊行である。刊語によれば監察御史敷某が世上流布の詩経集注に誤まりの多いのを憂え、解元(科挙郷試首席)陳先生に委託して校正出版に及んだもの。

「詩集伝」を「集註」と表記するのはよくある例、またこの書の印行が盛んでかつ誤りも多かったことは「四庫提要」に「書林刊版亦最夥、其輾転伝譌亦最甚」と見える通り。封面書名の「烏台正譌」は監察御史(異称烏台)の訂正の意。

書肆三槐堂は明清交替期まで営業活動を行い、弘光年中(一六四五)『経国雄略』出版、掲出本刊行者の王乾字の他、王介蕃・王登百の名も知られる。

漆塗被蓋造の箱に収む。蓋表に朱塗文字「凌雲詩経」。(高田)

### 122 翰林評選皇明曆科郷会墨巻

明万曆二五五年刊 袋綴 四冊

薄茶色無地紙表紙。縦二四・八、横一四・四。表紙題簽を左肩に押し「詩経墨巻一(一四)共四」と墨書する体裁は121詩集伝と同じ。

封面に匡郭内縦一九・四、横一一・六。四周雙辺枠を刷り、「伝世輝珍/怡慶堂余秀峰梓/詩経墨巻」、郭外上部に「皇明曆科」と横に刻す。

萬曆丁酉(二五年、一五九七)略日升序。内題「詩経伝世輝珍墨巻」(序)、「翰林評選皇明曆科伝世輝珍詩経墨巻」(目錄)、「翰林評選皇明曆

科郷会墨巻国風巻之一」(巻首)、しばらく最後の表記によって書名とする。

本文、四周雙辺、匡郭内縦二一・二、横一二・四。每半葉一行二六字、無界。郭外上部に短評を付刻。版心、魚尾一を刻しその上下に「伝世輝珍墨巻」「国風一卷」の如くあって丁付。各冊の内容と丁数は、国風一二九(含序、目錄)・小雅九九・大雅九一・三頌一〇一丁。最終丁ウラに蓮牌木記「萬曆丁酉歲孟冬/書林怡慶堂梓行」。

弘治壬子(五年、一四九二)より万曆乙未(二三年、一五九五)までの科挙(郷試・会試)の答案(墨巻)の優秀なるものを選ぶ。書名「郷会墨巻」の由縁。

各人名の上に「解元」(郷試首席)・「経解」(同二位)・六位)・「会元」(会試首席)・「会魁」(同六位)・一八位)等の席次を冠し、各条末に校閲者の評。五経題中詩経に関する墨巻がその内容にしたがって配列され、上海出身で戸部尚書を極官とする陳所蘊から、浙江提学副使に至った武進の人薛応旂まで三七二通、序者略日升の分も萬曆乙未分に含まれる。巻首に鄧以讚・郭正域・唐文献・蕭雲挙いずれも翰林院に出仕の校閲者を掲ぐ。

清朝の墨巻出版の例はかなり存するが、明の確たる刊記を有する掲出本の如きは稀なものではないだろうか。序者・評者は勿論答案作成者も科挙を upper で通過した秀才揃い、ほとんどが史乘に令名を馳せた人物なので、試験合格年次・成績・答案の具体的な内容が判明する資料として、受験参考書的存在ながら科挙制度のみならず伝記研究上も貴重であろう。121と同じ体裁の被蓋漆塗箱に収め、蓋表に朱漆にて「詩経墨巻」と記す。(高田)



朱無地紙表紙。縦三〇・〇、横二二・八糎。押  
 発装あり。外題、左肩に楮紙題簽を押すも破損落  
 剥甚しく、不能読の冊多し。「文選 一之二(一五  
 十九之六十)」と墨書したものであろう。本文六〇  
 卷を二卷一冊の形式で合冊、目録一冊を加え三  
 冊の印行、古い杉箱に収む。

四周単辺、匡郭内縦二三・三、横一七・二糎。  
 目録の冊のみ有界。毎半葉一〇行二二字、割注多  
 し。版心、花口魚尾に「文選 卷一(一六十)」と  
 して丁付を印刷。朱の句読・合符、墨の返点・片  
 仮名訓・傍注が全卷にわたって存する。

最終冊末に「右文選板久漫滅」以下の紹興二八  
 年(一一五八)南宋明州刊本の刊記を転載し、その  
 後一行あけて、「慶長丁未<sup>(マ)</sup>沽洗上旬八葉 板行  
 畢」、以下余白。これは所謂直江版「文選」の刊記  
 である。

朱表紙大型本の堂々たる書品、前掲の刊記のみ  
 を見るならば直江山城守兼統(一五六〇—一六一  
 九)が要法寺において印行せしめた直江版「文選」  
 の如くである。しかし慶長一〇年(一六〇五)九月  
 以前に着手し同一二年に刊行の直江版は、目録の  
 みならず本文のすべてが有界一〇行本、かつ版心  
 も慶長期にままだ例のある四つ魚尾であり、掲出本  
 とは一目別のもの。直江版を踏襲し上杉家あたり  
 で重刊された「文選」に、「慶長丁未」の刊記に続  
 き——この一行で三七丁オモテ終了——、改丁し  
 て「寛永二乙丑孟夏上旬日板行畢」と刷る寛永二  
 年(一六二五)版があり、掲出本はこの刊記を持た

ないけれども版式より寛永二年版と認められる。

では直江版刊記のみを引用し「寛永二乙丑」以  
 下の刊記のない異版かと言えば、さにあらず。問  
 題の丁を眺めるに版心部分のすぐ後で本文料紙の  
 切り取りがあり、同一料紙・同一版式の半丁分を  
 継いでいる。したがって原刊記を有する三七丁オ  
 モテ及び版心が残り、寛永二年の刊記を含む同丁  
 ウラは切られて別の部分と替えられたことになる。  
 さらに今一度全冊を見なおすと第三冊末すなわち  
 卷四の本文が最終丁オモテで終了、ウラの部分が  
 なく直接後見返しに糊付けしてある。これを問題  
 の個所と比較するに、卷四末から何も印刷してい  
 ない半丁分を切り取り、卷六〇末の寛永二年刊記  
 の半丁と入れ替えたことが判明する。当然同一料  
 紙・同一版式となり見のがしやすいたところだが、  
 それにしてもなかなかに訝えた腕である。勿論寛  
 永版を直江版に見せかけるための詐術。

なおこれを収める箱の蓋表には見事な隷書で  
 「直江兼<sup>(マ)</sup>継校定慶長槩本／六臣注文選冊一冊」と  
 記し、偽妄の古く行われたことを示している。

「読杜草堂」「寺田盛業」「字士弘号望南」(以上  
 寺田望南)、「小汀藏書」「をばま」(以上小汀利得)  
 の蔵書印あり。(高田)

## 124 白氏長慶集 銅活字版 明正徳八年刊

袋綴 二四冊

表紙は近代の改装で、紺地に金の揉み箔撒き。  
 縦二五・九、横一七・二糎。但、改装に際して天  
 地と背を若干切断し、本文の全部に間紙を挟入す  
 る。外題なし。内題、「白氏長慶集」。目録二冊、  
 本文七一巻二二冊。上下単辺、左右雙辺、郭内寸

法、縦一九・一、横一三・一糎。卷首に元稹の序  
 を置き、卷尾に、後周、陶穀の「龍門重修白樂天  
 影堂記」なる文(広順三年—九五三—記)を後序の  
 如く置くが、本文が銅活字版であるのに対し、元  
 稹序とともに、これは木版(整版)である。陶穀は、  
 宋の太祖趙匡胤が受禅せんとする時に禪文なきを、  
 懷中より詔書を取り出して進めた故事で名高い。  
 刊記はないが、陶穀述の文のあと破損があつて修  
 補してあり、半葉欠落しているので、そこにあつ  
 たか。白口(版心の上部が白いこと。黒口に対す  
 る)、版心魚尾の上に「蘭雪堂」とあり、下に「白  
 氏文集(卷・丁数)」とある。下の魚尾に当る箇所  
 は単なる横線。「北京図書館古籍善本書目」集部に  
 「白氏長慶集七一巻目録二卷へ唐白居易撰 明正  
 徳八年(一五二二)華堅蘭雪堂銅活字印本 二四冊  
 八行一六字白口 左右雙辺」とあるのに当り、同  
 館編「中国版刻図録」掲載の書影と比較して全く  
 同版である。本文、毎半葉有界八行、毎雙行八行  
 一六字詰。前述の如く、本書卷尾は陶穀の文末以  
 下が破損し、上下単辺、左右雙辺の匡郭が補写さ  
 れているので明らかではないが、北京図書館蔵本  
 解題に依れば、「後印正徳癸酉歲(一五二二)錫山蘭  
 雪堂華堅活字銅版」と印行されていたという。こ  
 こにある華堅の伝は詳かでないが、蘭雪堂活字本  
 は同時代の華遂による会通館活字本と並んで、明  
 代活字本の代表的なものであり、『中国版刻図録』  
 に依つても、『藝文類聚』(正徳一〇年刊)、『蔡中  
 郎文集』(同年刊)が見られる。唐の詩人、白居易  
 (白樂天)はあまりに著名であり、平安朝のわが国  
 文学に与えた影響は計り知れないが、『御堂関白  
 記』長和二年(一〇二二)九月十四日の条に「摺本  
 ノ文集」の記載がある。中国でも人口に膾炙した

白氏文集が夙に印行され、渡来したと知られるが、本邦に宋版は現存せず(北京図書館には伝存)、この正徳八年銅活字版は、日本では他に、大倉集古館蔵本(大正六年に収蔵された董康旧蔵書の一。但、第二四冊末の陶穀述「影堂記」三丁を欠く)が知られるのみ。第三冊本文第一丁表(元楨序)右側に、下より、「汪士鐘讀書」、「吳寛」、「趙洞」(陰刻)、「太琛」(陰刻)、の各角朱印と「汪」の丸朱印を捺すほか、卷二一卷首匡郭の上に「醒老」なる陰刻角朱印を捺す。汪士鐘は清の蔵書家として名高い。本文全編に、墨、朱、稀には青墨で傍点を施すことがあるのは北京図書館蔵本と同じで、欄外頭書に考勘が往々に記されているのととも、いずれも中国人の手になると思われるのが注意される。白氏文集の本文研究は精緻に進められているが、本書の存在に言及したものは花房英樹著『白氏文集の批判的研究』のほか、あまりに乏しい。

版心のみでなく、内題・尾題にも「白氏文集」と記す巻も多く、事実七十一巻あるので、そもそも白氏長慶集(五十巻)と称するのがおかしいのである。卷二十一初に白居易自身の後序を載せる。いわゆる南宋本を受ける「先詩後筆本」で、北宋本系の「前後続集本」との関係論ずる上に不可欠な資料としてなお精査を要するであろう。成化二一年(一四八五)の「新鑄字跋」を持つ宮内庁書陵部蔵朝鮮銅活字本とは全く別種であり、刊記を佚するとはいえず、完存する極めて稀観に属する伝本と言えよう。(池田)

## 125 大慈寺八景詩歌断簡 畠山切

南北朝時代写(伝二条良基筆) 軸装 一幅

藍内曇斐紙。縦三〇・八、横一三・〇。天地に細く金界を施す。界高約二八。卷物皺あつて卷子本の断簡たることを知る。美麗な料紙に漢詩と和歌とを書写した畠山切は、漢詩部分の筆者を二条良基(一一三二—一一三八)と和歌のそれを今川了俊(一一三二—一一四一)と伝えるが、共に別人の手であろう。ただしこの切に関する了俊の役割は、後述のように極めて大きい。

従来畠山切についての知見はごく少なかったが、近年堀川貴司「大慈寺八景詩歌について」(『国語と国文学』六七—六八)の明かにしたところによれば、康暦三年(一一三三)、今川了俊の発起にかかると日向国志布志の大慈寺八景詩歌がその内容であり、義堂周信を顧問とし、弟子柏庭清祖が編集にあたり、詩を主体に歌を従としたものであつたらしい。詩を主体に歌を従としたもので、春屋妙葩・絶海中津ら五山の名僧達が詩を作り、二条為遠・斯波義将・九条忠基らが歌を詠じた。

大慈寺八景詩歌の背景には、北九州の支配をかけたため了俊の対島津氏工作拠点が志布志であつたこと、京都でも斯波義将・春屋妙葩らの新体制が始まつたこと等が成立の契機として存した。詩と歌とは料紙こそ同一であるものの、別個の卷子本に仕立てられた。しかし現在両者を呼び継ぎ合装した例(翰墨城・たかまつ帖など)もある。

南北朝の詩歌集清書原本として貴重な畠山切は、現在詩九首、歌三首の存在が報告されており、掲出の切は『水荃』一二収録図版の原本である。(高田)

(釈文)

雲擁神龍紫氣温 重々金碧給孤園 天開罨画

山川麗 春入陶鈞草木繁 桃萼蒸霞紅世界柳

花吹雪白乾坤 東風独立供双眼 杜宇声中日

向昏 南禅質中天府人号大建

参考1 梗概源氏物語 与謝野晶子自筆草稿

昭和初年写 折帖 二帖

十一、二歳より読み始めたという与謝野晶子の源氏物語への情熱は並大抵でない。明治四五年二月より刊行された『新譯源氏物語』四冊は、いわば晶子を通した「語り」であつたので、原文に則した現代語訳をも望む声にこたえて、本格的な改訳を進めたが、それがほぼ完成した草稿数千枚は、大正一二年九月の関東大震災で灰燼に帰してしまつた。それでも晶子は挫けなかつた。紫式部や源氏物語への発言は研究史上にも確かな足跡を残したが、夫、寛と昭和一〇年三月に死別するや再び訳業に挑み、遂に同一三年一〇月より一年がかりで『新々訳』全八巻を刊行した。亡くなる三年近く前のことで、世に言う与謝野源氏がこれである。展示した梗概源氏物語は、源氏五四帖を四百字詰原稿用紙七一枚に圧縮した草稿で、きびきびした文体と、歌人としての鋭い感性とで、よく作品の本質を突いており、登場する女たちへの切り込みが深いのもさすがである。ただ総ルビ原稿でありながら長い間知られないうちに、平成五年一月、鶴見大学文学部創立三〇周年記念に、池田の解説を付けて影印・翻刻本として刊行され、朝日新聞夕刊(93・2・22)に報道されたので全国的な反響を呼んだ。晶子がこれをいつ執筆したのか、な

ぜ生前に発表されなかったのかは、右の解説でも詳かにできなかつたが、諸般の理由から、関東大震災よりはあと、昭和二年九月に荻窪村へ引越す以前の富士見町時代ではなかつたかと今は考えている。震災で焼けた草稿の完成を熱望し、大正の始めから毎月原稿料の前渡しをして援助し続けた小林天眠に贈られたとしたら、最もふさわしいと思うのは空想だろうか。なお影印・翻刻本は武蔵野書院より、ついで刊行されている。(池田)

参考2 源氏物語絵 空蟬巻 奈良絵

江戸時代中期筆 額装 一面

源氏絵は平安時代後期より制作され、それぞれの時代の画風を反映して、さまざまな形態・様式を生み出し、江戸時代では絵入源氏物語の出版も盛行した。五四帖の巻ごとの構図も次第に固定していき、この空蟬の場面もその一つである。源氏は伊予介の後妻である空蟬を見染めて以来、逢うのを拒む彼女に弟の小君を通じて言い寄り、小君の手引きで家に忍びこむと、折しも先妻の娘である軒端萩と暮を打っているさまを垣間見る、という絵柄である。奈良絵とは奈良絵本と呼ばれる室町中期以降、江戸時代に夥しく作られた極彩色の絵入本の様式(77・108・109参照)を指して言うが、呼称の由来は定かでない。金箔の雲形に菱格子などの空押しをして、衣裳や襖絵など細部まで細かに描いた華やかな装飾画であるが、もとは屏風に貼られていた一部であろうか、随分と派手である。(池田)

参考3 源氏物語屏風 桐壺・胡蝶巻

江戸時代中期筆 四曲一隻

源氏絵の屏風はかなり遺存しているが、多くは一隻に数巻の場面が金箔の雲形で仕切られた空間に、散らし描かれているが、これは向って右に桐壺、左に胡蝶の巻が描かれている。本来は一双あったのであろうが、桐壺の画面は、七歳ごろの源氏が鴻臚館の上段に座り、高麗人の相人に相を占わせている図である。胡蝶は太政大臣に至った源氏が豪壯な六条院を建て、三六歳の晩春、池に龍頭鷁首の船を浮かべ、秋の町に住む秋好中宮に仕える女房たちが、紫上のいる春の町へ、船樂の奏される中を舟でやってくる場面と、翌日、中宮の方で季の御読経が催されたので、紫上が、迦陵頻と胡蝶の舞装束をさせた童女たちを差し向け、仏に花を献じた上、舞わせたという図が一つになっている。作者は誰と知られないものの、中央の松の木がいささか不自然である。たとえば鴻臚館の築地(土塀)を松葉で糊塗したり、しかも上方に伸びる枝ぶりが作為的で、素人目にも後補の筆が入ったと見てとれる。推定するところ、一双のうち一隻づつの片面にそれぞれ損傷が生じ、両者を繋ぎ合わせることで一隻をとどめるため、接合部分にかような手を加えたのではないであろうか。源氏屏風としてはやや小ぶりであるのに、人物や建物の細部まで精密に描かれており、古雅ながら華やいだ往時の気分をよく表現している。(池田)

# 古典籍と古筆切

## 鶴見大学蔵貴重書展解説図録

総持学園創立七十周年記念

鶴見大学大学院日本文学専攻博士課程開設記念

平成6年10月17日 発行

### 鶴見大学

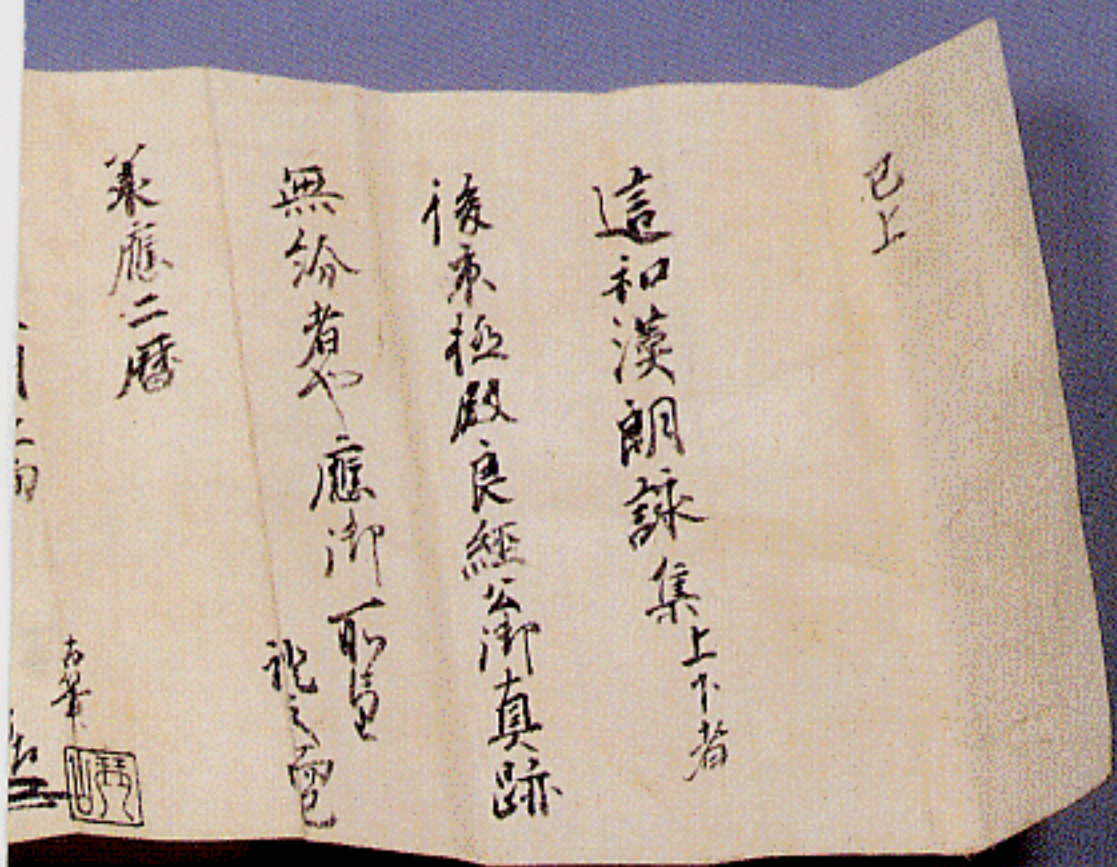
学長 高崎直道

〒230 横浜市鶴見区鶴見2-1-3

電話 045-581-1001

製作：神奈川新聞社

ISBN4-924874-07-8



正誤表

誤 正

75頁	102-イ・ロ		左右図版入れかえ	
88頁	中段	8行目	はかりそ → はかりを	
90頁	上段	17行目	大伴 → 大納言	
91頁	上段	6行目	遠山幽 → 遠鐘幽	
		下段	16行目	中将 → 中納言
		下段	17行目	なかつ → なかゝ
94頁	下段	8行目	こと→をしむ → こと→おしむ	
95頁	下段	29行目	〕と → 〕』と	
102頁	下段	17行目	(かさ) イトオホク (いてき) → (かさ) モイトオホク (いて)	
		26行目	いてきにけり → いてにけり	
104頁	下段	23行目	了佐 → 別家 (了任か)	
107頁	下段	21行目	全揉箱 → 金揉箱	
110頁	上段	26行目	給はめ → 給らめ	
112頁	上段	25行目	しのゐて → しゐて	
		中段	1行目	人のためし → ためし
		17行目	一一五三 → 一二五三	
114頁	中段	25行目	卷物難 → 卷物皺	
115頁	中段	4行目	河河 → 河海	
		13行目	大島居 → 大鳥居	
120頁	上段	28行目	など御 → などの御	
122頁	上段	6行目	金金泥 → 金泥	
123頁	上段	13行目	小鍵になむ → 小鍵なむ	
		30行目	国府 → 国府に	
		中段	29行目	眉 → 媚
124頁	中段	8・28行目	勾当 → 勾当	
127頁	下段	9行目	卷物難 → 卷物皺	
128頁	上段	1行目	更是 → 便是	
		9行目	卷物難 → 卷物皺	